
外に出なさい

コモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外に出なさい

【Nコード】

N9533M

【作者名】

コモン

【あらすじ】

人里離れたどこかのお城で、吸血鬼の主人とゾンビの従者が不毛な会話を繰り返す。

目的はお嫁さんだが、果たして主人は結婚できるのか？

それにしてもこの主人、色々と間違っている。

1・どれも駄目です

ふりしきる雨が窓を叩き、その音が遠雷と共に暗い部屋に響き渡る。目の細かい格子にはめ込まれたガラスの向こう側は暗く、室内のどの燭台にも炎は灯っていなかった。館を形作る石の冷たさが、室内に満ちている。

窓の表面に手を置き、その男ははあ、とため息をついた。

金髪碧眼のほっそりした顔立ち。華美に過ぎない装飾を施された服装はその男の身分の高さを表している。長い指の先には、わずかに先端を尖らせた爪が生え揃っていた。

「失礼いたします」

男の背後で声が上がリ、部屋の扉が開かれた。新たに現れた男は燕尾服を纏っており、主人に恭しく頭を下げる。

「こちらにいらしましたか。捜しましたよ」

声を聞いて、主人である方の男は後ろを振り返った。

直立不動のその従者は、顔や肉体の所々に苔が生えていた。血の通っていない肌は青白く、片方の眼窩には目玉がはまってない。虫も来ないような寒い僻地にいるおかげで、腐肉で出来た肉体には蛆の一匹も湧いていない。

「……なあ、ロジオン」

「何でしょうか？」

主人は窓を背にし、従者に向き直った。

「私は吸血鬼だ」

「左様にございます」

従者が頷くのを見て、主人は話を続けた。

「吸血鬼とは孤高な種族だ。だがそれは、種族全体の話であって私個人の話ではない。……なあ」

「なんででしょうか？」

いつになく真剣な声で言われ、ロジオンと呼ばれたゾンビは居住

まいを正して次の言葉を待った。

「……何で私にはお嫁さんが来ないのだ？」

今日もロジオンの主人はいつも通りだった。寤めるように、ロジオンは短く、厳しく言い放った。

「外に出ましょう。まずはそれからです」

1. どれも駄目です

吸血鬼伝承の残る、とある国の山の奥。人の足の届かない、厳しい寒さの中にそそり立つ針葉樹の森の中。そこに、ロジオンの主人である吸血鬼の住まう城があった。城壁も持たない小さな城だが、周りに生える木々が天然の防壁となっている。攻城戦などする時代はとうに過ぎ去っているが、城主を含め時代において行かれたようにその城はそびえていた。その最上階で、ロジオンと彼の主人は向かい合っていた。

ゴロゴロと鳴り響く雷の音が小さくなり、雨の音が静かなものに変わった。ロジオンの主人は真面目な顔になって、ロジオンの提案を却下した。

「外に出るのは避けたい。肌が焼けるからな」

「あなた夜でも出ないでしょ」

「月の光で焼けるだろう！」

「焼けませんよ。ただだけ柔肌なんですか」

激昂する主人に呆れながら、ロジオンは眉をひそめて主人を見た。従者として彼に目覚めさせられて数年経つが、未だについていけない部分がある。

「私ほどの美貌があれば女の方から寄ってくると思ってたのだが、客の一人も来やしない。一体私の、何が悪いんだろうな」

「社交性ですかね。あと、性格」

ロジオンの言うように、彼の主人は社交性に欠けていた。というよりは、滅多に外に出なかった。城が辺鄙な場所にある以上、出会

いを望むなら遠出する必要がある。誰かが来るのを待つという選択肢は、ロジオンから見れば間抜けとしか言い用がなかった。

「自慢じゃないが私は秀麗眉目で容姿端麗、ブ男という顔でもないはずだ。ま、比べる対象はお前だけなんだけどな」

「殴りますよ。そんなだから、私以外のゾンビは皆出ていったんですよ」

身体のあちこちを腐らせたゾンビのロジオンは、簡潔に言って話を切った。

ゾンビを作る術を持つ吸血鬼が、身の回りの世話をさせるために従者を作る事はよくある事である。ただし、その従者達に愛想を尽かされる主人などそうはいないだろう。

彼の主人のこの文句は、今に始まった事ではない。ロジオンの主人は、いつものように独身である事を嘆いていた。この事に比べれば、作ったゾンビがほぼ全て彼から逃げた事も、何十年前から屋敷の外に出ていない事など、彼にとっては些細な問題らしい。

「さて、今日も真剣にお嫁さんを得るための計画を立てよう」

彼がこんな事を言い出すのも昔からである。特に最近はその話題がよく拳がり、聞く度にうんざりしていた。顔に出すのは従者としての自分の主義に反しているので、ロジオンは努めて平静を装う。

「またですか。よく飽きませんね」

「当然だろう？ 私にとつての、言わばライフワークだからな」

言いたい事は山ほどあったが、あえてロジオンは黙っておいた。

得意げな主人に話すに任せておけば、すぐにこの場をやり過ごせる。そう判断しての事だった。

主人は片手を持ち上げ、五本の指を立てて見せる。

「とりあえずプランは用意した。この五つだ。」

- 1 . 両親に別れて貰い、再婚させて義理の姉妹を得る
- 2 . 両親に頑張ってもらい、歳の離れた妹を作ってもらう
- 3 . メイドの募集をする。可愛い子限定で
- 4 . 可愛い女の子のゾンビを作る

5 お前に女になってもらう
どれがいい？」

「どれも最低ですが、5だけは断固辞退します」

「奇遇だな、私もそう思っていた」

「疲れた気分になり、ロジオンはうなだれた。主人の間違いを正しておかねば、後々いらぬ苦勞を背負いそうだった。

「というか、何で1と2が身内狙いなんですか？」

「……血のつながらない姉妹と恋仲になる話が多いだろ？」

「それはフィクションです。目を覚ましてください」

主人は呆れたように肩をすくめ、小さくため息をついた。ロジオンから言わせれば、そんな態度を取られる筋合いはない。

「お前は浪漫が分かってない」

「あなたが常識を知らないんです。大体、ご両親はどちらにいらっしやるんですか？」

「……どこだったかな？」

「忘れたんですか。連絡手段は？」

「……それもないな」

「思いつきでものを言うのをやめて下さい。それに、よく考えたら2は肉親ですよ？」

「問題ないだろ。私ぶっちゃけ、母上と結婚したいと思ってたぞ？」

「どれだけあどけない頃なんですか。そして、それからどれだけ成長してないんですか」

「言わずにはおれず、ロジオンは話すだけ話した後額を押さえた。

「何だ、頭痛か？というか、脳みそ残ってたんだな」

「あろうがなかるうが、痛むものは痛むんです」

「このまま部屋を出たかったが、彼は残りの選択肢についても物申しておきたかった。

「3も4もおかしいでしょ。上手に出られない相手を狙う事に疑問はないんですか？」

そこで主人は、言葉に詰まった。どうやらこの点においては、引

け目はあつたらしい。

「……言葉だけならやらしくないぞ？」

「実態が最低です。どんだけやらしいんですかアンタ」

ロジオンは言いたい事を言い終わると、主人の反論を待った。その主人はというと、ロジオンの言う事に納得しているらしくううむ、と顎に手を沿えて視線を下に向けていた。聞き分けだけはいい主人に小さく頭を下げ、ロジオンは退室しようと踵を返す。

「ああ、待ってくれ」

主人の呼び止める声が聞こえ、ロジオンは動きを止めた。

「何でしょうか？」

「一つ聞いておきたい事がある」

「何なりと」

主人はロジオンに一言、短くこう尋ねた。

「お前、私の事嫌い？」

「失礼しました」

ロジオンは扉の裏に滑りこみ、主人の部屋を後にした。

1 ・どれも駄目です (後書き)

何か連載しようと思って始めました。

あまり新しくない話になってしまった気がしますが、独自の味が出せるよう、頑張っていきたいと思います。

いつまで続くか分かりませんが、お付き合いの程よろしくお願いいたします。

2・泣かないでください

2・泣かないでください

うららかな陽気が森に満ち、鳥の声が晴天に響き渡る。木々の葉も張りを取り戻したかのように青々としており、生気に満ちている。気候が暖かくなり、その温もりは石で出来た冷たい城の中にも届こうとしていた。窓から差し sunlight が床に敷かれた赤いカーペットと、その上空で舞い踊る埃とを照らし出す。昇っていくようにも見えない。細かい埃くずを、城の主人は部屋の日陰の中からぼんやりと眺めていた。

椅子に座って見ている内に、彼の中に鬱屈としたものが溜まりだす。ひらりひらりと舞っている埃のくずが、自分を笑っている気がしたからだ。一つ一つが勝手気ままに動いている様子が、ふとした拍子に、相手を取り替えながら社交ダンスをしているようにも見えてくる。知らず知らずの内に、彼の口から苛立ちがこぼれた。

「こいつら、社交ダンスを踊るのか……。私の中で、一人寂しい私の中で！」

「埃に何を言ってるんですか」

同じ部屋にいた従者のロジオンが、呆れたように呟いた。

彼等は共に、日の差さない部屋の角に身をひそめていた。主人は吸血鬼で、日に当たればたちまち砂になってしまう。ロジオンはゾンビで、身体が熱を持ってしまえば肉の腐食が進行してしまう。つまり二人とも、日光が苦手なのだ。

「とりあえずカーテン閉めますよ。このままじゃ掃除もろくに出来ません」

「待てロジオン、窓も開けるよ。あのアベック共を風で吹き飛ばしてやれ」

「器が小さすぎますよ。埃に嫉妬するとかどんだけ病んでんですか。

……窓は開けますけど、換気が目的ですからね」

釘を刺すように言うと、ロジオンは日光に当たらないように注意しながら窓に近づいた。天井近くのレールからぶら下がっている厚手の布を一気に引き、日光を遮断する。その後、指先だけをカーテンの外に出すようにして彼は窓の錠を解き、両開きのその窓を一息に押し開けた。

厚手のそのカーテンが窓の外へと裾を吸い込まれ、はたはたとしたためく。そのせいで閉じていたカーテンは若干だが開き、風に持ち上げられて、再び日の光がカーペットの上に落とされた。ロジオンのただれた皮膚もまた、陽光に晒される。

肌が熱を受けると生前の感覚を思い出すようでロジオンには少し嬉しく思えたが、それも一時の事。すぐに彼は身を引き、日向から逃れた。

彼のそんな様子を見て、主人が呟く。彼の興味は完全に自分の従者へと移っていた。

「今のお前、人間に見つかったゴキブリみたいだな」

「何です、それ？」

ロジオンはゴキブリを知らなかった。北方の出身だったし、この城にも周辺の森にも、ゴキブリは生息していなかった。

「……いや、知らないでいい」

「なら悪い事言っちゃった、みたいな顔しないでください。ちょっと予想できちゃったじゃないですか」

眉をしかめ、ロジオンは主人を睨んだ。その主人はと言うと、指と指とをつつき合わせながら、壁に飾られた自分の肖像画に、気まぐすそうに目をやっていた。

彼がナルシストな訳ではなく、城の主人が誰なのかを誇示するために描かれた絵だ。どこの城でも、当たり前のようにそんな絵は飾られている。この部屋にある絵には椅子に腰掛ける主人以外、誰も存在していない。

主人の全身を収めたその絵は、持て余した空白を土や樹木を思わせ

る濃い茶色で塗りつぶしていた。油絵の具の濃淡で埋められた広い余白のせいで、絵の中の主人はどこか寂しげに見える。絵を見ている主人本人も同情して、絵と同じ表情を浮かべた。

「あー、隣に嫁さん描き足したい」

素敵な恋がしたい、と同義の言葉を、ほぼ同じイントネーションで呟く。またか、とロジオンは小さくため息をついた。

「最近そればかりですね」

「そりゃそうさ。花も恥らうお年頃、恋に興味がなかるうか」

「ずいぶんタフな花ですね」

吸血鬼の長い寿命を揶揄するロジオンに、主人はうむ、と頷いた。その誇らしげな表情に、ロジオンは何も言えなくなる。語るに任そうという、やりすごしの精神が彼に芽生える。従者の諦観の表情にも気付かず、主人は揚々と喋り出した。

「生憎と今日はいい天気。一步出ればイエス様とご対面だ。お嫁さんを迎える前に迎えに来られては、笑い話にもならん」

満ち足りた顔をする主人に、ロジオンは半眼になってそうですね、と答えた。

「さて、外に出れないならば今日はオシャレについて考えてみよう
「オシャレ、ですか」

先日よりはよほど現実的で前向きな話題だったが、ロジオンにとっては答えに困る問題だった。異性に好感を持たれるために、服に気を使うのは決して間違った選択ではない。

しかしロジオンは、服飾に疎かった。今日の流行を知る手段が無いのもあるが、彼自身服に興味がなかったからだ。着るものも、いつも同じ燕尾服で他にはない。従者が主人に、いたずらにものを欲しがるのもみっともないと思っていたので今日まで文句は言わなかった。

そこでロジオンは、主人もまた、いつも同じ服を着ている事に気付いた。

「……他に服をお持ちなんですか？」

「見くびるなロジオン。私くらい変化に富んだ男なら他の服の十や二十、ちゃんと常備しているものだ」

主人の言葉にロジオンは首をひねる。主人の服を洗い、手入れをするのはロジオンの仕事だ。その彼には、一種類しか主人の服を洗った覚えがない。

「……まさか同じ服を何着も持つていたりとかじゃないでしょうね？」

「もちろん違うぞ。私は他にもたくさん服を持つている」

「私は今のそのお召し物しか知りませんよ？」

ロジオンの言いたい事を察し、主人は片手を軽く振って質問を打ちきった。

「そう言えば見せていなかったな。私には、お前にも内緒にしていた秘密のクローゼットがあるのだよ」

ふふん、と得意げに笑って主人は立ち上がった。部屋を出ようとする主人に、ロジオンも続いた。

主人の部屋を出、廊下を歩いて突き当たりにある階段を降りる。一階まで辿りつき、更に降りると主人は地下室への扉を開けた。入り口にある燭台に火を灯す。炎の明かりで奥が見通せるようになり、さらにその先にある別の燭台にも火を灯す。これを繰り返しながら奥へ進んでいくと、主人はロジオンを引きつれたままある部屋の前で足を止めた。

「え、ここって……」

ロジオンが驚いたのも無理は無い。そこは衣装室などではなく、更に言うとその部屋と廊下を隔てているものは壁と扉ではなかった。床から天井まで伸びた鉄の棒が規則的に立ち並び、その隙間から中の様子が見える。

石で組まれた無骨な部屋の中には、厚手の布をかぶせられた何かがあった。大きさや形から、家具の類だとすぐに分かった。その中身も、ハンガーで吊るされた服が並べられているのだろうと容易に推測できる。

「持て余していた地下牢にクローゼットを持ち込み、気に入った服

を中に吊るしておいたのだ。どうだ、無駄のないアイデアだろ？」
得意げに語る主人。一方、ロジオンには一つ懸念している事があつた。地下にあるこの場所は地上よりも涼しく、肌寒くさえ思えてくる。加えて、壁のあちこちからは地下水が染み出していた。風の流れも、殆どない。

「……えーと、ですね？その、着想は悪くない、とは思いますが、よ？」

「何だ、すつきりしない返事だな？何か問題でもあるのか？」

「えと、ですね……。まあ、見て貰った方が早いかと」

主人はロジオンの言葉に首をひねると、鍵のかかかっていない牢の扉を開いて中に踏み込んだ。そのまま服を隠す埃避けの布に手をかける。そこで主人はふと、ある違和感に気付いた。その布は記憶にあるものよりも重かつたし、さわり心地も良くない。

大した事ではないかと思ひ直し、主人はロジオンを見据えたまま、彼の前で埃避けの布を取り払った。見せつけるかのように大きく腕を振り、空中で布を翻らせる。

この時、主人にはクローゼットの今の状態など眼中になかった。ロジオンがこちらを見ているかどうかしか頭になく、手元を見ずにクローゼットの金属製の取っ手に指をかけて、一気にそれを引き開ける。

「どうだロジオン！」

誇らしげにそう言つて、彼はクローゼットの中に目を走らせた。

「これが私の、お気に、入り、の……」

主人の言葉は最初は勢いが良く、しかし、次第に尻つぼみになっていった。続く言葉がなくなったのか、ついには黙り込んでしまう。主人は目と自分が見ているものを疑うかのように、何度も瞬きして目の前のものをまじまじと見た。妙に重い音を立てて、布が岩の床に落ちて主人の手を離れた。

「ふ、く……なの？」

主人の目がロジオンに向けられる。ロジオンに聞かれても、彼も

返答に困っていた。ただ一言、事実を言うしかなかった。

「……どれも、もう着れませんか」

青錆色のクローゼットの中で、色鮮やかであったであろうたくさんの服は、その全てが黴の色に染まっていた。

「もう泣かないで下さいよ」

ベッドに顔をうずめて落ち込む主人に、ロジオンは困ったように言った。慰めの言葉は言い尽くしたし、そのいずれもが主人の心の傷を埋めるには力不足だった。よほどこだわりがあったのか、すすり泣く度に服、服と言う声が漏れている。

「私の、秘蔵のコートが、シャツが……」

「新しいのを買えばいいじゃないですか。何なら私が仕立てましょうか？」

「嫌だ嫌だ、あれじゃなきや嫌だーい！」

「子供じゃないんだから、バタバタしながら言わないでください。

ああもうメンドクさいなコイツ」

「お前には分からないんだ、この悲しみが！あと小声で文句言ったる！聞こえてるからな！」

なおも動こうとしない主人に、ロジオンは付き合い切れなくなってきた。うんざりした気分で窓に目をやると、濃い雨雲が湧いて空を被い隠そうとしているのが見えた。日差しが弱まり、風が湿気を帯びたものに変わるのが分かる。

気を紛らわせるのを兼ねて、彼は窓に近づき、カーテンを室内に引き込んだ。上から垂れたその布を抱えるようにして纏めた後、一枚ずつ窓を閉めて鍵をかける。腕を解くと、カーテンはだらんとレインの下で垂れ下がり、動きを止めた。

「よし、と。ご主人様、他の窓を閉めに行ってきます。帰るまでには立ち直ってくださいね」

「無理、もう無理。私ネバースタンド」

「タフな男がもてるそですよ。それでは失礼します」

そう言い残して、ロジオンは部屋を後にした。閉めかけた扉の隙間から、主人がバネのように勢い良く立ち上がったのが見えたが、ロジオンは扉を閉めた。

2・泣かないでください(後書き)

似たような経験が、私にもあります。

それにしても、これはコントとして成立してるんでしょうか。

3・思い出してください

3・思い出してください

「外に出たいぞ」

開口一番、主人はロジオンに向かってこう言った。

主人が思いつきでものを言うのはいつもの事だが、この発言はロジオンを驚かせた。白いシーツを敷く手が止まり、一つしかない彼の目が主人に向けられる。その主人は手持ち無沙汰な様子を隠そうともせずに、暇にあかせて部屋中をうろろしていた。

ロジオンの主人は、外を歩くのが大嫌いだった。月の光でも肌が焼けると信じていたし、何より馬車に憧れを持っていた。歩くのは馬に任せ、自分はそれに引かせた馬車の中で鼻歌でも歌いながら時間を潰す。それが主人の、貴族としてのこだわりだった。外を自分の足で歩くのは、平民のやる事だと常日頃から言っている。

ところが、この城には馬も馬車もない。主人に愛想を尽かして出て行った従者のゾンビ達が、全て持って行ってしまったからだ。

従者として一通りの事が出来るロジオンでも、一人では馬の調達も馬車の製作もままならない。なので、今この城には遠出するための設備が備わっていないかった。主人もそれを知っていたので、外に出たいなどとは口が裂けても言わないはずなのだ。

「ご主人様、頭でも打ったんですか？」

「さつきそこで転んでな。何で分かったんだ？」

主人は不思議そうな顔をして首をかしげ、ロジオンを見た。そのロジオンはというと面喰らったかのように黙り込み、そそくさとベツドメイクを終わらせた。

まさか本当にそうだったとは。頭を打ったせいで、少々思考に変化が起きているようだ。

返事をごまかすように、ロジオンは主人の振ってきた話題に食いつ

いてみせた。

「あ、いえ……。それはいいんですが、大丈夫なんですか？」

「何がだ？調子はいいぞ」

ロジオンはベッドのシーツを軽く数回はたきながら、窓の外にちらりと目をやった。その窓はロジオンのすぐ傍にあり、そこから差す光は部屋の真ん中にいる主人には届いていない。

西の山の向こうに沈もうとしている太陽は紅く、手前に見える針葉樹の森に暗い影を落としている。もう少し経てば、吸血鬼である主人が出歩くには最適な時間帯と言えた。加えて、今夜は新月だ。

「まあ、ある意味絶好の外出日和ですね」

夜中を指して日和というのもおかしな話だが、ロジオンはそう言つて話を合わせた。

「だろ？少々運動不足だったからな、たまには身体を動かすのもいい」

両肩を回して、主人は窓に近づいた。布越しの夕日の光が、主人の細面を赤く染める。

ロジオンは驚いた。主人が日の出ているうちに窓の前に立つなど、前代未聞の事だからだ。

日頃伴侶が欲しいと嘆いている事を考えると、これは良い兆候だと言えた。先日殆どの服を駄目にした時は、もう二度と外に出ないだろうと覚悟していただけに、ロジオンも素直にこの変化を喜べた。しかしこの後、彼は肝を冷やす事になる。

主人はカーテンを見つめ、その向こう側を見ようとするように目を細める。そしてその手を窓へ伸ばし、垂れ下がったカーテンを掴むと、一気にその手を横に広げた。

ロジオンは声にならない声を上げ、主人へと迫った。止まりつばなしの心臓が、この時ばかりは大きく跳ねる。なりふり構わず突っ走り、両手で主人を突き飛ばす。押された主人は紙切れのように容易く吹っ飛び、カーテンを離してカーペットの上を転がった。解放されたカーテンが、わずかに開いた後再びだらんと垂れ下がる。

主人は自分が何をされたのか、さっぱり分からなかった。従者に突き飛ばされる理由など、心当たりがなかったからだ。だからこそ彼は立ち上がると、倒れたままのロジオンを怒鳴りつけた。

「どういうつもりだ！」

「……こっちの台詞です。どういうつもりだったんですか」

ロジオンは立ち上がり、静かにそう言った。服の乱れを直そうともせず、主人と向かい合う。もしロジオンが一瞬でもためらってれば、主人は形を失い、消えて無くなっていた。

「夕日でも駄目なんです。砂になる所でしたよ！」

「何を言ってるんだロジオン、そんな訳ないだろ」

痛む肩をさすりながら、主人はロジオンの目の目に出て彼をにらみつけた。ロジオンの方が背が高いので、下から見上げる格好になる。

「砂になる？吸血鬼じゃあるまいし何を言ってるんだ」

「……は？」

「今度あんな真似をしたらただじゃおかんぞ。貴様の頭を、左半分坊主にしてやる、覚えとけ」

言うだけ言うと、主人は不機嫌なまま部屋を出ていき、扉を乱暴に閉めた。

ロジオンは主人を追わず、言われた事の内容を未だに把握しきれずにいた。左半分坊主にされる事など、ロジオンの頭の中には残っていない。主人がそう言う前には、彼の意識はある一言に集中していたからだ。

吸血鬼じゃあるまいし。

冗談でも吸血鬼が吐くとは思えない台詞だ。殆どの吸血鬼がそうであるように、主人もまた吸血鬼である事を誇りに思っている。転んで頭を打ったとも言っていた。

二つの事実が、やがてロジオンの頭の中で結びつく。

「自分が吸血鬼なのを忘れてる……？」

自分で言っておいて、彼にはその言葉が信じられなかった。

ただ、そうでなければ主人の愚行に説明が付かない。炎以外の明かりを嫌う主人が、望んで窓の外を見ようとするはずがないのだ。「だとすると、大変だぞ……。うっかり外にでも出れば」

背中を冷たい汗が流れた気がした。生理的な反応というのは、身体が死んでいても頭が覚えているものらしい。

外に出たがらない主人が外に出たいと言う。しかし、自分が吸血鬼だと忘れているため、何のためらいもなく日の下に身を投げ出すのは明らかだ。そうなれば、瞬間に主人は空を舞う羽目になる。間違っても外出などさせられない。ロジオンの、申し訳程度に残った脳みそが痛みを訴えた。やがて一つのひらめきが生まれ、それが彼の目的に変わる。

外に出すなら、夜だ。

今するべき事は、主人を城内にとどめる事だ。日が完全に沈み、青と黒で世界が染まる時間になれば主人を止める理由はなくなる。

ロジオンは策を講じるため、急いで自分の部屋へと戻った。

外の太陽は、ようやくその縁を地平線の上にそびえる山の上に重ねた所だった。

主人は軽やかな足取りで城の正門へと向かっていた。廊下に並ぶ窓の前を通る度、身体が熱くなる。気候が暖かくなったのだと思っっているのは本人だけで、実際は日光のせいで肌が焼け、表面が砂へと変わっていたからだ。人が気付かずに切り傷を作るように、彼もまたそれに気付いていなかった。陽気な気分で先を急いでいられているのは、砂になっている部分が薄皮程度で済んでいるのが幸いしていたのが大きい。寒風吹きすさぶ地にあって、その熱は主人の機嫌を浮き足立たせるものに変えていた。

「何だろうな、今日はやたらと気分がいいぞ」

一際大きく前に跳ね、主人は両足から着地。窓の前に立つと、狭い格子にはめ込まれた窓ガラスの向こう側に目をやった。

日が沈みかけているせいで、針葉樹の木々の根元は、雑多に生え

た雑草と合わさって麦わらのような色に染まっていた。所々でぴんとはねている枝葉も見られるが、ほとんどの草は背が低く、そのおかげで窓からでも木々の生い茂る様子が見通せる。歩くのにも不自由しなさそうで、だからこそ主人は外に出ようと先を急いでいた。「そういえば私、外に出た覚えがないなあ。なーんで出なかったんだっけ？」

疑問を持ちながらも、足は止めていない。角を曲がると、城の外と中とを繋ぐ分厚い木の扉が視線の先に現れた。

客人を迎える為にあるその空間は、二階と三階とが吹き抜けになつており、広いスペースを埋めるように柄入りの大きなカーペットが敷かれていた。彫刻を施された手すりに挟まれた広い階段が、客人を迎える位置でその根元を扉の方に向けている。高い天井に見劣りしないように、扉の大きさもまた裏口などのものに比べて一回り大きなものとなっていた。シャンデリアの蝋燭達が一帯を明るく照らし、壁の漆喰の色を温かみのあるものへと変えている。

真つ赤なカーペットを踏みつけながら、主人は外に出ようと扉に向かつて手を伸ばした。そこを開けば目を遮るものは、一切ない。距離が詰まり、細い指の先が扉の取っ手に触れるか触れないかの所まで迫る。

「ご主人様」

ロジオンの声に驚き、その手が止まった。振り返ると、広い絨毯の中心に唯一の従者が立っている。後ろに回した手に何か持っているらしく、黒いものはみ出ているのが見えた。隠されては主人も気になってしまい、彼の興味はロジオンの持つているものに向けられた。

「何だ、それは？」

ロジオンはわずかに口の両端を持ち上げ、隠していたものを前に差し出した。主人はそれを見て、眉をひそめる。

それは大きな面積を持つ黒い布で、特に特徴らしいものは見当たらなかった。強いて拳げるとすれば、裾に沿うように並んだ、前を

留めるためのボタンくらいだ。ロジオンの片腕に乗せられ、二つに折られている。

「あなたのために仕立てた、新しい外套です。軽さと遮光性を備えるため、麻で編んだものを二枚重ねて作りました。これは汗を吸わない為、重くなつて脱ぎたくなくなるという事はないはずです。さらに……」

もったいぶつたように間を空けて、ロジオンは後ろに隠していたもう一つの物品を見せた。

それはつばの広い真つ黒な帽子で、先の尖つた、魔女がかぶるようなものだった。ロジオンはそのつばを持ち、よれよれになつている帽子の先端を主人に向ける。

「こちらが、日よけの帽子です。つばの中に骨組を入れているので少々重いかもかもしれませんが、つばがへたれて視界を塞ぐといった事態を防げます。合わせてお使いいただければ、と思ひまして」

「ずいぶんくたびれた生地で出来ているようだが？」

「……申し訳ありません。何分材料が足らず、城のあちこちで眠つていた物品で間に合わせたのです。お気に召さないかとも思ひ、お見せすべきか、今の今まで迷つていたのです」

ロジオンはゆっくりりと、丁寧に説明した。そうする事で主人の注意を自分に引きつけるためだ。

日が完全に沈むまで、主人を城の中に引き止めるのが目的だった。以前より、今後のためにと作つておいた外套や帽子を見せ、主人の反応をうかがつた。気に入ってもらおうとロジオンは熱意のままに、しかし押し付けがましくならないように気を使いながら喋る。笑顔を繕い、不快な印象を持たれまいと表情を保つた。興味の対象を外出から移すのが第一なので、気に入られなければそれでもいいと思つていた。

その主人はというと、ぴんと来ないと言わんばかりのつまらなさそうな顔をしていた。食いつきの悪さにロジオンは焦る。

しかしロジオンの話には耳を傾けているようで、後ろの扉には注意

が払われていなかった。この点では、ロジオンの思惑通りとも言えた。

「そんなものはいらん。私は今、走りたくてしょうがない。裸で外に出たいくらいだ」

「おやめください、縁が逃げます」

城の回りには森しかないの、羞恥心を煽る傍観者はどこにもいない。今にも外に出ていきたくらいにちらちら扉に目を向け始めた主人は、本当にそれを実行し兼ねなかった。

「大丈夫だ。私の肉体美なら、遠方の婦女子が気付かぬはずがない。裸を見られても問題はないらしい。ロジオンは敢えてそこは指摘せず、別の方向から攻める事にした。

「もやしっ子が何言ってるんですか。遠方って、ここがどれだけ僻地かご存知でしょ」

細身の主人は、筋肉で構成されるような肉体美とは無縁だ。しかし、主人はロジオンの指摘に怯まずなおも持論を崩そうとはしなかった。

「すっごく目がいい女なら問題はない」

「鳥並の視力の女も、そうはいません」

ロジオンが主人の主張を否定しても、主人は食い下がる。

「どこかの部族では、それぐらいが普通らしいぞ？」

「それは広くて暑い場所の連中です。ここは寒いし、見通し悪いでしょ」

「気まぐれでタフな子が近くにいるかも知れんぞ！」

「さぞや毛深く、大きな子でしょうね。ホント寒いですから、この辺」

そこで主人は、口を止めた。思考を巡らせ、これまで挙げられた条件に合致する女性像を想像する。その隣にイエティを並べてみると、どっちがどっちか分からなくなってしまった。

「……それはちょっと、好みじゃないな」

「でしょ？だから、外に出るのはやめましょう」

ようやく言いたい事を言い、ロジオンは離れた位置にある城の壁に目をやった。そこには窓があり、その向こう側はすっかり暗くなっていた。

太陽が完全に沈んだのだ。ロジオンが内心で、胸を撫で下ろす。

主人も、ロジオンと同じ方向を見てううむ、と唸った。

「ん、そうだな。外も暗くなった事だし。やめるか」

「ええ、是非……は？」

「いくら何でも夜中は危険だ。野獣が私の軟い肉に群がりかねん」
食うトコ残ってるんですか？

普段のロジオンなら間髪入れずにこう言っていた所だが、この時ロジオンは呆然としていた。安堵しかけたところで思わぬ不意打ちを喰らっていたからだ。

「明日の朝に、歩くとしよう。いやあ、日の出が楽しみだ」

明日への期待を胸に抱えて、主人はもと来た道を引き返して行った。ロジオンはというと、結局受け取っては貰えなかった外套と帽子とを持ったまま、その場から動けずにいた。

「面倒な事になった……」

しばらく後、ロジオンの口からそんな一言が漏れた。

3・思い出してください(後書き)

実は今回、難産でした。

読みにくい点、分かりにくい点等ありましたら気軽にお願いします。

4・念入りにしました

4・念入りにしました

ロジオンは生前から規則正しい生活を送っていた。人間は習慣で生きる生き物だと言われるが、それは一度死んだ後も変わらなかつた。

目を覚ますとすぐに彼は身を起こし、薄いかげ布団をはね飛ばして足を床に降ろした。召使のための狭い部屋にある薄いカーテン越しに、東から差す日の光が投げかけられている。ロジオンはすぐに服を着替えると、一目散に主人の部屋へと向かった。

もたもたしていたら主人が起きてしまう。早く主人の傍に行かねば、主人が何をしてくすか分からない。

ロジオンの心配事は、昨日起きた主人の変化によるものだった。彼の知らないところで主人は頭を打つたらしく、ある事を忘れてしまっていた。

自分が吸血鬼である事だ。

指摘しても、ちつとも聞き入れてもらえない。出来の悪い冗談だと一蹴される度ロジオンは「じゃあアンタは何なんだ」という質問を喉の奥で堪えるのに苦労した。結局聞き届けてはもらえず、認識は改めて貰えなかった。

そのせいで主人は弱点に対する警戒心がすっかり抜け落ちており、日の光を浴びようとしきりに外に出たがるようになってしまった。

主人の部屋の前に着くと、ロジオンはその扉を三度ノックし返事を待つ。

「いいぞー」

主人の声が上がったのを聞いて、彼は静かにその戸を開いた。主人はベッドの上で身を起こし、ロジオンが来るのをぼんやりした目で見ていた。主人は元々、朝は強くない。

「おはようございますご主人様」

「ああおはよう。しかし、朝だというのに嫌に眠いぞ」

そりゃあそうだろう。ロジオンは敢えて口に出さず、黙って頷いてみせた。かつての主人は、日の出ている間はずっと眠っていた。日の沈む頃に目を覚まし、日が昇る頃に床に着く生活をしてたのだから、今が眠いというのは頷ける話だ。ロジオンも眠たかったのだが、主人の危機に惰眠をむさぼれるようなず太い根性は持ち合わせていなかった。

「そう仰る方は多いですね」

同意してみせた後、ロジオンは部屋のクローゼットから今日の主人の服を取り出した。二着しかない服の片方を主人に差し出すと、主人は黙ってそれを受け取った。

吸血鬼というのは貴族が大半だ。その為従者に服を着替えさせる吸血鬼が多いが、この主人は自分で服を着替えられた。理由は簡単だ。

「お前に裸見られるの嫌なんだけど」

「乙女かアンタは。こっちも嫌ですよ」

以上が出会って間もない頃の二人のやり取りである。その頃すでに、従者はロジオンしかいなかった。

そういう訳で、服を渡した後ロジオンはすぐに退室する決まりになっていた。その日も部屋を出ようとしたが、彼は主人に一言釘を刺すように言った。

「終わったらすぐに呼んでくださいね。すぐにですよ？」

言われた主人は訳が分からないという顔をしていた。ああ、と促されるままに頷いた後、首をひねる。

「何だ、心配事か？」

「ええ、まあ。余計な真似をされると仕事が増えるので」

「キツいな、朝から」

ロジオンは眉をひそめ、部屋を後にした。彼から言わせれば、篋とちり取りを取りに行く羽目になる方がよっぽど厳しい。

閉めた扉の前で静かに待ちながら、ロジオンは落ち着かない気分
時間を持て余していた。見ていない所でカーテンを開けられるの
かと思うと、すぐにも部屋に踏み込みたくなる。

ふと対面の壁にある窓に目をやると、外からの光は完全に遮断され
ていた。廊下に沿って並ぶ全ての窓が、板で作られた蓋で塞がれて
いる。ロジオンが昨日徹夜で、城の窓という窓を塞いで回ったから
だ。重労働だったが、万全を期さねば取り返しの付かない事になる。
主人の部屋にだけは勝手には立ち入れなかったので、その窓だけ
が彼にとって気がかりな点だった。

ほとんど徹夜で板を拵え、城中を走り回ったせいでロジオンは疲労
していた。立つたままでも眠ってしまいそうで、うつらうつらして
いる内に意識が曖昧になる。

「いいぞー」

主人の声に目を覚まし、ロジオンは垂れたよだれを拭きとりなが
ら部屋に入った。

いつものように、主人は着替え終わった姿でロジオンを迎えた。
窓は開けられていない。

安堵するロジオンに、主人は訝しげな目を向けた。

「何だ、今日は挙動不審だな。心配事か？」

「ええ少し。申し訳ありませんが、どこかで時間を潰していて下さ
いませんか？」

ロジオンの提案に、主人は表情を明るくした。いつもなら大人し
くする事を余儀なくさせられていただけに、主人は自由を得たよう
な気分になった。

「お、いいのか？外に出て、散歩とかしちゃうぞ？」

「どうぞどうぞ」

意地の悪い笑みが浮かぶのをロジオンは堪え、平然とした顔で頷
いてみせた。裏口含め、外と城内とを隔てる扉は全て縄で施錠済み
だ。何度もきつく縛って作った結び目も、容易に解けるものではな
い。刃物のある場所も、主人には教えていなかった。

そんな彼の様子に、主人は首を傾げた。

「何だ、聞き訳がいいじゃないか。いつもなら『勘弁してくださいよ』、ホントご主人様だったら破天荒なんだから、トホホ』くらい言っつて私を困らせるだろ」

「そんな茶目っ気はありません」

一言たりとも主人の言う、ひょうきんな台詞を言った覚えはなかった。付き合いても、小芝居のようなやり取りに応じた事など一度も無い。

「だろうな。だから私が代わりに」

「しなくていいです。意義が見出せません。第一、今困っているのは私です」

「同じくらい、私もお前に困ってるぞ」

「なら私はもつと困っています」

子供の言いがかりのようだが、事実だ。主人は従者に行動を制限されている事に、従者は主人の今の状態が気がかりで、且つそれが主人に伝わっていない事にそれぞれ頭を痛めていた。

「ロジオン、私はお前に何かしたのか？言ってくれば直すぞ？」

「……いえ。お気持ちだけで充分です。どうぞ、お好きになさっててください」

ロジオンが片手を差し出すようにして、外出を促す。主人はすつきりしない顔を浮べたが、すぐに廊下に踏み出した。そして暗さとその元凶を見て驚く。

「あれ？窓塞がってるぞ？なんでだ？」

「僭越ながら、昨夜私が全て閉めておきました」

「お前なんでそうしたの!？」

頼んでもいないだけに、主人の驚きは並ではなかった。もちろん、ロジオンとて意味の無い事をしたつもりはない。

「この頃は日差しがきつくなってきましたので、日焼けをされないようにと。後はこの部屋だけです」

「ええー、一体何事？外ってそんなに怖いのか？」

「ええ、あなたには殊更」

頷きながら、ロジオンは持ってきておいた工具や材木を引つ張り出した。その用意の良さに主人は感心したが、その必要性には疑問を持っていた。

「別に日差しくらい、大した事じゃないだろ？何がお前をそうさせるんだ」

「アンタだ、アンタ」

ロジオンは聞かれないよう、小声で呟いた。その後すぐに、ごまかす為に適当な理由を口にする。

「……あなたの為です。お嫁さんが欲しいのでしょうか？」

「おお、もちろんさ。でも、関係あるのか？」

「大いに」

大げさに頷いて、ロジオンは主人の興味を引いた。日頃愚痴をこぼしているだけに、反応は非常に良かった。

「ほほお、興味深いな。それと窓とが、どうつながるんだ？」

「そうですね。まず、貴方様の理想を聞かせて下さい」

「いいとも。聞かせてやろう。まず、才女であるべきだな。賢い女がいい。ただし、私を立てるべく、一步引く癖があるのがベストだ。そして、私を愛してくれるのが言うまでもなく必要な条件だな」

饒舌に話し出す主人に、ロジオンは相槌を打ちながら先を促した。気を良くして、主人はさらに続ける。

「性格はもちろん優しく、甘え上手でもきちん自立もできている。普段は淑女で、でも時たま大胆に……」

「あの、すみません。見た目をお願いします」

長くなってきたので、ロジオンは軌道修正を図った。彼が言いたいのは、中身の事ではない。

「見た目？そうかそうか、そこを聞くか。お前もなかなか分かってるじゃないか」

嬉しそうな主人に冷めた目を向けて、ロジオンは適当に頷いた。

同意していると思われたのか、主人は気を害した様子もなく続けた。

「人は見た目ではないというが、それは二十歳前までだ。それを過ぎれば、大抵の奴の性格は見た目どおりだ。にじみ出るものは間違いないからな。そういう意味では、見た目と性格は切り離せないぞ」

「だからご主人様は間抜け面なんですな」

「そうだな。……おいどういう意味だ」

「愛嬌があるという意味です。いいから、続きをお願いします」

「そうか、ならいい。それでな、外せないのはもちろん、清楚さだな。嘘なんかついた事のないような朴訥な子がいい。が、それは少々高望みかな？私も時々、お前に嘘つくし。そうになると、やはり相応の落ち着きや品格が」

「もつと些細な所を。背とか胸とか言ってくください」

いい加減自分で言ってしまうおうかとも思ったが、ロジオンは堪えて、ある事を喋らせようとした。主人本人に言わせなければ、ロジオンの言いたい事を理解して貰えないと思ったからだ。

「うーむ、そこにはあんまりこだわらないんだけどなあ。あ、でも男遊びしてそうなのは嫌だな。やたら化粧が濃かったり」

「そうです、それです！」

待ちかねたロジオンが、思わず大声になつて主人を指差して言った。思わぬ反応に、主人は思わず身を引いて口を閉ざす。目を何度も瞬かせる主人に、ロジオンは一気にまくし立てた。

「ご主人様に、そういうご主人様の好みの子に好かれて貰うために、窓を塞いで回ったのです。いいですか？考えてもみて下さい。お似合いの二人というのは、どこかしら似ているものでしょう？ご主人様の仰るような好みの子にも、選ぶ権利があります。その際、その子が選ぶ基準とするものは何か。決まっています。どれだけ共通の認識があつて、その男に対する理解が容易かどうかです。早い話遊んでいる女は遊んでいる男を、清楚な女性は身綺麗な紳士を選ぶという事です。ご主人様は淑女をご所望なんですよね？」

主張から質問に切り替え主人に尋ねると、主人は一拍置いて首を

縦に振った。ロジオンの熱心な話し振りに呆気を取られていたようだが、彼のその主張には同意できたらしい。流れを掴んだとばかりに、ロジオンは続けた。

「ええ、良く分かります。ですから、考えてもみて下さい。あなたが日に焼かれて真っ黒になったとします。生まれつきの色ではありません。そんな状態で外に出れば、あなたの理想とする女性はないから離れてしまいます」

「……そ、そうなの？」
「そうです」

暴論になっている気もしたが、ロジオンはそれを押し通した。主人は未だ理解しかねているようだったが、ロジオンの言う事に納得し始めているのは間違いなかった。

「ですから、ご主人様の理想を叶えるべく私は尽力したのです。褒められる事はあれど、お叱りを受ける覚えはございません」

「なるほど、そうか。私以上に良く考えたな。感謝するぞロジオン」
納得し、明るい顔になった主人は指を鳴らした。

「そうと分かれば、迂闊に外など出られないな。城のどこかで、暇を潰そう。仕事が終わったら、呼んでくれ」

「分かりました」

すっかり気を良くした主人は、そのまま部屋を出て行った。廊下の暗さも気にとめず、ロジオンの見えない所に消えてしまう。

何とか気にして欲しい事に気をつけるようになってくれた。ロジオンとしても、肩の荷が降りたような気分だった。

喋りすぎて喉がひりひりする。ロジオンは一度咳払いすると、板を抱えて窓を塞ぐ蓋の製作に取りかかり始めた。

城の中を散策しているうち、主人はある事に気付いた。

城中の窓がロジオンによって塞がれていたが、城の中は暗くはない。夜中に使うために壁に設けられた、燭台のいくつかに火が灯されていたからだ。蟬の調達が容易ではないからか、二つおきに間隔

を空けられて漆喰の壁に円を映し出していた。ぼんやりとした輪郭が、暗い部分と明るい部分との境目になっている。

この時彼はすでに玄関の方を回っており、親の仇のようにがんにがらめに固定されたノブを見ていた。徹底された処置に内心で感心し、その一方で恐ろしいとも思っていた。歩くうちに驚きは薄れ、代わりに疑問が彼の中に生まれた。

「あいつは何故ここまでしたのだ？」

ぼつりと呟いた時、一つの可能性が彼の中に現れた。

「外にはもしかして、見てはならないものでもあるのか？」

疑問が出来上がると、彼の中で好奇心が頭をもたげてきた。見るなどと言われると、見たくなくなってしまふのが性である。ここで自制できる者とできない者とは分かれるが、彼は後者に分類された。

「……ほんの少しでいい、見てみたい。折角だ」

彼は意を決すと一階に降り、物置にしている部屋の一つに入った。ロジオンに見られていないかどうか周囲を確かめた後、滑るように中に潜り込む。

物置の部屋の角には蜘蛛の巣が張っており、床中に散らばった様々なガラクタの上には分厚い埃の層が積み重なっていた。扉から一本の線を描くかのように埃の薄い部分があるが、それは先日地下牢から移動させたかびたクローゼットを運ばせた跡だ。その証拠に、黴の色に染まった大きな箱が、身を隠すようにうつぶせに倒れていた。物置というよりは、不要になったものをしまうガラクタ部屋であった。

その荒れ果てた部屋の中で、主人は噎せながらしゃがみ込み、床の様子を探り始めた。一度倒してへし折れてしまった帽子かけや、飽きてここに放り込ませておいたゴルフクラブなどを押しのけ、目当てのものを捜す。

「えほつ、えほつ。確かここに……と」

作らせたはいが趣味に合わなかった大きな熊のぬいぐるみを放り捨てると、ようやく主人の捜し求めているものが現れた。

表面のひび割れた、木製の板。ただしそれは辺の部分をも金具で補強されており、埋め込まれたかのように床の平面に同化していた。それも当然。これは抜け道への入り口を塞ぐ扉だったからだ。

「やはりロジオンもここまででは知らなかったか。よしよし」

思い返せば、ロジオンを作った頃はすでにここはガラクタ部屋として扱っていた。以来この掃除もさせていなかったため、彼が知らないのも無理からぬ事であった。

主人が扉を引き開けると、真っ暗な石の通路が口を開けて彼を出迎えた。反響する隙間風の音と冷たい風とが彼の肌を撫で、背筋を震え上がらせる。石の階段が主人の膝のすぐ前にあり、底の見えない暗闇から何かの手招きしているようにも感じられた。

主人が普通の人間だったとしたら、ここでやめようと思い、すぐに扉を閉めていたかもしれない。主人も例に漏れず、外した扉を閉めようと手を伸ばそうとした。

しかし、そこで主人は気付いた。

真っ暗な底を見つめているうち、その暗闇の中にあるものが見え出してきたのだ。

「……あれ、見える？見えるぞ？」

夜行性の吸血鬼は、夜目が利く。さらに頭を入り口に突っ込み、そこから伸びた地下道を覗き込んでみる。

すると壁を構成するブロックの一つ一つや、その上を撫でるように滴り落ちる地下水、何かに睨まれている事に気付いたネズミたちが逃げ惑う様などが鮮明に見えてきた。

「おお、見える見える！すごいな私！」

こうなると見えないものに対する恐れが無くなり、暗闇への恐怖が薄れる。地下道の奥深くまでを見通せるようになった主人は、すっかり調子を取り戻し、階段を降りてしまった。降りきってしまうと、石や地下水の冷たさが肌に馴染んでいくのが分かった。

ここは元々は、城が攻め落とされる前に逃げ出せるよう、設計の段階で設けられていた地下道だった。離れた場所には出口があり、そ

ここからなら外に出る事ができる。

用心のためにと、主人は再び階段を上がって部屋の様子を見回した。ロジオンが来る気配は、全くない。

「ようし、行くか」

二段飛ばしで階段を降りると、主人は軽やかな足取りで外へつながる出口へと向かった。

4・念入りにしました(後書き)

盆の帰省の前に書き上げました。

次はどうなるんでしょう？

5・許してください

5・許してください

「よし、できた」

両手についた木くずを払うように、ロジオンは両手を二度ほど叩いて窓を見た。西日を望む事が出来るその窓は今、板によってふさがれわずかな光も漏れていない。

窓を塞いでいるのは、城中の材木をかき集めて作った分厚い木の板だ。しかも、窓枠から絶対に外れないように、窓枠に直接釘を打ちつけて留めている。どうあっても開く事が出来ないようにするためだ。これで主人は、ロジオンには見えないところで砂になる事はありえない。

「これで一通り出来たな。私の部屋にはご主人は入らないから、これで万全だ」

工具箱に金槌と残った釘とをしまい、ロジオンは腰を伸ばした。両手で背中を押すようにして身体を反らし、その後金属製の工具箱を持ち上げ、主人の部屋を出る。廊下に出て、道具を片付けるために自分の部屋へと歩き出した。大抵の日用品の類を、自分の部屋に置いていたからだ。

「さてと、ご主人はどこにいるのやら」

その主人が日の当たる場所へと向かっているとは露知らず、ロジオンは楽観視して悠々と向かった。

明日は補強が出来ていないいくつかの窓を完全に塞ごう。そう明日の予定を立てる彼の足取りは、非常に軽いものだった。

ロジオンが自分の部屋へ向かっている頃、主人は真っ暗な地下道を一人で歩いていた。どんどん城から遠ざかって行くのが分かるが、

主人は全く意に介さない。それどころかまだ見ぬ外の様子に思いを馳せて、意気揚々と先へ先へと向かっていった。明かりは無いが、足元がはつきり見えているおかげで躓く事もない。吸血鬼の体質のおかげなのだが、それは今の主人の知る所ではなかった。

「さあて、どこに着くのかなー？」

独り言を言いながらも足を止めず、主人は前だけを見て突き進む。しばらくして、主人は道の先に扉があるのを見てとれた。終点、つまり外と中とを隔てる扉が見えたのだ。

「おおお、見えたぞ。ついに、私は外に出られる！さあ見てやるぞ、この目で、輝く太陽を！」

すっかり舞い上がった主人は石の扉に向かって走り出した。一気に距離が詰まり、扉の目前まで辿り着く。

後は扉を開けてしまえば、それで終わりだ。暗闇を切り裂くように陽光が差し、地下道が一気に明るくなるのは間違い無い。

ただし、真正面から光を受けた主人は瞬間に雲散霧消してしまうだろう。本人はそれに気付いていない。それだけに、その後の行動に躊躇いは無かった。

「いざ行かん！まばゆく明るい、自由な世界へと！」

両手を前に突き出し、主人は扉に手をかけた。横にずらしてしまおうと、足を踏ん張って腕に力を込める。

石の扉は彼が思っている以上に、容易く開いた。指から扉が離れ、主人の前で右から左に流れる。

ただし、今の主人の顔には戸惑いの色が強く出ていた。本人以外の力が働いたからだ。

肩透かしを食らったように主人はよろめき、左に目をやる。何が起こったのか知ろうとしての、反射的な動作だ。

そこで、主人の視界は真っ白になった。眼球を刺すような痛みが襲う。主人は激痛からのけぞり、倒れた勢いで通路の奥へと転がってしまった。暗闇の中に長時間いたせいで、夜目の利いた状態で光を見てしまったからだ。吸血鬼としての性質も相まって、視神経の

奥まで焼け付くかのような衝撃を受け、暗がりの中へと入る。

おかげで彼は消滅の危機を脱したのだが、今の彼にはそれを感じる余裕も、理由もなかった。

「眩っ、ちや痛ああああ！」

のた打ち回る彼の前に、扉の隙間から細い足が差し出された。その後、足の持ち主が顔を覗かせ、主人を見る。

「あ、あれ？何でいるの？」

女の声。大声を上げて喚く主人を見て、声の主は身体を地下道に滑りこませた。そして速やかに扉を閉め、辺りを暗闇の中に戻した。女は主人を知っていた。もちろん、目の前にいた男が吸血鬼なのもだ。その主人はというと、閃光に目が眩んで顔を押しさえ身をよじっていた。大の大人がみつともないとは、彼女は思わなかった。

「ちや痛あああ！おっかあ、目に何か刺さったよう」

「何だつて？おっかあに見せてみな」

女は駆け寄って跪き、主人の顔を覗き込む。そして、一言。

「って、誰がおっかあよ」

その途端、主人の悲鳴はすぐに途絶えた。

彼は顔から手を離し、彼女を見る。目が眩んだだけに留まったので、眼球も視神経も無事だった。そして女の顔を見て、にやりと笑う。

「さすがだナリス」

主人はすでに目を闇に慣らしていた。夜行性の吸血鬼ゆえに、暗順応は早い。女の方も、もう主人の姿を暗闇で見る事ができるようになっていた。こちらは吸血鬼ではないが、ゾンビでも只の人間でもない。

「私の求めるノリツツコミを理解しているとは、やるじゃないか」

「魔女だからね」

そう言つて女は主人の腕を掴み、彼を立たせた。リスと呼ばれた女は立ち上がった主人を見上げ、笑みを浮べた。

「久しぶりね。元気してた？」

「もちろんさ。君も息災で何よりだ」

親しげに挨拶を交わし、二人は手を握り合った。

魔女のリズは、主人とは古い付き合いになる。とは言っても、この再会も数十年振りである。出不精になる前の主人と出会い、馬が合って以来の仲だ。

「ロジオンは元気？」

「ああ、今日もしっかり腐ってるぞ」

「でしょうね。そういう所、相変わらずね」

昔話に花を咲かそうとして、リズがふと主人に大して疑問を持つた。

「ところで、あなた何でここにいるの？」

「決まってるだろう。外に出るためさ」

魔女は最初、相手が何を言っているのか理解できていなかった。分かった途端、彼女の口から息が漏れた。

プツ

魔女は口を押さえ、俯いて笑いを堪える。

「……お、面白い冗談ね。今は昼よ？」

「だからさ」

魔女は両手で腹を押さえて、さらに身体を曲げた。主人が当たり前のように言ったのが、彼女の壺に入ったのだ。ふらつく足元は今にも斃れそうだったが、彼女は笑いを止められないでいた。そんな彼女を、主人は不思議そうな目で見る。

「何なんだよ、もう」

「くつ、ぶぶ……、ひひ、もう、お腹痛い。あなた、ずいぶんジョークが上手くなったのね」

痛む腹を伸ばせず、リズはどうか首だけを起こして主人を見た。主人は未だ笑われた理由が分からず、きよとんとしている。

「ジョークって何がだ？君はどうしたんだ？」

「こつちの台詞よ。吸血鬼が一体どうしたの？」

笑いすぎで目から出た水を拭い、リズは主人に問いかける。主人は面白くもなさそうな顔をしてこう言った。

「君まで言うか。ロジオンといい、私が吸血鬼だなどと訳の分からない事を。流行っているのかい？」

「え？」

ここでリズは主人の様子がおかしい事に気付いた。冗談を言われているとばかり彼女は思っていたのだが、不快そうな主人の反応は演技には見えない。笑いを押し隠している様子も見えず、彼が本気で言っているのが彼女にも分かった。

「とにかく、どいてくれ。私は外に出たいんだ」

主人はリズの前から離れ、扉に向かおうとした。躊躇いのないその動作に、リズが血相を変える。

「ちょ、ちよつと待つてよ！本気！？」

リズはすぐ横を通り過ぎようとする主人を必死で引きとめた。主人本人からすればこれは思わぬ反応で、反射的に足を止める。彼にすれば笑われる覚えがなく、不愉快であったので無視したかったのが本音だった。

「いや、本気だが。まずいのか？」

「まずいも何も……あんだ、正気？」

「耄碌した覚えはないぞ」

「痴呆老人は皆そう言うの」

リズは額を押さえて視線を落とし、考えを巡らせた。

今は昼間で、太陽は高い位置から辺りを望んでいる。地下道を出た先は獣道に通じており、もう少し時間が経てば扉の真正面から日光が差してしまう。扉を開ければ遮るものは何もなく、ここにいる主人は瞬く間に形を忘れて消えてしまっただろう。

だというのに、彼は外に出たがっている。まるで自分の性質に気付いていないかのようだ。

リズにとっては、ロジオンがない事も気になった。主人を一人で放っておくのを良しとしない彼が、こんな状態の彼を野放しにするだろうか。

「ロジオンはどこなの？」

「ああ、城だ。昨日から様子がおかしくてな。城中の窓を塞いで回っているんだ」

「それ絶対あなたのためよ」

「何で？」

魔女にはロジオンが、打てるだけの手を打っているのが分かった。ただ主人は本気で分かっているらしく、首を傾げてみせた。

「何でつて……」

「とにかく、私は外に出たいんだ」

「駄目よ、絶対」

主人を掴んだ腕に力を込め、リズは地下道の奥へと引っ張った。ひ弱な主人は簡単に後ろに引かれ、かかとの先で歩くようになる。そのままぐいぐい後ろに引っ張られ、主人は引き返させられ始めた。

「とつとつと、何だリズ、どうするつもりだ？」

「ちよつとロジオンに会いによ。あたし、まだ彼に会ってないの」

「私を連れて行くのはなぜだ？」

「アンタを放つとけないからよ。いいから来なさい」

有無を言わず、リズは城の方へと歩いた。主人は強引に引き返されて不服な顔をしたが逆らわず、されるがままに引きずられていった。

工具箱をしまい終えたロジオンは、暗い城の中を歩き回っていた。作業に時間をかけ過ぎたせいで、主人が今どこにいるのか、まるで見当がつかないでいた。

外出が出来ないように、外につながる扉はすべて塞いだ。窓も簡単には開けられないように蓋をしてあるから、城の中にいるのは間違いない。砂になっているとは到底思えない。ロジオンはそう考えていたが、どこを見ても主人の影は見当たらなかった。

「どこにいるんだ？」

独り言を言つて水瓶の中を覗くが、そこには自分の顔があるだけ。

水の詰まった瓶の蓋を戻して、ロジオンは食料庫の部屋を出た。食料庫とは言っても、吸血鬼もゾンビも食事をする必要がないので、そこには水しかなかった。すぐそばにある別の扉の先は外に通じているが、そこはがんじがらめに縄で開かないように固定されている。この先でロジオンは毎日薪を割らなくてはならないのだが、それについては彼は後で考える事になっていた。まずは主人に思い出してもらわなくてはならない。

「外に出てるとは思えないが、どこにも見当たらないな。砂がないのは幸いだが……」

最上階の主人の部屋から順番に見てきたが、今の所主人を見つかる事はできなかった。長い時間姿を見ないと、落ち着かない事この上ない。

「万全は期したが、呼んでも返事がない。全く、これだから目を離すところくな事にならない」

愚痴をこぼした後、ロジオンはもう一度だけ主人を大声で呼んでみた。

「ご主人様ー！どちらにいますかー！？」

彼の声は石や漆喰の壁に反響して、廊下の奥へと消えていった。耳を澄ませてみても、小さくなる自分の声しか聞こえない。

「ああもつ」

いらいらしながら階段を降り、一階の床に立つ。

「どこにいらっしやるんですか？」

「こちらにいらしてます」

ロジオンは驚いた。振り向いて、声の出所を見る。

階段を出てすぐ後ろ、階段の陰になっている場所にある扉。そこには不要になったものを詰め込む、倉庫代わりの部屋があった。閉じていたはずの入り口は今は開き、一人の人物がその姿を現していた。女だった。長い銀髪に色黒の肌、整った顔立ち。

彼女の顔を見た途端、ロジオンは腰を抜かした。足が曲がらなくなり、そのまま床に座りこんでしまう。

「り、りりりり……り、リズ様!？」

「あら、ご挨拶。そんなに怖がらなくていいじゃない」

にっこりと笑みを浮べて、魔女はロジオンにそう言った。ロジオンからすれば、晴天の霹靂とでも言うべき事態だった。

「おお、お、お茶もお茶菓子もありませんよ!？というか、なぜここに?」

「もてなして欲しいとは思うけど、ちょっとあなたに聞きたい事があるの」

そう言つて彼女は片腕を引き、部屋の中から主人を引き出してみた。襟首を掴まれて、主人が後ろによるめいた姿を見せる。

「あ、ご主人様!」

「おお、ロジオン。助けて」

「こっちの台詞です」

「せめて見えない所で言つてくれない?」

目の前で厄介事扱ひされたリズが、笑顔で二人に言った。ロジオンが反応して、すぐに立ち上がつて背筋を伸ばす。主人の友人にあたる相手なので、毅然とした対応を返そうと彼は自らを奮い立たせた。苦手意識を持つ理由は、別にある。

「はい、失礼しましたリズ様。して、なぜここに?」

「用があつてね。地下道から入ろうとしたら、たまたまコイツに会つたのよ」

「え、そんなのあつたんですか!？」

三度ロジオンは驚いた。地下道がある事も初耳だったが、そこに主人がいたというのも彼からすれば思わぬ出来事だった。

「そうなの。で、これが一人でのこのこ外に出ようとしてたの。あたしが来なかつたらボン!よ」

「ボン?」

「た、助かりました、ありがとございます。しかし、なぜここに?」

「それは後。言つたでしょ。聞きたい事があるの」

リズは主人から手を離し、ロジオンの傍に近づいた。顔を寄せ、小声で尋ねる。

「あいつどうしたの？頭でも打った？」

「全くもってその通りです」

ロジオンは昨日あった出来事を余さず伝えた。抱える苦労を軽くしたい一心からか、彼の舌はよく回った。

一通り聞いた後、リズは洗面を作ってロジオンを見、主人に目を向けた。その主人はというと、すぐ近くの窓に施された蓋をもの珍しそうにつついていて。二人の様子に関心はないらしい。

リズは額を指で押さえ、はあ、とため息をついた。

「そりゃまた、大変ね」

「ええ。こんな事になるとは思いませんでしたよ」

疲れたように言うロジオンに、リズが同情の目を向ける。ロジオンは続けた。

「本人が無警戒な分、性質が悪くて。おかげで初日から心労が絶えません」

「でしょうね。あなたって本当に苦労性ね」

「今回みたいなのは初めてですよ」

恨めしげに主人に目をやると、彼は蓋に指をかける所がないか手探りで探していた。

ロジオンは震え上がった。行動の意図は見え見えで、主人は明らかに蓋を外しにかかろうとしていたのだ。

「ちよ、おやめくださいご主人様」

「これ邪魔、暗すぎる」

確かに主人の言うように、彼のいる扉の前には燭台がなかった。階段の前に伸びる大きな廊下の両側には燭台があり、二つ置きに火が灯っているが、辺り一帯を照らすには光が足りない。

なんとか指先が入るほどの木目の窪みを見つけると、彼は壁を足で押し、力を込めて板を引き剥がしにかかった。ぎしぎしという木材のこすれる音が上がり、徐々に蓋が窓枠からはがれていく。

ロジオンは焦った。流石に一晩で城中の窓を塞ぐのは彼にも困難で、いくつ固定が完全ではない窓があったのだ。そのうちの一つが、災難な事にこの窓だった。その窓には釘を一本も打っておらず、びたりと合った板の寸法だけをあてにしてはめ込んでいたのである。非力な主人でも、力を込めればはがせられる。

「お願いです、思い直してください！」

「いや、でもこれそろそろ外れそう」

「だから駄目だっつってんだよ！いいから手を……！」

そこから先は、言葉にならなかった。がたん、と大きな音を立てて、蓋が床に落ちたのだ。

差し込む日差し。明るくなる通路。

光を嫌う吸血鬼の全身を、容赦なく陽光が照らし出す。主人は窓を見たまま立ちすくみ、微動だにしなくなった。ロジオンやリズ、そして主人本人にも長く感じられる一瞬。

主人の全身が、色を変えた。白い色の肌が、暗い灰色の粒子に変わる。

全身の至る部分に細かい日々が入り、細かい粒が落下し始めた。このままでは五秒と待たずに、主人の身体を構成する成分はつながりを失ってしまうだろう。

ロジオンが動くよりも早く、リズが主人に手を伸ばした。

指差すように立てた人差し指を主人と窓の蓋に向け、小さく円を描く。その円は彼女から見ると、体が崩れそうになっている主人と、床に落ちた後倒れそうになっている木の板とを囲んでいた。

火が付いている訳でもないのに、その指先には白い、小さな光が灯っていた。何時の間に出したもののなか、ロジオンには分からなかった。光は軌跡を残し、指が動くままに円を空中に描いてみせる。

空中に白い円を描ききった後、リズはその指先を左に少しだけずらした。まるで時計の針を、ほんの一瞬の間だけ逆に回すようにだ。

指が止まると、空中で描かれていた円が、線を細くしながら径を広げていく。一瞬で魔女の視界一杯まで大きくなると、弾けたように

円は消えてなくなった。膨らんで消えるその過程は、水面に浮かぶ波紋を思わせる。

すると不思議な事が起こった。

落下している主人の体の粒が、空中で静止したのだ。砂粒だけではない。床に落ちた板が前のめりに倒れそうになっているのも、意識していなかったためロジオンが気付かなかった空中の埃の粒子の流れも、全てが絵に変わったかのように動かなくなったのだ。

そして変化は、それだけに留まらなかった。空中の砂が浮き上がり、主人の崩れた部分を補おうと集まり始めた。同時に板が起き上がり、その後空中に浮き上がって自分から窓に吸い寄せられていく。肌の色が元通りになった主人が板を掴み、押し付けるようにして窓の蓋を閉めた。光が遮断され、城の中に薄暗さが戻る。

一連の現象は、それまで起こった出来事の終始が逆転したかのようだった。

「……あれ？何か起こってたような……？」

窓の蓋に手をかけたまま、主人が目を見開かせる。その全身には、傷もなければ欠けもない。

目の前でこれを見ていたロジオンが、安心して深く息を吐いた。そして、腕を下ろしたりリズを見る。

「……ありがとうございます、リズ様」

「間一髪ね。間に合って良かった」

彼女もまた胸を撫で下ろし、成功と安堵のため息を漏らした。

特定範囲の全ての事象を巻き戻す、逆行の魔法。リズはそれを使って、主人とその周囲の物体の時間の流れを逆にしたのだ。力を集中させた指先で円を描く事で、見据えた円の中にある全ての物体の時間を、指を左に回した分だけ逆行させるのである。

「すごい魔法を使えるんですね」

「まさかこれで命の危機を救うとはね。落ちたもの拾う時に使うんだけど」

「それは知りたくありませんでした」

主人はというと、自分の身に起こった事が理解できずに、未だ板に手をかけたまま目を白黒させていた。

客間に通されると、リズは椅子に掛けて長い机に両肘を乗せた。下座だったが主人も、彼女自身も気にしていなかった。二人はすでに、城主とお客様などという堅苦しい関係ではない。ロジオンは指摘すべきか迷っていたが、二人が何も言わないので口を出さないういた。

主人が魔女の対面に座る。面と向かい合う格好になって、主人がリズに尋ねた。

「で、何で君はここに来たんだい？」

「ちよつと、ね。あなたに頼みたい事があるの」

言いにくそうに指をいじった後、リズは主人の方を見て言った。

「……住む所探してくれない？」

「「は？」」

主人とロジオンの口から、そんな声が漏れた。戸惑う彼等に、魔女は事情を話し始めた。

「この間うつかり人間に見つかっちゃったのよ。それでテレビだとかオカルト研究会だとかが家に近づいてきてさ、もう面倒くさいのだから、他の場所に引越したいのよ」

吸血鬼の主人やゾンビのロジオンには魔女の抱えているこの問題の面倒さがよく分かった。

人間から見れば、彼等の存在は非常に珍しい。桁違いに数が少ないからだ。珍獣扱いされればまだいい方で、宗教関係者に見つかりでもすれば命はない。そのため、彼等は人目を避けて暮らさなければならぬのだ。

「全く、ドジだなあ君は」

「アンタに言われると腹立つなあ。でも、そういう事よ」

肩をすくめて、お手上げだとリズは溜め息をついた。主人は腕を組んで思索を巡らせる。

「そうは言っけどねリズ、僕にはアテはないよ」

「でしようね。でも、あたしにも無いのよ」

「じゃあどうしよう」

「どうしましようねえ」

不毛な会話を交わす二人に、主人の傍で聞いていたロジオンは眉をしかめて口を挟んだ。

「……あの、ここに住まうのですか？」

彼の問いかけに、二人が同時に首を横に振った。

「いやいや、それは無い無い」

「うん、無い無い。こいつはいい友人だけど、そこまで世話にはなれないよ。信用もしてるから、なおさらね」

リズの言葉に、主人はうんうんと頷いた。ロジオンはすっきりしない顔で首をひねる。

「ですが、他に方法はないですよ。家を建てようにも、この辺りは猛獣も多いし」

ロジオンの言うように、城を囲む森には様々な獣が生息している。熊もいれば狼もいる。そして、命の危機に晒され続けて気の荒くなつた鹿や猪もいる。魔女とはいえ、女が一人で生きていくには厳しい世界だ。

「この辺りじゃなきやいいんでしょ？」

リズは気楽にそう言っただけで席を立った。主人が座つたまま彼女を見上げ、ロジオンが怪訝な表情を浮かべる。

魔女は名案が浮かんだかのように表情を明るくすると、指を立てて言った。

「人の街に住みたいの」

主人が椅子からずり落ち、ロジオンが危うく倒れかけた。

「どど、どどという事？どどいうつもりだリズ」

主人までもが血相を変えて友人の正気を疑った。しがみつくようにして胸を机の上に乗せ、リズを見上げる。

「簡単よ。人間になりすますの。あんた等と違って私は気付かれに

「くいから、難しいマネじゃないと思うけど」

「それで、何で私達に協力を？」

ロジオンが聞く。魔法の使える魔女なら一人でもどうにかなりそうなお問題だ。

リズは恥ずかしそうに頭を掻いて、顔を伏せた。目だけでちらちら二人を見て、小さな声で言う。

「いやあ、あたし物件の見方や不動産屋の場所が全然分からないからさ。どういう家がいいか、色々教えて欲しいのよ、現地で」

「現地ですって……、私達に同行しろって言うんですか!？」

「駄目？」

魔女は手を合わせて、小首をかしげてみせた。大人のリズがすると妙な愛嬌があるが、ロジオンは誤魔化されなかった。

ロジオンからすればとんでもない提案だ。人の集まる場所はどうであつても気温が高くなるので、自身の肉体の手入れも面倒になる。

加えて、今の状態の主人をのこのこと街に連れて行くのは不安が残る。

主人の態度もつれないものだった。

「駄目だよ、リズ。そういうのは自分でやらないと。勝手に知らない女が一人じゃ、店に舐められるのは分かるけどね。でも、きちんと断る姿勢を持って行けばいい経験になるよ？」

「流石にあなたが言うと思いますね」

「いい意味で？ それいい意味で言ってるの？」

ロジオンの指摘に主人が口を挟む。そこで、魔女が思い出したように一言。

「お嫁さん探せるよ？」

「よし行こう準備だ急げ」

席を立ちあがる主人。彼と魔女とをロジオンは交互に見比べ、信じられないものを見る目になった。息巻く主人が、心持ちいつもより血色のいい顔をロジオンに向ける。

「何をしているロジオン、さっさと支度をするんだ」

「ああちよつと待つて。彼を借りたんだけど」

主人の返事を待たずに、リズはロジオンを手招きして部屋の戸を開けた。話したい事があるのだと察し、ロジオンは彼女に頷いて後を追った。

二人で廊下に出ると、ロジオンは扉を閉めた。主人には聞かれたくない話だろうと思ひ、ロジオンは魔女の言葉を待った。

彼の思った通り、リズは口を開いた。

「……ちよつとあいつに、あんたが窓を塞いだ理由を聞いたんだけどね」

ロジオンは身構えた。リズが明らかに、先ほどまでと違って不機嫌になつていたからだ。

思ひあたる点に分からずロジオンは戸惑うが、動揺を見せないように努める。

銀髪の黒い肌の魔女が、一つしか無いロジオンの目を睨んで言った。

「色の黒いのが悪い、みたいな事言つてたんだって？」

ロジオンにはその言葉の意味が分からなかったが、ふとある事を思い出した。ロジオンが主人に向かつて言つた言葉だ。

『あなたが日に焼かれて真っ黒になつたとします。……あなたの理想とする女性は……離れてしまいます』

「ああー。え、あ、いや、違いますよ？そういう意味じゃ……」

「やーねえ白人主義つて。時代錯誤と思わない？」

親しげに問いかけるリズの目は、笑つていなかった。ロジオンは自分の背に、冷たい汗が流れた気がした。

もちろんロジオンは、彼女の言うような事を言つたのではない。見た目を過剰に飾る事は良くないと言つたのだ。主人がどう説明したかロジオンには分からなかったが、誤解されているのは明白だった。

「あの、だから話を……」

「ねえロジオン、一緒に熱帯に行かない？あなたの体に沸いた蛆の数を、毎日記録につけてあげる」

ロジオンは震え上がった。

「か、勘弁して下さい！怖い！」

「大丈夫よ、痛くはないだろうから」

「二度目の生を食われて終えるなんて嫌です！」

「あなたゾンビでしょ。生ける屍が、口を利くの？」

余談を許さない物言い。リズが本気で起こっているのが、ロジオンにも良く分かった。

「こ、コンプレックスなんですか？」

「逆よ。プライドがあるの。それを馬鹿にされちゃ、黙ってらんないでしょ」

リズが手を上げ、指先に小さな明かりを灯した。あらゆる魔法につながる予備動作だ。どんな魔法をかけられるか、ロジオンには予想がつかなかった。それだけに、感じる恐怖も大きい。

「ち、違います！例え話です！生まれつきのものを馬鹿にする話ではなくて……」

「あたし、五秒で済まない言い訳は聞き流してるの」

「だからアンタ苦手なんだよ、もう！」

「追いつめられると正直ね。好きよ、そついうの」

城の中で、ロジオンの悲鳴が響き渡った。

5・許してください(後書き)

ずいぶん間隔が開いてしまいました。

申し訳ありませんが、また長く待たせてしまいそうです。

止める気は毛頭ありませんので、気長にお待ちしていただければ幸いです。

6・お騒がせします

6・お騒がせします

「準備はできたみたいね」

魔女のリズは準備を終えた二人を見回して言った。

主人はロジオンが作った黒い麻の外套をまとっており、頭には同じくロジオンが作った帽子をかぶっていた。日差しで肌を焼かないためだとリズが言うと、彼はすんなりとその意見を受け入れた。

ロジオンは片方の目がないのを隠すために黒いアイパッチをつけ、服を燕尾服から作業用の普段着に着替えていた。薪割りや水汲みなど、室内着では行えないような作業をする時の格好である。こちらの服の方が、人の街ではまだ目立たない。体中の苔も出来るかぎり落とし、全身におしろいをまぶして荒れた肌をごまかしていた。

服の裾はあまり、袖口からは指だけが出ている状態だ。パンツもかかとで少し引きずっている上、ベルトで締めてなくては簡単にずり落ちてしまいそうである。

「ロジオン、お前ちよつと縮んだ？」

「ええちよつと。お願いですから、詳細は聞かないで下さい」

青い顔をしてロジオンは主人から目を背けた。元から青い顔がさらに血の気のないものに変わっている。

主人の言う通り、ロジオンの背丈は以前よりも低くなっていた。主人やリズよりも高いのは変わらないが、今まで来ていた服が今の彼の体に合っていない。主人は首を傾げたが、すぐに興味を無くした。「分かった、聞かない。リズに何かされたのか？」

「分かってないじゃないですか」

虚ろな目で主人を睨み、ロジオンは呟いた。

二人を前に、リズが口を開く。

「今から人の街に行くけど、いい？分かってると思うけど、絶対ば

れないようにね」

「もちろんさ」

「承知してます」

男二人が頷くのを見て、魔女は満足げな表情を浮かべた。彼女はロジオンに目配せし、主人から目を離すなどアイコンタクトで意思を伝えた。ロジオンもそれに応じ、黙って首を縦に振る。

「よし、なら行きましょうか」

リズは後ろを振り返り、城の正門ドアを開けた。すでにロジオンによって縄はほどかれ、鍵も解けてあった。だから容易く扉は開き、すっかり日の沈んだ夜の森が現れた。

「何だ、真っ暗じゃないか。コートいららないな」

「常に着といてください。虫に刺されますよ」

「え、そう？じゃあ着とくか」

そんな事を言いながら二人が外に出ようとすると、彼等の前にいたリズが二人を引きとめた。

「まあ待ちなさい二人とも。ちゃんと準備は出来てるの？」

「問題ないさ、私はな」

「全部私がしてますからね」

手ぶらな主人の前で、ロジオンが両手のトランクを持ち上げてみせた。男の手荷物という事もあり、どちらもさほど重くはない。

「なら安心ね。いらっしやい」

リズの先導で、二人は城を出ようと足を進めた。

ロジオンはふと、ある事を思い出した。魔女のリズは人間に見つかったせいで住処を移さなくてはならなくなったのだ。なのに、今の彼女は胴につけたウエストポーチしか荷物らしいものを身に付けていない。両手は空だ。

「リズ様、お荷物は？」

「ああ、乗り物に置いてるの」

そう言っただけで彼女が前を指差した。指先にあるものを見ようと、二人が顔を前に向ける。

日は沈み、城の外には明かりらしいものは全くない。だというのに、目を煌々と光らせているものが、そこにいた。生き物ではない。それは光を発するたった一つの目を三人に向け、静かに彼等が近づくの待っていた。

「……リズ、これかい？」

主人が尋ねる。彼は話しに聞いた事しか無いので、興味津々といった体でそれに近づいた。

ロジオンもこれを知っていた。知っていたが、魔女の乗り物としては似つかわしくないような気がして、改めて問い詰めてみる。

「あの、リズ様？これは……」

「バイクよ。見て分かるでしょ」

サイドカーの上に乗せた荷物の山を軽く叩き、彼女は自慢げな表情を浮かべた。

馬力は七半、つまり750ccで日本製。黒い車体に単眼のフロントライト。いわゆる男臭いデザインのバイクであり、車体の横には山のように荷物を載せたサイドカーが取り付けられていた。

「おおお、これがバイク！リズ、こんなの持ってたのカー」

感心と好奇心の入り混じった黄色い声を上げて主人がバイクに近づく。そしてハンドルやガソリンタンクの部分に無遠慮に手を這わせた。指紋がいくつも表面に貼り付くが、持ち主のリズは嫌な顔一つしない。

「こらこら、変な所触っちゃ駄目よ。壊れたら弁償してもらおうからね」

言いながら彼女はバイクに跨り、キーを差し入れた。後は手首をひねればエンジンがかかる。

「ちょっと待ってください。私達どこに乗るんです？」

座席を荷物の山で占めたサイドカーを見て、ロジオンが聞く。バイク本体の座席も、三人を乗せられるほど大きなものではない。

「……ちょっと待ってて」

本気で忘れていたらしく、ばつの悪そうな顔でリズがバイクを降

りた。

サイドカーのある側に回ると、その車体を指差す。指先には、小さな光。指先の動きで、光は円を描いてサイドカーを囲んだ。円が指先を離れ、宙に浮く。

時間を戻す魔法とは違い、今度は指先を固定したまま手を開き、彼女は両手を合わせた。十の指先が、サイドカーを囲む白い円の中心に向けられる。その後、彼女は手と手の間を、ほんの少しだけ開いた。何かのジェスチャーのような動作だが、これは魔法の意味を表している。

手の動きに応えるように、円が楕円に変わった。

横に長くなつた光の円が線を細くしながら広がり、ついに消滅する。すると、サイドカーに変化が起こつた。

滑らかな表面を持つ金属性の表面。その面積が増し、後輪が後ろに回つて乗り口を大きく広げた。バイク本体に沿つて走る以外の機能を持つていないはずの車体が、収容体積を増やしたのだ。紐で固められた荷物の山が、出来た余裕を埋めるようにわずかに後ろに傾いだ。

「の、伸びた……」

ロジオンが信じられないものを見るような目で変化の結果を見る。その横では主人がおお、と呑気に感嘆の声を上げていた。

「凄いな、これで一人乗れるぞ」

自分が座りたいのか、空いたスペースを主人が覗き込む。座席のマットも後ろに伸びていた。

「アンタは私の後ろに乗ればいいから、サイドはロジオンね。よろしく」

すでに手を解いたりズが、ヘルメットを主人に渡して言った。主人は素直にそれを受け取り、帽子を取る。

「そうそう、メットのバイザーは常に下げときなさいよ。それ紫外線遮るから」

「分かった。これも美白の為だ」

リズが面白くもなさそうに眉をひそめるが、本音を飲み込み黙って彼に頷いてみせた。ロジオンが彼女に軽く頭を下げる。面倒をかけてすまないという、謝罪の意だ。

それに気付いたわけではないが、リズはもう一つのヘルメットをロジオンに差し出した。彼もトランクを足元に置き、それを受け取る。

「私がサイドですね」

「そうよ。荷物、ちゃんと押さえといてよ」

頷き、ロジオンもヘルメットをかぶった。再びトランクを持ち上げ、サイドカーに乗り込もうとバイクに近づく。近づいて初めて分かる事があった。

「車体も伸びてる……」

「両方伸ばさないと、内輪差で曲がる時大変な事になるでしょ」

ああ、とロジオンは納得してサイドカーのシートに腰を降ろした。リズの荷物のせいで足が伸ばせず、体育座りの格好になる。二人分のトランクは足元に並べて立て、踏みつけるようにして固定した後ロジオンはシートベルトを締めた。

隣では主人が伸びたバイクのシートの後方に跨り、リズがその前に座る。メットをかぶり、ゴーグルまでかけた彼女の姿は下手な男より男らしい。

「そんじゃ、行きますかね」

「了解」

主人がリズの胸に両腕を回し、メット越しに額を彼女の背中につける。彼女は振り払わず、バイクのエンジンを入れた。タービンが回り、車体が激しく音を立てる。フロントライトが前を見据え、前方を明るく照らす。

「そおれ、発進！」

リズの声でバイクは前進を始め、雑草を掻き分け林の中へと突っ込もうと走りだした。加速を続ける大径の車輪が地面をえぐるようにして前に突き進み、車体を持っていく。ロジオンは慣性で後ろに

倒れそうになるのをどうにか堪えた。

このまま進めばバイクは森の中に入ってしまう。獣の多く住まう、整備されていない夜の森にだ。どれだけリズがバイクの運転に長けていたとしても、高い確率で事故を起こし転倒してしまうのが目に見える。

しかし彼女は無謀でも、無策でもなかった。森に入る前に片手を離し、前に向かって指を突き出す。もちろん、指先には光。

彼女は指だけで円を描くと、一周し終わった指先を上に乗せさせた。円の上に縦線が生え、径を広げていく。その円の中を、リズはバイクで通り抜けた。

円が消えうせ、魔法の効果が見れる。

回転を続けるタイヤが、地面から離れ始めた。リズが車体を持ち上げたのではないし、躓いて浮き上がったのでもない。羽根のようにふわり、と二百キロ以上の車体が空中へと上昇を始めたのだ。

坂を登るように高度を増していき、車体やサイドカーの側面が細かい枝葉にぶつかるたび、パキパキと音を立ててその枝をへし折っている。ついにバイクは空高く浮かび上がり、なびく雲と細い月が間近に感じられる場所へと飛び出した。

「うおお、飛んだぞ、すごいな」

主人が歓声を上げて辺りを見回す。足元に広がる針葉樹の森を遠くを感じ、後ろを見ようと首を回す。

「こら、落ちるから。しっかり掴まんなさい」

リズに窘められ、主人は前を向いて腕に力を込めた。自分の腕を掴むようにして、振り落とされまいとする。

ロジオンはそんな主人とリズとを見て首をひねる。しかしすぐに踏ん張りの利かない体勢で落ちまいとするため、シートベルトを両手で掴んで腰を座席の奥に押し込む事に一心になろうと努めた。

道の無い暗闇を照らす月とフロントライト。三人を乗せたバイクは、冴えた夜の空で森の上を通り過ぎていった。

校内で彼女に目を向ける者は、誰もいなかった。

はねっ気の強い髪に瓶底メガネ、加えて少数派である人種。国際色豊かなその学校で、彼女は一際浮いた存在だった。

授業にはしっかり出席し、真面目にノートも取る。評価は全科目常にAプラス。ただし、グループディスカッションは例外だった。

「……だと思っただけど、あなたはどっすう？」

「……」

同級生に話を振られても、彼女は応じない。いつもの事なので、すぐに他の同級生が口を挟んだ。ここではしゃべりの方が重宝される。

「個人的にはその解釈は……」

「だったらこの場合……」

ようやく議論が進み、誰もが内心で胸を撫で下ろす。流れを切った当人はというと、顔色一つ変えずに黙って座っていた。

彼女は謙虚すぎる。誰もがそう思っており、ちよっとした腫れ物扱いだっただ。

鐘が鳴って授業が終わると、真っ先に立つのも彼女だ。他の生徒達がいくつかのグループに集まって遊ぶ予定を立てているのに目もくれず、さっさと教室を出て行く。

学校を出て歩いて帰り、彼女は部屋のベッドに座り込む。ホームステイ先の意向で、彼女にはガレージを改装した小屋のような別室が割り当てられていた。

そこでようやく、彼女は数時間振りに喋る事ができた。

「はあー、疲れた。……今日もうまく話せなかったなあ」

分厚いメガネをベッドサイドテーブルに置き、彼女は額を押さえただ。留学して二ヶ月、未だに学校に馴染み切れない。学校に来ただけで何を話せばいいのか分からなくなってしまう、結局何も言わずに帰ってしまう毎日だ。勉強するのに不自由はしないが、話せる相手が未だにできない。喋るに喋れず、後悔ばかりする毎日だ。

「これじゃ、留学の意味がないよう」

嘆いてみるが、現状は変わらない。単身日本から渡米したのはいいが、今の生活は日本と殆ど同じだ。話し相手がいる分、前の方がマシだ。

ホームステイ先の家族も、住まいと最低限の食事を提供するだけで彼女と関わりを持つとはしなかった。そちらはその家族のスタンスの問題なので、彼女はあまり気にしていない。問題は学校生活だ。英語は一通りできる。留学する前に猛勉強したおかげで、不自由はしていない。

彼女自身にも、問題は分かっている。他の人種に、慣れていない事だ。外国人が珍しい日本と違い、ここは人種の坩堝というにふさわしい程様々な人種にあふれている。町を行き交う人混みを見るだけで、未だに目が回りそうになる。

彼女は額から手を離し、自分の頬をその手で叩いた。しまらない音に反して、しつかりとした痛みが彼女をふるい立たせた。

「こんなままじゃ、駄目だ。怖気づいてちゃ、何も変わらない」

彼女は立ち上がり、窓のカーテンを開けた。白んでいく空の中で、朱のような赤い色の太陽が沈んでいく。広い庭の向こうに見える枯れた林越しに、鳥の群れが慌しく飛び立つのが見えた。空に浮かび上がる黒い点のような影。何羽もの鳥が羽根を広げ、彼女の視界から遠ざかっていく。

その中に一つ、おかしい動きをするものがあつた。彼女は気付き、眉をひそめる。

「あれ、何だろ……？」

目を凝らしてじっと見るが、それは左右にふらふらと揺れているので注視しづらかった。不安定な飛び方で、どんどん地面に近づいているのが分かる。

「まさか、UFO？」

驚いて窓に貼り付いて見る。それはどんどん窓に近づいており、次第にその形状がはっきりと見えてきた。

それは本来、空を飛ぶものではなかった。翼ではなく車輪があり、

風を真っ向から受けるそのシルエットは流線型と呼ぶには武骨すぎる。左右のバランスも非常に悪く、そのせいで軌道が不安定なようにも見えた。

ここでようやく、彼女は自分が眼鏡をかけていない事に気付いた。ひどい近眼で、目に見える範囲のものは全てがぼやけて見える。そのため空を飛ぶ何かがどんな形をしているかに気付くのも遅れた。裸眼でも飛ぶ様子はどうにか見えていたので、目を離すまいとしてしまったのだった。

つまり、彼女と飛んでいるものとの距離はそうとう詰まっていたのである。

近づいてくるものが乗り物で、それに乗っている誰かがヘルメットをかぶっている事に気付いた頃にはすでに目と鼻の先。ガラス越しに肉薄してくる相手に驚いて彼女が後ろに飛びのいた直後、部屋の壁が大きく震えてベッドの位置がずれた。衝撃で窓に数本、長く大きなヒビが走る。驚いた彼女は身をすくめ、飛んできたものがぶつかった部分をじっと見る事しか出来なかった。

少し経った頃、壁越しのその位置から声が聞こえてきた。

「……やってしまいましたね」

「もう、最悪。何であんな場所で、飛行機と鉢合わせるのよ」

「まあまあ、無事だからいいだろ。気付かれなかったし、ぶつからなかったし」

「見てないんですか？ぶつかったから落ちたんです」

「サイドカーにかすっただけだろ」

「そうよ、かすっただけ。相手はトン単位の巨体だけどね」

呑気な男の声が一つと、険悪な様子の男女の声が一つずつ。合わせて三人の人物が言い合っているのが分かる。

部屋の中にいた彼女は、恐る恐る窓から外の様子を窺った。

やけに細長い、サイドカー付きのバイクが後輪をこちら側に向けている。空を飛んで、近づいて来ていたものだ。それに乗っているのが、サイドカーに一人、本体に二人。そのうち二人が、ヘルメッ

トを外して素顔を露わにした。

彼等は揃って奇妙な出で立ちだった。眼帯をした異様に肌の白い男と、長い銀髪の黒い肌の女。そして極めつけは、全身を黒い外套で包んだ三人目だ。ヘルメットの上からつばの広い帽子をかぶっており、肌の露出は一切無い。三人の中で一番呑気な事を言っているのも、この人物だった。

「とにかく、ここから離れましょう。誰かに見られていたら大変です」

「そうね、この家に誰かいたら面倒な……」

男と女が同時に後ろを振り返る。

彼女は首を引っ込めそこね、その結果彼等と目を合わせてしまった。

「……」

「……」

「……」

「？」

固まった二人の様子に気付いて、三人目が遅れて後ろを見る。そこでようやく、彼は自分の置かれた状況を理解したようだった。

「……あ、見つかっちゃった」

それは、遠くに見える町並みの陰に日が隠れ、街中の外灯に火が付き始めた頃の事だった。

6 ・お騒がせします（後書き）

どんどん一話辺りの文の量が長くなっていますね。
これからも長くなると思います。

7. 行ってらっしゃいませ

「本当にすいませんでした」

妙な出で立ちの三人組は、揃って彼女に謝った。土足で上がるのが常識な国の家の床で正座になり、諸手を付いて頭を下げている。本家本元の国の出身である彼女から見ても、それは見事な土下座であった。

「もう顔を上げて下さい。怪我もしなかつたし、気にしてませんか……」

すでに眼鏡をかけ直していた彼女は、落ち着かない気分で彼等に声をかけた。現に怒りや恐れよりも、今は戸惑いの方がはるかに大きかった。見間違えでなければ彼等はバイクで空を飛んでいたし、聞いてみれば彼等自身もそれを肯定した。信じられないが、彼等の言葉を否定できる情報はない。

とうに日も沈み、明かりも乏しいせいで外は真っ暗になっていた。申し訳なさからか、その場をすぐに逃げ出そうとしない三人を放っておく訳にもいかず、彼女は取り合えず彼等を家に招き入れたのだ。お人良しもいい所だと分かつていたが、聞いておきたい事もあつたし、何より自身の良心が痛んだ。夜中のこの国は物騒この上ないし、彼等三人からは危険な雰囲気は微塵も感じなかつた。

おずおずと顔を上げた女性が、まず口を開く。

「壁やガラスはすぐに直すから、通報は勘弁してくれない？ ビザもないし、パスポートもないの」

「え、それって……」

銀髪の女の言葉に、彼女は不審の色を露わにする。その表情を読み取って、眼帯の男が慌てて口を開いた。

「違います、怪しい者じゃありません。潔白、真っ白な身ですよ、私達」

「まあ、あなたは見れば分かりますけど……」

眼帯をしたいやに青白い男に同意し、彼女は頷いた。だが、疑わしい事に変わりはない。その男はなおも食い下がる。

「どうか、信じてください。悪気があつたんじゃないです」

「もちろんそれは分かります。ですけど、せめて素性を教えてもらえませんか？」

女と眼帯の男が顔を見合わせ、揃って困惑の表情を浮かべる。その様子を見て、彼女はますます彼等を信用できなくなってきた。さりげなくポケットに手を入れ、携帯を開けるように指に力を入れる。黙り込む二人の隣で、黒ずくめの男がようやく頭を上げた。帽子のつばの陰から、表情のない顔が現れる。

「なあ、メット取っていい？」

「まだかぶってたんですか。さつさと取りなさいよ」

眼帯の男が彼に呆れた声を投げた。

街頭の男はバイザーを降ろしたヘルメットの上に帽子をかぶっていた。そのせいで男の目鼻立ちは分からなかったのだった。

眼帯の男の態度の変わりように彼女は目を引かれ、そして黒ずくめの人物の奇妙な出で立ちに改めて眉をひそめた。見た目の怪しさで言えば、三人の中で彼が一番だ。全身を覆う黒い外套に、つばの広い帽子。肌の露出は一切ない。

「あの、この魔法使いみたいな人は……？」

「それどっちかって言うとおたしなだけ……。まあ、悪い奴じゃないから安心して」

黒い肌の女にそう言われても、彼女は首をひねるばかりだった。

彼女の思惑とはよそに、外套を来た男は帽子を取ってヘルメットに手をかけた。両手に力を込め、ヘルメットから頭を引き抜く。

金髪が零れ落ち、ほっそりした端正な顔が現れた。

「あ……」

男の素顔を見て、彼女は思わず感嘆の声を上げた。多くの人が思い浮べる美男子の要素を、彼は全て持っていたのだ。それまでに良い印象を持っていなかっただけに、驚きはひとしおだった。携帯を

掴む手が、思わずゆるむ。

ヘルメットを取ったその男は、蒸れてかゆくなった頭を掻きながら眼帯の男に目を向けた。

「あー暑かった。ロジオン、早く言ってくれよ」

「普通はさっさと取るもんです。室内ですよ」

窘めるように言う眼帯の男に、金髪の男は渋面を作った。傍で見ている彼女にも、なんとなく彼等の関係を読み取る事ができた。どこか抜けた所のある金髪の男を、ロジオンと呼ばれた眼帯の男が疲れた顔で嗜める。その様子は日頃何度も繰り返されているらしく、双方やけに慣れた様子だった。

「そんなの知ってるさ。でも、リズが脱ぐなって言うからな」

「それはそうだけど、せめて帽子は取りなさいよ。屋内なんだし、人前だし」

銀髪の女に言われ、む、と男は顔をしかめた。

「ヘルメットを外すのだって普通だろ」

「それは駄目だったんですよ、まだ明るかったんですから」

「何なんだリズもロジオンも。私の普通は普通じゃないのか！」

「普通かどうかは、私からは返答しかねます。でも、今は夜ですよ」
ヒビの入った窓を指し、ロジオンと呼ばれた眼帯の男が言った。

透明なガラスの向こう側は真っ暗で、部屋の明かりによって四人の姿がガラスの表面に映し出されていた。

「そうか、真夜中ならいいのか。全く、二人とも注文が細かいから困る」

「私はもっと困ってます」

「またそれか。好きだなロジオン」

「あなたはボンで済むけど、私はそうはいかないですよ。あなたの世話以外する事無いんですから、あつという間にボケてしまいます」

「ボンって何だ、昨日からよく聞くけど」

「知った時にはあなた、もう手遅れよ」

リスの言葉にロジオンが頷き、男は首をひねった。

ずっと傍で聞いていた彼女も、彼等の会話の内容を理解しきれないでいた。三人で話しが進んでおり、置き去りにされている気もしていたので敢えて口を挟む。

「あの、何の話ですか？」

「ああ、いや失礼。この二人が……」

男が彼女を見る。そこで、彼の言葉は途切れた。

男はずっと、ヘルメットのバイザーを下ろした状態だった。昼夜を問わず視界が暗くなっていたため、常に視界がぼんやりとしか見えなかったのだ。それが今ヘルメットを脱ぎ、明るい視界を得て初めて彼女の顔を見た。

男は目を丸くして、じっと彼女を見つめた。何となく気恥ずかしくなって、彼女はつい、と目を逸らした。その男にはなぜか、彼女を惹きつけるものがあつた。目を見た瞬間背筋を冷たいものが走つたが、今は胸が躍っているのが分かる。

「……娘さん、名前は？」

声をかけられ、彼女は口元が強張った。

「……安藤、あきらです」

「そうか、あきら。君に言いたい事がある」

男は膝立ちになっていた足の片方を立て、あきらに近づいた。両手を伸ばし、空いた方の彼女の手を取る。リスとロジオンとが彼の行動に戸惑い、あきらが目を丸くする。男の手は冷たく、それでいて滑らかだ。

男は青い瞳でじっと彼女を見つめ、そして一言。

「結婚してください」

7. いったらっしやいませ

ベッドの中で、あきは朝が来たのに気付いて目を開けた。気だるさが身体にのしかかってくるが、今が何時か知りたくなり、目覚

ましを手取る。デジタル式のその時計は、七時二十分を表していた。

そろそろ起きないとまずい。彼女はもそもそと掛け布団を押しつけ、ベッドから足を降ろした。ベッドサイドデスクからメガネを取り、顔にかける。

と、そこで彼女は足元に寝ている人物に気付いた。地味な色の寝袋が一つ、中身を詰めた状態で転がっている。銀の髪が数条、顔の穴からこぼれているのが見えた。寝袋に入っているその女、リズは未だに寝息を立てていた。

昨日の出来事の後、あきらは結局あの三人を泊める事にした。ただ女のリズはともかく、ロジオンと彼が主人と呼ぶ男には屋外に張ったテントで過ごしてもらっていた。冬の外は寒いからとあきらは屋内に入れようとしたのだが、ロジオンがこう言っただけでその申し出を断った。

「寒いのは慣れてますし、私には都合がいいんです」

後半の台詞の意図は読めなかったが、その後畳み掛けるようにリズが男女別に分けようと押しきったので、今のようにガレージ内にはあきらとリズしかいなかった。

彼女を起こさないように、あきらはリズの上をまたいで外に出た。あきらの住むガレージにはガスと水道は引かれていないので、この時ばかりはホストファミリーの家にならなくてはならなかった。車庫の裏を通って、裏口をあらかじめもらった鍵で開いて中に入る。すぐに家のキッチンに入る事ができた。広くて白いそのキッチンはものがないかのように整然としており、コンロに面した机の上にはシリアルが一つ、ぼつんと置かれていた。今日もこれが、彼女に割り振られた朝の食事らしい。彼女は箱を一瞥すると、黙ってシヤワー室に向かった。

トイレと一体になっているシステムバスなので、彼女は脱衣所に入る前にノブにかけている札をひっくり返した。手早くシャワーを済ませ、着替えていそいそと出る。

廊下を歩く途中、家の主であるアンナと鉢合わせた。五十を過ぎた、太った女性である。

「あ、おはようございます……」

屋根を借りている以上、礼儀をわきまえなければならぬ。自分からあきらは挨拶したが、アンナは彼女を一瞥しただけでむっとり黙ってその場を後にした。慣れたもので彼女の態度に気を害する事も無く、あきらはキッチンに入って牛乳を取り出し、手早く朝食を終わらせた。二ヶ月間学校のある日はほぼこれで、もはや作業のようであった。味も、普段と変わらない。

その後すぐ外に出、ガレージへと向かう。その途中、男が一人テントの入り口で屈んでいるのが見えた。見れば眼帯をしている方、つまりロジオンが入り口から出ようとしているもう一人を押さえて外に出すまいとしていた。開いたジツパーの間に手をつ込み、腰を落とした格好だった。

彼等は大声で言い合っており、少し離れた場所にいるあきらにもその内容は聞こえていた。

「はーなーせー！もう朝じゃないか！私の朝を邪魔するな！」

「あなた普段は夜に起きるでしょ！昨日といい今朝といい、気楽に外に出ないでください！」

ああもう、と唸るロジオンとその主人の様子が気になり、あきはテントの傍に近づいた。彼女に気付き、ロジオンが首を回す。

「あ、安藤様、おはようございます」

「はい、どうも。何をされてるんですか？」

彼女の声に気付いたのか、テントの中からロジオンが主人と呼ぶ男の声が聞こえた。

「おおあきら、こいつが私の邪魔をするんだ。ゾンビめ、主人を何だと思ってるんだ！」

「だから、あなたは吸血鬼でしょ」

「またそれか。冗談にしては度が過ぎるぞ！どうかなってしまっただのかロジオン」

「アンタが頭を打つたんだよ！つとと、失礼」

思わず怒鳴った事をロジオンは謝り、あきらみに頭を下げた。主人という男はまだテントの中に押し込められており、指の一本も外に出せないでいた。

天気は雲もまばらな晴天。吸血鬼という単語が頭の中で引っかかり、あきららはロジオンに小声で尋ねてみた。

「あの、吸血鬼って本当ですか……？」

「本当ですよ。貴方には信じがたいでしょうが。かくいう私もゾンビでして、今もこの辺りの暖かさにやきもきしている所です」

冗談のようにロジオンは言うが、あきららには笑えなかった。普通なら冗談として聞き流すだろうが、彼の言葉を裏付ける事実がある。

臭うのだ。

以前買ったばかりの肉を室内に放って置いてしまい、腐らせてしまった事がある。その肉の臭いをもっとひどくした、鼻にくる臭いが、わずかだが確かにロジオンから漂っていた。体臭だけではこの刺激臭は再現できないだろう。一瞬彼がおぞましいものに見えたが、自分に対する紳士的な態度や物腰のおかげで嫌悪感は大分薄れていた。

「信じがたいですか？立証したいのはやまやまですが、そうすると少々心臓に悪いものを見せなくてはなりません。どうしてもと仰るなら……」

「あ、いえ結構です。信じてますよ」

彼の発言に嫌な予感を感じ、あきららはロジオンの言葉を遮った。

「そうですね。ご理解が早くて助かります」

頭を軽く下げるロジオンに、テントから野次のように声が上がった。

「いいから出せロジオン、ジョークはいらん！」

「こっちは本気で言ってるですよ」

「何て事だ、ロジオンがおかしくなった！」

「もう面倒くさいですねアナタは！頼みますから外套と帽子はつけて下さい！」

「断る！私は外に出しても恥ずかしくない子だ！」

「それを決めるのはあなたじゃありません！いいから着てください！」

押し合いながらの押し問答は依然終わる気配はない。主人はロジオンの言い分を聞く気はないらしい。

このまま放っておく気にならなくなり、あきは出入り口の隙間から主人に声をかけてみた。

「あ、あの……」

二人が黙り、動きを止める。注目されているのが分かって彼女は緊張したが、構わず続けた。

「えーと、主人、さんはですね……、顔を隠した方がいいかな、と」

「なぜだ！恥じた行いなどした覚えはない！清く正しく素敵に生きたのに！」

「落ち着いてください。その、あなたはいいかも知れませんが、えつと……女の子が皆困ります」

主人がえ、と声を上げ、ロジオンが目を丸くした。

あきらから見れば、二人は素性がおかしいのを除けば外国人にしか見えない。緊張はひとしおだったが、彼女はガレージに逃げ込みたいのを堪えて続けた。

「その、ですね。昨日あんな事言われて、ちょっとびっくりしたでしょ？」

思い当たる所があり、ロジオンがまなじりを吊り上げて主人を睨んだ。その主人はさっと目を背け、聞こえないように小声で「私は悪くない」と渋面を作って呟いていた。

「ああ、怒ってませんよ、びっくりしただけです。その、主人さんって綺麗だから」

主人の耳がわずかに動いた。耳が動かせる事にあきは驚いたが、その主人があきらに目を向けてきたのにも息を呑んだ。

「きれい？つまり、格好いいと言う事か」

「え？あ、は、はい、そう、ですね。だから、迂闊に顔出しちゃうと大騒ぎになっちゃいますよ……？」

何を言っているんだ、と自分でも呆れてしまいそうな内容だった。顔が熱くなるのが分かる。

ただ昨日、初めて彼の顔を見た時の感情だけは否定できなかった。刃物を見たような背筋の冷たさと、目を離さずにはいられないような束縛された感覚は忘れようがない。あの時心のどこかで、彼に好意を持ってもらいたいとすら思ってしまった。危なげなのに吸い寄せられるような、引きつける力がこの男から感じられたのだ。

彼女の迷惑を知ってか知らずか、主人は弾んだ声を上げた。

「あそう？そうか、大騒ぎかー、確かにそれはよくないな。疫病が流行るかのごとくバツタバツタと倒れる訳かー」

「もう災害ですね。ですから、身を隠してくださいと」

「お前はそんな事言っていないだろ」

「あなたに望むものは同じです。忘れたんですか、美白のためです」
「おっととそうか、そうだった。近頃は朝日も肌を焼くらしいからな。私とした事が用心を欠いてた訳か。そうかそうか、すまんなロジオン。今着てくる」

すっかり大人しくなった主人は外に出ようとすることをやめ、テントの中でもぞもぞと動き始めた。

面倒から解放されたロジオンがふう、と息をついて腰を伸ばす。

「助かりました、安藤様」

「いえ、そんな。……その、ロジオンさん、本当にあの人」

ロジオンはすぐにあきらの言いたい事を悟った。ロジオンは彼女がただの人間である事を知っていた上、彼女が主人にどういう感情を持っているかもすぐに悟る事が出来た。その説明は、吸血鬼の特性の一つで説明がつく。

「はい、吸血鬼です。日の光にあたれば瞬く間に砂になってしまいます」

あきらは大して驚きはしなかった。何となく、吸血鬼という言葉が主人のこれまでの言動や雰囲気合致していると思えたからだ。

「砂に、ですか……。灰じゃなくて？」

「はい、消え方が灰と言うより砂なんです。漂わず、一気に粒子が落ちるんです」

「見てきたかのように言うんですね」

「危うく目撃しかけてね。っと、それより安藤様、お時間はよろしいのですか？」

言われてあきらは気付いた。腕時計を見ると時刻は八時十分前を過ぎていた。

「わ、遅刻しそう！それじゃ失礼します！」

お気をつけて、というロジオンの声を背中に受けて、あきらは慌ててガレージの扉を開いた。中ではすでに目覚めていたリズが、寝袋を脱いでそれを丸めている最中だった。

「あら、おはよう」

「おはようございます！」

返事もそこそこに鞆を掴むと、あきらはそのままガレージを飛び出して学校へと急いだ。

それを入り口からリズが、テントの前からはロジオンと、外套と帽子で肌を隠した主人とが見送る。

「おー、あきらいってらっしやーい」

「ご主人様、手！指が出そうです！安藤様、いってらっしやいませ」
手を振ろうとするのをロジオンに止められる主人を横目に見ながら、あきらはバス停へと駆けて行った。

7. いってらっしゃいませ（後書き）

お待たせしました。

ホームステイ先の一家には親密にしてくれる所もあればろくに接触を図ろうとしない所もあるとホームステイ経験のある知人から聞きました。

どんな事も、結局は関わる人次第みたいですね。

8. どうでしょう

8. どうでしょう

アンナはその日も機嫌が悪かった。いつものようにビールの飲み過ぎで頭が痛いのもあるが、今日は他にも理由があった。寝ている最中に大きな音が上がり、それに驚いたせいでまともに眠れなかったのだ。銃声ではないのは分かったし、起きるのも億劫だったので昨晩は調べようとしなかった。

だが今は朝。辺りが明るくなったので、行こうと思えば音の上があった場所を覗きに行ける。

気だるさを引きずりながら、アンナは思い足取りでキッチンに向かった。預かった留学生のいるガレージの辺りで音がしたのだけははっきり分かっていて、引き取ったはいいが、面倒を見る気の起きないその留学生が騒いでいるのかと思い、窓からガレージを覗きもうとした。ホームパーティをするタイプには見えなかったが、万一という事もある。万一騒がれて近所に文句を言われるのは自分なのだから、たまったものではない。

「全く、何だつていうんだい」

面倒に思いながら彼女はブラインドの隙間から目を凝らした。

車庫の口から鼻先を出している白い自動車の向こうには、夫に手入れをさせている彼女の庭の芝生が広がっている。その先にはガレージの壁だ。白塗りの壁にカーテンのかかった窓。彼女から見て、その壁までの間には視界を遮るものは何もない。ここから見た限りでは、何の異常も見られなかった。

首をひねり、裏になら何かあるのかと見当をつける。これも面倒に思いながら、彼女はサンダルのまま外に出た。

「ああ、面倒くさい」

大股で庭を横切り、芝生の上を転がっている水撒き用のホースを

蹴り飛ばす。口を宙に跳ね上げられて再び地面に倒れたホースには目もくれず、アンナはずかすかとガレージに近づいてその裏を覗きこんだ。

朝日が昇っているせいで、そこには影が落ちていた。ただ見通しはよく、そのおかげで平坦な芝生を望む事ができた。

「あら？……何もない」

肩透かしを食らったような気分です首をひねった後、アンナは素直に引き返した。何もなければここにいる理由もない。

ふと思いついてガレージの扉を開き、部屋を覗く。誰かがいたり、隠れたりしているようには見えなかった。

「じゃああの音は何だったんだろうねえ……？」

腑に落ちない思いを抱えたまま戸を閉め、彼女は家へと引き返していった。自分の背中を三人の人物が息を殺して見送っている事など、ちつとも気付いていなかった。

家の裏口が閉まってしばらく経った頃、リズは自分たちの周囲にかけていた魔法を解いた。彼等の頭上や、バイクとテントの真上に白い点が浮かび上がる。合わせて三つ。それらの点は中心から一気に膨らむように円へと変わり、対象を上から囲むように広がった。円の中にはバツが描かれており、円がゆっくりと回っている事を示している。円の範囲内にあるものを全て外部から認識させなくする、隠蔽の魔法。もちろんと言うべきか、魔女のリズによるものだ。

三つの魔法の円は降下を始め、円の中のバツを固まっていた三人の体やバイク、テントの中をすり抜けさせて地面に到達する。その後、役目を終えた円は芝生の上で再び収束し、最後は消えてなくなった。

「よし、隠蔽成功」

魔法の効果がなくなったのが分かり、ロジオンが緊張を解いて深く息を吐いた。彼と彼女の様子を見て、遅れて主人も息を止めるのをやめた。ロジオンがすぐそばにあるバイクに目をやる。

「隠す暇がありませんでしたからね。危ない所でした」

「ホントホント。バイクもテントも片付けたいけど、場所がないのよね」。勝手にガレージにいれる訳にもいかないし」

「そこは流石に、安藤様の許可がいりますから」

「一宿の恩は重いな」

首を傾けて困った表情を浮かべるリス。ロジオンも解決策を見出せず、うつむと唸った。

人の街に降りた以上、目立つ真似はできない。彼等を人外という乱暴な言葉でくくる連中に見つかれば大騒ぎになってしまうからだ。掴まったりしてしまえば、良くて牢屋入りだ。研究所が見世物小屋か、どちらがマシかで悩む話になる。

「さっさと物件見てきた方がいいかな？」

「ですね。早々に行きましょう。……ご主人様？」

後ろに振り返ったロジオンは、そこで初めて主人の様子に気付いた。後ろをじつと見たまま、その場を動こうとしていない。落ち着きのない彼にしてはすいぶん珍しい事だった。

「どうかされたんですか？」

「……ん？ああ、聞いてるよ。不動産だっけ？」

「ええそうよ。気になる事でもあるの？」

リスに聞かれ、彼は首を縦に振った。

「うん。あきらがな、元気が無い気がしてな」

「どういう事？」

「あきららは学校に行ったんだろ？なら何で嫌そうな顔をしてたんだ？」

主人の言葉に、ロジオンは思い当たるものがあった。あきらを見送った時、彼女がこちらに愛想笑いを向けた後にそういう顔を確かかしていたのを、彼も見ていた。そして先ほど主人が目を向けていた先も、あきらが走って行った方向と同じだった。

「私学校行った事ないから分らんが、人がいっぱいいるんだろ？で、それで何であきらは楽しそうじゃないんだ？」

二人にそう言いながら、主人は自分の昔を思い返していた。

今よりもずっと大きな城に両親と暮らしており、親の城で抱えていたゾンビの講師達に勉学を教わっていた頃だ。幼い彼はほぼ毎日、自分の部屋や城の庭、あるいはピアノの前で様々な講師に睨まれながらものを教えられていた。貴族的な教養と、貴族としての自覚を持つためだ。かつての彼はそれを当然の事と受け取っていたが、一方で学校というものに憧れを持っていた。

当時多くの吸血鬼は人間の貴族として振舞いながら暮らしていた。庶民の吸血鬼は人間に見つかりやすくすぐに駆逐されていったので、自然と権力を持つ身分の者だけが生き残った結果だった。彼の両親もその例に漏れず、村の領主として君臨していた。そして村を統括する領主らしく人々の生活の様子を見て回り、その話を息子である彼に聞かせていた。学校を知ったのも、それがきっかけだった。

一つの部屋に多くの子供達が集い、勉学に励む。その様子を想像し、改めて城を見ると、そこには大人しかいない。当時子供だった彼が孤独感を持ち始めるのも、無理からぬ事だった。

社交場に連れて行かれる事も殆どなかったので、同じ年頃の友達も作りにくかった。長命な吸血鬼は子供を作る必要があまりないので、それが更に主人のしたい事を困難にさせていた。

ただ、巡り合わせが無かった訳ではない。同じ位の歳の子と出会い、語らい、遊ぶ。年に一回あればいいその機会に、彼はいつも胸を躍らせていた。事実、仲の良かった友達はいたし、楽しかった思い出もある。

「あの子は簡単に友達と会えるんだ。私と違ってな。……もしかしたら、友達がいらないのかも知れん」

深刻な顔になった主人に、ロジオンとリズが顔を見合わせた。二人とも主人の心配している事の内容は分かるが、それがどれだけ重大な悩みにつながっているかは計り兼ねていた。

「……そうかもしれないけど、あたしらに出来る事ないでしょ？それは、あの子がどうにかするべき問題よ」

「冷たいな君は。屋根の恩はどう返すんだい？」

リズが口を曲げて黙りこむ。唸るリズを落ち着けようと、ロジオンが代わりに主人に尋ねた。

「ですが、できる事ありませんよ。それに、いささか踏み込みすぎでは？」

「何を言ってるんだお前は。プロポーズした相手の悩みをそのままにできるか」

「何を言ってるんだアンタは」

ロジオンは思わず素になって主人に聞いた。

「あれやつぱり本気だったんですか!？」

「もちろんさ。私は常に本気だ」

「冗談みたいな存在のくせに……」

「お前に言われたくはない」

吸血鬼とゾンビが互いに言い合うのに、魔女が冷めた目を向けた。

水掛け論に興味はないと、リズは口を挟む。

「……で、アンタはどうしたいの？」

「決まってるだろ。彼女の助けになるのさ。私達は恩を返せるし、あの子は友達を作れる。ひよっとしたら、あの子が君の物件探しを手伝ってくれるかもしれないぞ」

「む……」

リズにとつて、それは望ましい事のように思えた。何も知らないで探すよりは、土地に馴染んだ人間に協力してもらった方が当然良い。加えて、素性を隠す必要があるので望む条件も必然的に多くなる。

土地勘があり、且つこちらの事情を知っておりその秘密を漏らさない人物。あきらがそんな人物になりえるのなら、リズには願ったり叶ったりだった。

「……問題は、あの子の口の堅さね」

腹を決めたリズが、バイクに歩み寄った。

「リズ様、まさか」

「そうよ、彼女を見に行くの。一旦、荷物をテントに入れて頂戴」
サイドカーに高く積まれた荷物の山を叩き、リズはロジオンに言った。彼には彼女が何らかの考えを持って主人に賛同しているのは察せたが、素直にこれに同調しようとは思えなかった。

「ですが、まさかあの方の学校に立ち入るのですか？ 私達は部外者ですよ」

「大丈夫よ、その辺はどうかなるから」

「ああ、どうにかなるな」

「……本当ですか？」

胡乱げな目を向けるロジオン。

「何、簡単さ。生徒のふりして入ればいい」

「そうよ、堂々としてればばれないものよ」

「まずは皆で鏡を見ましよう」

黒い帽子と外套で全身を隠す男と長い銀髪の黒い肌の女に、アイパッチをした色の白過ぎる男は冷静な一言を送った。

ホームルームが終わり、五分後の一時限目を待つ時間になる。窓の外に目をやりながら、あきらは暇を潰していた。一日の中で、一番持て余してしまう五分だ。授業で使うノートやペンを出してしまえば、後は何も考える事が無くなってしまふ。

窓から目を離し、何の気なしに手先をいじる。そこでふと人の気配を感じ、彼女は顔を上げた。

そこには、あきらを見下ろす男が一人いた。彼女の知っている顔だ。

「やあ、アキラ。その、次の授業は何だったっけ」

そばかすの目立つその青年は、言いにくそうに彼女に尋ねた。

彼女は彼を知っていた。同級生のジエームスで、彼女のクラスの中心になっっている男だ。ラグビーをやっているらしいが、その割に選ぶっている所がないのであきらも彼に悪い印象を持っていなかった。むしろ好意的に思っている。ただ、それを態度に表せるかどうか

かは別だ。

「……数学」

「あ、そうなんだ。どうしよう、確か次までが期限の課題があったんだ。君は終わったの？」

「……うん、まあ」

「すごいな君は。俺なんてさっぱりだったよ」

ジェームズの言う課題は、彼の言うように提出の期限が迫っていた。加えて、担任が厳しいので生徒達からは非常に恐れられていた。あきらは常に締め切りを守っていたが、彼女の知る限りジェームズは期限をよく破る常連だった。

「申し訳ないんだけど、写させてくれないかな？」

あきらは目を瞬かせた。ジェームズを見、相手が正気かどうかを探る。

「他の人は？」

「君に頼みたいんだよ」

こう言われては、彼女は警戒せずにはいられなかった。

親しくない人間にものを頼むのは、知人相手にはできない事をしたい時だ。ノートの持ち逃げは大いに考えられるし、本当に写したとしてもすぐに返ってくるとは思えない。ジェームズが他の同級生に又貸してしまえば、当然手元に戻る可能性は低くなる。

彼女の目つきが険しくなるのを見てとったのか、ジェームズはなおも食い下がった。

「頼むよ、今日居残りだと、デートに遅れちゃうんだ」

情けない顔になる彼に、あきらの仏心が揺らぐ。

「……すぐに返してよ」

釘を刺しながらも、彼女は自分のノートを差し出した。ジェームズの顔がぱつと明るくなる。

「ありがとう！次のホームパーティーには招待するよ」

ノートを受け取ると、彼は前列にある自分の席に急いで戻っていた。鞆のジッパーを開き、開いた隙間に手をつまむ。あきらは

その様子をぼんやり見ていたが、すぐに興味を失って窓の外にちらりと目を向けた。

と、そこで見えたものに気付く。

教室の窓から見える、グラウンドに面した道。そこに沿って等間隔に植えられた樹の陰から、黒くとがった帽子が生えているのが見えた。見間違いかと思いい眼鏡を外し、目元をこすった後にまた眼鏡をかけてそこを見る。帽子は変わらずそこにあり、その根元からは見覚えのある顔がこちらに目を向けていた。啞然とした顔になった彼女に気付いたのか、彼女に向かって小さく手を振っている。見間違いない。昨日、彼女のガレージのそばにテントを立てて寝た黒ずくめの男だ。

何でここに？

口から出かかる疑問を必死に押さえ、彼女は彼を見る。彼はにんまり笑うと、外套の下から布を出し、それを誇らしげに両手で広げてみせた。その布はバスタオルくらいの大きさで、真っ赤なインクで以下の文字が書きつづられていた。

『10月31日はハロウィン』

8. どうしましろう（後書き）

お久しぶりです。待っていてくれた皆さん、ありがとうございます。

次の回ですが、事情により一月ほど投稿できなくなってしまいました。

なので一月、あるいはそれ以上お待ちいただくようになってしまいました。

申し訳ありませんが、気長にお待ちくださるようお願い申し上げます。

ここで投げ出すつもりは毛頭ありませんので、お付き合いの程よろしくお願い致します。

9・恥ずかしいです

9・恥ずかしいです

「いやいやいや」

あきらは窓から見える男に向かって、何度も首を横に振ってみせた。

いくらハロウインの本場だとは言え、イベント行事が全身を隠した不審な男が大学のキャンパスにいていい理由にはならない。時期も少し外している。

彼女の意図に気付かなかったのか、窓から見えるその男はタオルを帽子の中にねじ込んで木の陰から出ていった。無警戒な軽い足取りで、グラウンド沿いの細い道を歩いて大学校舎に近づく。

そんな彼に、たまたま外に出ていたららしい男の教授が近づいた。「ちょっとアンタ、誰なんですか？業者や勧誘はお断りしてるんです」

厳しい口調で年配のその教授は黒ずくめの男に詰め寄って言う。窓を開け、様子を見ていたあきらにもその声は聞こえた。一方、男は彼を見て首を傾げた。

「業者？別に何にも売らないぞ。ああ、暇なら売る程あるか」

「何を言ってるんだ、全く。仮装にしても、時と場所を選びたまえ」

男の台詞は、教授にとつては面白くないジョークにしか聞こえなかったらしい。堀の深い顔にさらに皺を寄せ、不機嫌になったのを露骨に顔に表した。それを見て、男が目を瞬かせる。相手がなぜ怒っているか、まるで分かっていない。

ここまで聞いて、あきらは目を教室の出口に向け、その場を後にした。

彼女の視線の有無にも気付かず、二人はまだ言い合っていた。

「必要があつてしてるんだがなあ。何、自由の国の住民でも風習文

化にや縛りがあるの？」

「TPOなら山ほどな。これだから最近の若いのは……」

面白くもなさそうに呟く老人に、男がいきなり頬を膨らませた。ブツ、という息の漏れる音が、閉じた口から漏れる。手で口を押さえ、男は背筋を曲げた。堪え切れない、といった具合に裏返った笑い声が手の下から上がった。

「ふふ、くくつ。あ、アンタの方が年下だって……」

「はあ？一体何を」

言ってるんだ、と言いかけた教授の下に、ようやく校舎の玄関を出られたあきらが駆けつけた。二人の間に立ち、教授に向かって弁解する。

「す、すみません教授。この人私の知り合いなんです。ご迷惑をおかけしました」

そう言われて、年配の教授は最初胡乱げな顔をした。こいつの知り合いか、と言いたげな目を彼女に向け、そして嫌味っぽく言う。

「……友達を選ぶんだな」

それだけ言うと、彼は二人から離れていった。任せた、と言わんばかりに突き離れた態度だった。

「何だい、愛想のない。私の師は全員常にニコニコしていたぞ」

「それは……、多分、強く出られなかったからじゃないですか？」

彼女の推測は当たっていた。

彼の言う講師は全員親が作ったゾンビなので、粗相のないようにそうせざるを得なかったのだった。

「何だ、君もロジオンみたいな事を言うな」

「……ん、あれ？お一人なんですか」

「ああ、アイツはね、今は……」

「マミー、変な人が冷蔵庫にいるよー」

「見ちゃダメよ。行きましょう」

ロジオンの目の前で、たくさんの親子連れがお決まりのようにそ

んなやり取りが繰り返された。身動きが取れないまま、彼はリスが帰ってくるのを待つほかなかった。

今彼がいるのは、大手スーパーの冷凍食品コーナーにあるガラス戸の裏側だ。店舗自体の規模が、日本のデパートの五倍はある広い敷地と、むき出しの鉄骨が望める高い天井とが広がる空間の一角。車でも入れられそうな販売店用の冷蔵庫の中には、ピザやケーキなどといった冷凍食品のパックやケースが所狭しと詰め込まれている。鏡のようなパッケージの光沢が、霜の降りる冷蔵庫内で控えめに光っていた。ショーケースの役目も兼ねたガラス戸越しに、訪れた客達はその様子を見る事ができた。

そんな中に誰か入ってれば、嫌でも目立つ。子供がいたずらで入るのはもちろん、大人が入ってれば嫌が応でも道行く人の目に入る。

好奇と嫌悪の目に晒されながら、ロジオンは無心になろうと身じろぎせず、じつと天井から下がっている蛍光灯を睨み続けていた。元いた城の中よりも温暖なこの地域で、一人が入れる低温な場所というのがここしか見つからなかったからである。肉が凍るのはロジオンとしても望む所ではなかったが、蠅にたかられるよりはマシと自分に言い聞かせて入っていた。

しばらく経った頃、冷蔵庫の扉が開かれた。やっと来たか、とロジオンが視線を自分の前に戻す。

胸を撫で下ろすのも束の間、彼の前に現れたのはリスではなかった。不機嫌そうな顔をした中年の女性店員が、間近で彼を見上げていた。制服から、店の店員である事はロジオンにも容易に知れた。

「お客様、出てもらえませんか？」

「はい、失礼しました」

全身の肉の表面が固く凍ってきているのが分かっていたので、ロジオンは素直に退去に応じた。血や健まで凍れば、流石に彼でも動けなくなる。これ以上の長居は逆に身体に支障が出てしまうのだ。

ロジオンは靴の底を冷蔵庫の網から、朱色に塗られたリノリウム

の床に降ろす。店内の視線が集まっているのを全身に感じながら、彼はその場を後にした。敷地をまたぐように設けられた通路を、早足で通り過ぎる。全身からほんのりと白い冷気を漂わせる彼を、数人の人々がぎよっとした顔で見送っていた。

その途中、彼は自分が待っていた相手が棚の商品を物色しているのを見つけた。無骨な鉄製の棚に挟まれた細い道に入り、彼女に近づく。

「リズ様、何をされてるんですか？」

「……んん？あ、ロジオン、どれがいい？」

そう言っただけで彼女が指差したのは、クーラーボックスの山だった。奥行きのある空間に、ぎっしりと空の箱が詰まっている。それらは全て売り物だった。

リズの言葉の意味を理解し兼ねて、ロジオンは首をひねった。

「どれ、と言いますと？」

「鈍いなあ、アンタが入るんだからしっかり選びなさい。文句言われても困るの」

「……は？」

「そうなんですか、ロジオンさんの……」

理解に苦しむあきらに、主人は呑気に言っただけだ。

「そ。ゾンビって不便だね。下手に温かい所にとどめると腐って自壊するんだ。全く、誰があんな風にしたんだか」

他人事のように呟いて、彼は肩をすくめた。

「……それは分かりましたけど、それで何であなたがこちらに来たんですか？」

正直な所、あきらにとって彼の来訪はありがたくないものだった。こうして話している間にも、彼女と主人とは人目を引いていて、目立っていた。

「セイチーズ」

いきなり声が掛けられるや否や、あきらがそこに目を向けるより

も早くフラッシュの光が瞬いた。

その後目を細めて、あきはカメラを構えている相手を睨んだ。知らない顔ではないし、写真を撮られるのも何度か経験していたからだ。ゴシップ好きのメアリと言え、彼女の大学で知らないものはそうそういない。

物言いたげなあきらの視線にも気付かず、赤毛の女生徒は今更のようにおやおや、とこぼした。

「変わった友達がいるのね、アキラ。この方は？」

あきが答えるよりも早く、その赤毛の女生徒は黒い外套の男に無遠慮に近づいた。

一方、近づかれた男は淀みなくこう答えた。

「アキラの恋人です」

「ちよっ!？」

驚いたあきは、慌てて彼の手を引いてメアリから引き離れた。

そして耳打ちするように顔を近付けて小声で聞く。

「ちよっと、何言ってるんですか」

「何って、嫌だった？昨日の晩、君、断ってなかっただろ」

男は澄ましたようにそう答えてみせた。帽子の作る影の下で、閉じられた口が大きく横に広がっているのがあきらには見えた。自慢げに笑みを浮べているのがよく分かる。

確かに彼の言うように、昨日あきは彼から受けた結婚の申し出を断ってはいない。しかしそれはうやむやの内に消えただけの話であり、冗談だと思っていたので申し出を受けるつもりも全くなかった。イエスでもなければ、ノーでもないのである。

誤解を解くために、あきははつきりと言った。

「だからって、肯定もしてませんよ」

「そうなの!？じゃあ嫌だと!？」

途端に男は狼狽し、落ち着かなさそうに肩を揺すり始めた。どう答えればいいのか、あきは少し悩んだ後こう続けた。

「保留、といえますか、考えさせて欲しいんです。何せ、大事な話

ですから」

「そ、そっか。そっか、まだお友達でオーケー？」

「それなら歓迎です」

「ヤッホーイ！」

子供のように跳び上がった男の後ろ姿を、またもメアリがシャッターに収めた。

9 ・ 恥ずかしいです（後書き）

大分空いてしまいました。お待たせしてすみませんでした。
仕事の関係や他の投稿作に取りかかるなどで時間がかかりました。

10.そこはどこですか

10.そこはどこですか

「へー、わざわざ遠方からやって来たと」

メアリは開いたメモ帳に筆を走らせながら、主人の言葉に耳を傾けていた。主人の異様な格好に臆する様子はまるでなく、興味しんしんといった体だ。それに主人は気を良くし、熱のこもった口調で答える。

「そう！森を越えて山を越え、空をまたいで一直線！そうまでして会いたかった相手がいるって、素晴らしいと思わないか？」

芝居がかった大げさな身振りを交え、主人はとめどなく話を続けた。傍で聞いているあきは、落ち着かない気分で主人が下手な事を言わないか気をもんでいた。

メアリに見つかった以上、変な誤解をされた場合それが校内全体の常識のように広まってしまう可能性がある。そのためやむを得ず、あきはかつて他の国に旅行に出たと嘘をつき、主人とはそこで知り合ったとして彼と口裏を合わせる事にしたのだった。主人もそれを理解し、うまく細部をごまかしながらメアリのインタビューに答えていた。

「寒風吹きすさぶ地にて一人、薄情者の悪態と冷たい視線に耐える日々。そこで出会ったあきはとても私によくしてくれたよ。さながら地獄にホッケー、友人のリズから聞いたニッポンの諺を思い出すようだった」

「……あのそれ、仏です」

あきらが訂正した。主人の言葉にボロが出たら話を逸らせるよう気を張っていたが、こんな場面で話す事になるとは彼女も思っていなかった。仏という言葉が明らかに日本語圏の住民ではない主人にとって馴染みの薄い言葉なのは分かるが、主人の口にした事的情景

を思い浮かべるとあきらはどうにも反応に困った。

主人とメアリが目を丸くしてあきらを見る。

「ホトケ？……ああ、ジャパニーズゴッド？」

尋ねたのはメアリだった。

「う、うん。それくらい、とつてもありがたかったって、言いたかったんだと思う」

あきらの補足に、主人が首を小さく傾けて肩をすくめ、「分かっているう」とでも言いたげな顔で彼女を指差した。

「そう、正に！君はその、ええと、ホットケーキ？のように温かい人だった！なのに、恥ずかしながら私は彼女に報いる術が何も無い。どうしたらいいと思うメアリ？」

ちやかすようにも聞こえる言い方で、主人は真面目な顔でメアりに尋ねた。

「それをあたしに聞かれてもなあ」

「いや、別にそんな気を使ってくれなくても……」

あきららは恩を売ったつもりはなかったのだが、それでもこうして面と向かって感謝されると面映くなる。

「あきららは優しいからな。あんな出会い方をしても通報しないし」「通報？」

「うわあ、ちょっと！」

あきららはあわてて主人の口をふさいだ。メアリが首を傾げる前で、あきららは咄嗟に言い訳をする。

「そ、その、馴れ初めがね！事故みたいなもの」

「どんな風なの？すつごくく気になる！」

メアリが大きく食いつき、あきらに詰め寄る。あきららはさらに困惑し、嘘の用意に手間取った。嘘とばれないように、との思慮から、事実の中から不自然でない部分を口にする。

「え、ええと、その、ば、バイク……？」

「バイク？この人が？」

「ああ、私じゃないんだが」

「ちよ、ちよつと！」

あきらはメアリに聞こえないよう、主人に小声でささやいた。

「どこまで話す気ですか？」

「え、全部だけど？」

「それはダメですよ！」

「なぜ？」

本気で分かっていないらしく、主人は首を傾げた。そんな彼ののんきな態度に、あきらは不安を覚える。

あきらは主人が吸血鬼である事には半信半疑であった。しかし今朝のロジオンの必死さを思い出すと全くの嘘とは思えず、主人を好きにさせるのには大きな抵抗があった。

そんな彼女の気持ちなどいざ知らず、主人は自分の不満を口にする。

「私は人前に出しても恥ずかしくないように生きてたつもりだ。隠す事などほとんどないと思うんだが……」

「大きな問題になっちゃいますから、お願いします」

「むっ……」

納得しきれないで主人が腕を組んで唸ったその時、チャイムの音が辺りに響いた。その音に、あきらとメアリがはつとする。

「あ、もう授業だ！アキラ、急ごう」

「あ、う、うん！それじゃ主人さん、また」

先行するメア리를追いながら、あきらは手を振って主人から離れていった。主人は音の意味を分かっていたが、それでもあきらを引き留めたりせず手を振って彼女を見送った。

「……うーむ」

すつきりしない顔で、主人は唸る。根が楽観的とはいえ、彼はあきらが自分に憤むよう言うのに次第に不満を覚えてきた。彼にすれば、彼女がそう言う理由が分からないのだから無理もない。

「……授業、か。せっかくだし、見ておきたいな」

少しばかりやり返したいという気持ちと、ささやかな好奇心が主

人の中で首をもたげる。

「目立つなと言われたが、この通り私は地味だ。見つからなければ問題ないだろう」

自分を包む黒い外套を見下ろすと、彼の目に確信に満ちた光が宿る。黒いイコール目立たない、という短絡的な発想を得ると、彼は揚々とあきらの後を追った。

がらがら、とロジオンの足元で絶え間なく音が響く。暗く冷たい暗闇の中で、彼は身じろぎひとつせず時間が過ぎるのを待っていた。今の彼を収めるその闇は、不規則に彼を揺らし続ける。全身を包む湿った感触は彼にとっては心地よいものだったが、肘の一つも曲げられないとあつては窮屈この上ない。

どれくらいの時が経った頃か、彼はぼつりとつぶやいた。

「……暇ですね」

彼にすれば事実を端的に告げただけなのだが、暗闇の向こう、彼の背後から女の声が上がった。

「人に運ばせといて、ずいぶん言い草ねえ」

嫌味な言い方だったが、どこかくたびれた声だ。現状を思い出し、ロジオンは自分の持つ不満をぐつと飲み込む。

「……失礼しました」

「そうよ、分かっている？レディに荷物引かせて文句なんて、紳士的じゃないんじゃない？」

そう言うリズ表情には、多分に疲労の色が現れていた。彼女は今、白昼の路上でロジオンの入ったクーラーボックスを引いているのだ。

熱を表面にためない白いそのボックスの中には大量の氷が入っており、その中心には古新聞にくるまったロジオンが収められている。氷で冷えるのはともかく、服がぬれるのを彼が嫌がった結果だ。底に付いた車輪のおかげで運搬は容易だが、重い事に変わりはない。しかも歩道に敷かれた石畳の細かい起伏が何度もバランスを崩しに

かかるので、リズの疲労はたまる一方だった。

空では高く上った太陽が、容赦なく街中を照らしている。赤や白で彩られた家々の前を通りながら、リズは一人汗を流しながら進み続けた。

「いくらあなたの死活問題と言っても、ねえ。少しは休ませてもらえないの？」

箱の中のゾンビに向かって、リズはそう愚痴をこぼした。

両手で後ろ手に大きなクーラーボックスを引くリズの姿は、多民族国家であるアメリカであつても異質なものだつた。銀髪のがすぼまり、黒い肌を汗が流れる。しかも時折独り言を言っているようにしか見えないので、時たま通りすぎる人々が不審者を見るような目を彼女に向けていた。ロジオンの声はこもっているので、すぐ近くにいるリズにしか聞こえない。

「ですが、ご主人様を一人にするのは不安なのです。見ていない所で帽子でも取られれば……」

「それは同感ね。けど、あいつもそんなに迂闊じゃないでしょ。自分の体質忘れてるっていつても、美白つて言えば馬鹿正直に取らないし」

周りの目など気にも留めず、リズはロジオンにそう言った。ちょうどその時、青いパトライトを乗せた車が彼女の目に入る。どんどん近づいてくるそれは、次第に速度を落とし始めた。

「……やば、面倒くさいのが出た」

正直な感想を口にすると、リズは箱から両手を離れた。重い音が上がってクーラーボックスが石畳に落ち、中身を大きく揺らす。

「んがっ!？」

ロジオンが一際大きな悲鳴を上げた。たまたまずぐ近くを通つた小学生のグループがぎよつとした顔でクーラーボックスを見る。

「ちよつと、見世物じゃないのよ」

迷惑そうな顔で彼女を見ると、子供たちは嘲るような目を彼女に向けて逃げ出した。態度だけは怖いもの知らずといった子供等を胡

乱げに見送り、彼女は指を立ててその手を上に向けた。パトカーはどんどん距離を詰めていく。リズはロジオンの入ったクーラーボックスに腰掛け、あげた手の指で小さく円を描いた。指先にこもった小さな光が、その軌跡を空中に残す。その円の中に、彼女はバツ印を描き足した。

たちまち円はリズの指先を離れ、径を大きくしながら空中に浮きあがる。しかし上がったのは一時の事で、円は広がりながら下降を始めた。

馬鹿にした目で見ていた子供達や、不審者を見るような目をしていた警察官等が次に起こった出来事に目を剥く。

空中の円が下りてくるにつれ、円の上に突き出るはずのリズの頭が、肩が消えていく。驚きと絶句の中、ついにリズとクーラーボックスは彼等の前から姿を消した。

遅れて、戸惑いと興奮の声。

「な、何だ一体？」

「すげー！何なに、どこに行ったのー！？」

にわかに辺りが騒がしくなる。その声は、ロジオンの耳にまで届いていた。

「……リズ様、また魔法を使いましたね？」

「うん」

あっさりと首肯。二人の会話は、隠蔽の魔法によって外部には全く聞こえていない。今朝目にしたのと同じ魔法だったので、ロジオンにも彼女が何をしたのかはおおよそ察しがついていた。少し前にパトカーを撒いたのも、この魔法のおかげだ。

助かったのは事実だが、ロジオンはリズの魔法に対する気安さに不安を覚える。

「……目立つ真似はよした方がいいのでは？」

「見つからないし、これはセーフでしょ。人間がないモノをどうやって追いかけるのよ」

少しも悪びれない様子で彼女はぱたぱたと腰の下の箱に手をふっ

た。声だけで彼女の様子がありありと伝わり、ロジオンははあ、とため息をついた。

「お世話になつて言うのは何ですが、この辺りで住み辛くなりますよ？」

「大丈夫よ、その時は変装すりゃいいし」

「そんないい加減な……」

リズが住いを見つけられた訳を、ロジオンは分かった気がした。

静まり返った教室で、教授が白墨を黒板に打ち付ける音が静かに響く。席に着いた生徒たちは皆、神妙な面持ちで黒板の文字を写していた。思い出すように、ぽつりと老人の教授が呟く。

「……講義の途中だが、君達に言っておく」

基本的に、この教授は無駄話を一切しない。講義の途中で別の話題を振る事など例がなく、教室全体で小さく動揺の聲が上がった。

「ああ静かに。何、大した話じゃない。……君等の中には何をしようが許される、そう思っている者もいるかもしれん。だが社会には法があり、規則がある。ケダモノでないのなら、そうした決まりを守るべきだ。そう思わんか？」

生徒達に問いが投げかけられる。真面目に黙って首を振る者もいれば、説教くさいと露骨に耳をふさぐ者もいる。その中で一人、あきらは自分が責められているようで居心地が悪かった。

「……無論、君達だけが悪くなつたとは言わん。君等が周りに感化されて、良くない道に走ってしまうのを、私は危惧しているのだ」
そこまで聞いて、あきらは気付いた。

教授はじつと彼女を見ていた。思い返せば、今朝外で主人を呼び止めたのもこの教授だ。留学して以来問題を起こしていないあきらが、悪い仲間とつるんでいると思つたのだらう。呼び出されて言われるより波風は立たないだらうが、いらぬ心配をかけている事に彼女は少しばかり痛めた。

「何が言いたいかと言うとだ。友達はしっかり選べと……ん？」

老教授の訓戒は、半端な所で切れた。生徒全員が彼を見上げ、そして彼の視線を追う。

廊下に面した窓の向こう側で、ぴよこぴよこと先を揺らすとがったものがあつた。その根元では大きな円盤と、さらにその下で黒い布きれをまとつた何者かがじつと教室の様子を見ていた。

あきらは心の臓が、喉から飛び出そうだった。

覗いている男は最初視線に気づかず、教室全体に目を巡らせていた。その後あきらの顔を見つけ、お、とでも言いたげな表情を浮かべた。そしてようやく自分のいる場所に視線が集中しているのに気付いた。何事かと後ろを見るが、何もない事に首をひねる。

ふと気づき、彼は教室を見ながら自分を指差す。あきらを含む何人かの生徒が、それに頷いた。ようやく現状を理解したその男、主人は身を曲げてそそくさとその場を後にした。

「……さっきの不審者か」

教授が腹を立てながら教壇を降り、廊下に出た。そこへ、学校の用務員が息を切らせてやってくる。

「おお、これはいい所へ」

そこまで言った所で、教授は用務員の様子に驚いた。

中年の太つたその男は、顔も服も粉をまぶしたように白くなつていたのだ。血走つた眼で、息を切らしながらその用務員は教授に尋ねる。

「どつちへ行きました？」

「あ、あつちです。とつ捕まえて、追い出してください」

「もちろんですよ先生。あの野郎、消火器をぶちまけて逃げやがったんだ！」

血の気が多いその用務員は、怒り狂つて教授の指差す方向へ走り出した。

何事かとどよめく教室の中で、あきらのすぐ近くの席にメアリが座つて尋ねる。

「何しに来たの、あの人？」

「さ、さあ……？」

あきらには嫌な予感しかなかった。

「まいったまいった」

主人は早足で歩きながら、独り言をつぶやいた。

事の始まりは、彼が校舎に上がってすぐ目についた、赤い瓶のよ
うなものを手にした事だった。何だろうといじった結果、噴き出し
た白い消火粉が辺りにばらまかれたのだった。

「あれはちよつと怖かったなあ。驚いて、来た人に思いきり吹き付
けてしまったし。流石に悪い事をした」

元より目立つ真似をする気はなく、騒ぎを起こすなど論外だった。
授業中という事もあり、人けのない廊下を歩きながら主人はこそこ
そと歩いていった。そこへ、背後から声が飛ぶ。

「こおら、不審者！そこで待つてろ！」

主人が振り返ると、廊下の向こう側から真つ白な顔の用務員が走
ってくるのが見えた。見た顔だったので、主人の足が止まる。

「おお、先ほどの。いや、誠にすまな……！？」

そこまで言つて、主人は気付いた。用務員の後ろに、さらに二、
三人の顔がある。いずれも用務員と同じ作業着で、こちらに向かっ
てきている。

「何だ何だ、悪い奴でもいたというのか？」

「お前だ、お前！」

そうがなり立てたのは、先頭に立つ用務員だった。元から荒い気
性に加え、主人に消火粉をしこたまかけられたせいで彼の頭には血
が上っていた。そして用務員という立場上、校内の不審者を見逃せ
てはおけなかった。

「ああー、話が……できないな、これは」

主人は相手に説得も言い訳も通じないと分かり、彼等から逃げ出
した。ばっさばっさと手や足の動きで外套が大きくはためく。

「待てえい、逃がさんぞ！」

木製の廊下をいくつもの靴が嵐のように踏み荒らし、怒涛のごとく主人に迫る。主人は背後から近づくとその音から離れようと、必死で走る。

「は、走るだなんて、久しぶりだぞ！」

文句を叫び、突き当りを右に曲がって階段を登る。激しい運動などいつ以来かわからない主人はすぐに息が切れ、体が重くなった。

「ひい、ひい。ま、待って……」

懇願するように言っただけで後ろを見るが、階段を駆け上がる用務員達には止まる様子がない。むしろ好機とばかりに勢いづき、主人との距離をみるみる詰めた。

「うひゃあああ！」

間抜けな声を上げて再び階段を駆け上がる。追いつく相手の一団は、階段を二段飛ばし、三段飛ばしで上がっていく。追いかけてこが始めた頃は教室二つ分はあった距離は、今や階段八つ分しか空いていない。追われる方が足を止めれば、一気に詰まる短さだ。

必死に逃げる主人の目に、一枚の扉が目に入った。目線の高さに設けられた扉の窓からは、明るい光が差している。

「しめた、外だ！」

帽子を押さえて、主人は扉へ駆け寄った。

「馬鹿め、そこは行き止まりだ！」

真っ白な用務員が勝ち誇るように言うが、主人は聞かず扉を開いた。開け放たれた戸の向こう側には、校舎の屋上の広い空間が広がっていた。長年の風雨で辺り一帯は黒くくすみ、石畳の隙間にたまった苔からは雑草が生えている。主人は遮二無二、転がるように外に飛び出した。

廊下の閉塞感から解放され息をつくのも束の間、主人は広いその場所を通って走る。遅れてやってきた用務員の二団が、追いつめたとばかりに歩調を落として主人を睨んだ。主人もそれに気づき、屋上の縁で立ち止まって息を整える。

「観念しな、もう行き場はないぜ？」

悪党のような台詞を吐く白い用務員。これに対し主人は息を落ち着けた後、呑気にこう言つてのけた。

「何を言っているんだ、いくらでもある」

そう言つて、主人は両手を広げた。

その大学は決して高さのある校舎ではなかったが、校舎を囲むグラウンドや駐車場のおかげで、空を広く望む事が出来る。

「何を言ってるんだお前、空でも飛ぶ気か？」

白い用務員のジョークに、他の用務員達が大笑いした。

「……なるほど」

言つや否や、主人が屋上の縁の盛り上がった部分に足をかけた。

そこにフェンスはなく、一步でも足を踏み外せば彼は真つ逆さまに落ちてしまう。用務員達は先ほどの態度を一変させ、血相を変えた。

「おい、本気にするな。何言つてんのか分かつてんのか？」

「もちろんだ。私は賢い子だと、何度も言われているからな」

自信満々に言つて主人は下を見下ろした。主人の胸に今は不安はなく、根拠のない自信が満ちている。

「何か私、飛べる気がする！」

「おい馬鹿、やめろ！」

用務員達が止めるのも聞かず、主人は一気に屋上の床を蹴った。

体が持ち上がる浮遊感。主人はこの時まで、自分が飛べると信じて疑わなかった。

両足を伸ばし、その先が何にも触れない事に気付いた瞬間ふと思つ。

『何で私、飛べると思つたんだ？』

疑問を持ったのも束の間、両足は彼を支える事が出来ず、彼の体は降下を始めた。

あきららは講義の間、落ち着かなくて仕方がなかった。主人が用務員に追われるのは見たが、すぐに教授が教室に戻ってきたので抜け出すタイミングを逃してしまった。その教授は戻って以来、口では

何も言わないが講義中頻繁にあきらを見てくるので彼女は針のむしろにいる気分だった。

気まずい気分から逃避しようと、彼女が窓の外に目を向ける。何度もした行為で、それまでに目にした光景に大した変化はない。進展はないが、安心感のある外の光景。そこに、上から異物が降ってきた。

何だろう、と目を凝らし、分かった瞬間彼女は目を疑った。

真っ黒い外套を着た人間が、上からグラウンドへ落ちていく。彼女に心当たりは一人しかいない。その人物は手足をばたつかせ、頭を下にした格好で降下を続けていた。

このままでは潰れたトマトだ。あきらは反射的に立ち上がったしまった。今から窓を開けて手を伸ばしても、距離が大きくて絶対に届かない。彼女が固唾を呑んだその時、主人の真下で新たな変化が起こった。

最初は小さな光の点だった。それが円に変わると、一気に広がって穴へと変わる。空中に現れたその円の中には、穴と形容したように、別の景色が広がっていた。薄暗い、どこかの建物の中と思わしき場所だ。

主人の体が、その穴の中へ入る。落下の勢いそのまま落ちる主人を呑みこむと、穴は一気にすぼまって点へと変わり消え失せた。

あつと言う間の出来事に、あきらは置いて行かれたように呆然とする他なかった。起こった事への理解が追いつかず、じつと外を見る。普段通りになった外の様子からは、異変の名残などみじんもない。

あきらが理解をあきらめ、すっきりしない気分で座り直す。そこでようやく、自分が教室中の視線を集めていたのに気付いた。その時彼女の感じた居辛さは、一層強いものになっていた。

「間一髪、ね」

指を前に向けたまま、リズはそう呟いた。

あきらの通う大学に到着した彼女が最初に目にしたのは、屋上から落ちる主人の姿だった。咄嗟に円を描き、移送の魔法を使った事で彼をより安全な場所へと送ったのだった。

「今度は何があったんですか？」

クーラーボックスの中で、ロジオンがリズに尋ねる。

「あなたの主人の投身自殺を止めたのよ」

「……何やってんですか、あの方は」

心底呆れたロジオンの声に、リズも渋い顔でうなづいた。

「まあ、これで一応ひと安心ね。あとはあいつを迎えに行けば」

「ですね。ありがとうございます。それで、どちらへお送りに？」

ロジオンからすれば当然の問いだ。しかし、これにリズは答えず、きょとんとした後顔を青くした。

「……どこにやったっけ？」

主人は目の前が真っ暗になった後、背中に激しい痛みを感じて息を詰まらせた。叩きつけられた衝撃で手足が思いきり跳ね、強かに打ち付けられる。頭を打たなかったのは、ほとんど軌跡と言ってよかった。ばがんと大きな音上がり、彼は大きく声を上げる。

「げえふ、ごふっ……！痛いぞもう！」

主人は仰向けに倒れたまま、辺りを見回した。

そこは人けのない、薄暗い建物の中だった。ステンドグラス越しの陽光の他、光源は一切見られない。屋外に面していると見られる壁以外に仕切るものは何もない広い空間で、上には屋根がある。一つの壇と、そこから伸びる赤じゅうたんに仕切られた長椅子の列、ステンドグラスで描かれた聖母像から、主人はそこが教会の中である事に気付いた。長年人の出入りがないのか、辺りに埃が積もっているのが分かる。同時に、自分がいるのが木製の長椅子の上で、それが上から勢いよく乗った衝撃に耐えられず、碎けてしまった事も察した。

「これはまた……」

主人は起き上がらず、改めて辺りを見回す。よどんだ空気に不穏なものを感じ、彼はぽつりと呟いた。

「なんだか不愉快な場所だ」

10・そこはどこですか（後書き）

何か月ぶりでしょうか、お久しぶりです。お待たせしました。

9話投稿以降、諸事情により、今まで「外に出なさい」の執筆は非常に遅れていました。

半年以上「小説家になろう」サイトものぞけず、放置していた事が後ろめたく思えた時期もあります。

それでもある日、読んでくれた人達に愛想を尽かされていても仕方ない、と思いを決してマイページを開き、驚きました。

私の思っていた以上に拙作を多くの方が読んでくれていて、しかも面白いと言っていてくれた事をその時初めて知りました。

ともうれしいと思いました。それと同時に、これ以上無責任ではられないともわかりました。

この10話はその読んでくれた方、面白いと言ってくれた方、主人やロジオン達が好きだと思ってくれた方がいなければ書けませんでした。

お待たせした事をお詫びすると同時に、今日まで応援してくださいました事にお礼を申し上げます。ありがとうございます。

まだ完結までは至っていませんので、よろしければこれからもご愛顧の程、よろしくお願い申し上げます。

11. どういう事ですか

11. どういう事ですか

リズは額を押さえ、眉間に酔ったしわを指で伸ばしながら俯いていた。その指はしきりに、頭の中身を探るように落ち着かなく動いている。

「えー……、どこだったっけー……？」

必死に考えるのは、主人を送った場所の心当たりだ。移送の魔法は普通送り先を決めて行うのだが、咄嗟の事だったので彼女はそれを意識せず魔法を行使したのだ。元々頻繁に使う魔法ではないので、使ったリズ自身も勝手が分かっていなかった。

「早く思い出してくださいよ。動くに動けません」

クーラーボックスの中から、ロジオンのせつつく声上がる。その上に腰掛けていたたリズは、負い目と責任感から言い訳をこぼした。

「そんな事言われても、仕方ないでしょ。あいつを見て思い浮かぶ場所なんて、それこそ……あ」

そこでリズは指を鳴らした。

「どうしました？」

「思い出したのよ、あいつの送り先！」

「本当ですか!？」

ロジオンの入ったクーラーボックスががたんと揺れる。リズは腰が跳ねる事を不愉快に思い、思いきり腰に体重をかけて箱を押さえた。

「ええ。あいつ今自分が吸血鬼なの忘れてるでしょ?だから、行けない場所って多いと思うの。それであたし思ったの」

こう言った後、彼女は続きを言い渋った。自分の言おうとしている事が無責任な思い付きと気付いたからで、彼女はとぎれとぎれに

こう続けた。

「き、教会、なんてどう、かなあって……」

主人は身を起こし、全身の木屑や埃をばっばと払いのけると、黙って辺りを見回した。教会の内装は質素ながらも整然としており、そのせいか人の出入りをほとんど感じさせなかった。採光を兼ねたステンドグラスと窓とを除いて照明の類はなく、色ガラス越しの光がたたえた水のように静かに教会の中を照らしている。梁の隅や椅子の下の所々には蜘蛛の巣が張っており、入り口から司祭の立つ壇までをつなぐ赤いカーペットの上には、うっすらと埃が積もっていた。

「何とも陰気だ。そして居心地が悪い」

主人はわざと声を張り上げて独り言を言った。たった一人でがらみどりの教会の中を見渡せるのが、彼にとっては面白くなく、落ち着かない。それはからっぽの空間に寒々しさを感じたのと、何より言葉にできない感覚のせいだった。そのせいで、この場所が自分にとって良くない所だと、主人にはすぐに理解できた。

「実に不愉快だ。早く帰るか」

彼は言いながら出口に向かって歩き出した。離れた所に落ちていた帽子を掴んで頭にかぶり直し、カーペットに向かって闊歩する。その途中、彼の耳がこんな声をとらえた。

「お……、……ちか……!？」

カーペットの上に乗りがけた主人の足が止まる。

「……?」

声のした方向に主人は視線を向ける。声は教会の奥まった部分にある、懺悔室の扉から上がっていた。好奇心から、主人はそこへ足を向けた。近づくにつれ、声が次第に鮮明に聞こえるようになる。

「……しなあ、これっぽっちが……だぞ?」

またも声。先ほどとは別のものだ。

主人が懺悔室の扉を開く。神父が罪を聞く側の部屋にすでに椅子

はなく、壁の小窓の柵もない。かかっているカーテンも経年劣化で黄色くくすみ、ぼろ切れ同然だ。そのぼろ切れの裂け目から見える部屋にも誰もおらず、主人は声が屋外からしている事に気付いた。二人の男が言い合っているようだ。小窓から壁の向こう側を覗み、主人は耳をすませる。

「頼むよ、これだけしか……」

「金を用意すると言ったのはお前だろ。取引は無効だ」

「ま、待ってくれ！明後日、いや明日にでも金は……」

「くどい」

がちゃ、と軽い金属同士のかち合う音が上がる。

「わ、分かった分かったよ。だからそいつをしまつてくれ！」

男の焦る様子に、主人は声の言う「そいつ」が何か気になった。

外につながる扉はあるのだが、部屋と部屋とを隔てる懺悔室の壁に扉はない。なので、彼は小窓から向こう側に出ようとしたり。

ぼろ切れを押しつけ、頭と両手とを窓から通す。両肩をねじこむと何とかそのまま向こう側に出ようと身を乗り出した。ここまで出せば出られると主人が思ったのも束の間、腰がつかえてしまい彼はバランスを崩した。足が浮いて頭が下がり、慌てて下に手を伸ばす。

「おつとと……！」

主人の手が床に触れ、持ち上がった足のかかどが窓より上の壁を叩く。無遠慮ながたん、という音が上がると、壁の向こうの空気が一気に変わった。

「おい、誰がいるぞ！」

「チツ、浮浪者でもいたのか！」

二人の声が緊張し、扉のノブが回る。主人が顔を上げると、開いた扉の向こうには、二人の男がいた。

片方はどこにでもいる太った中年だが、その顔色は異様に悪い。青白いのと顔の堀りが深いのが合わさり、不健康な印象を見ている側に強く与えてくる。手にはくしゃくしゃなドル紙幣が数枚握ら

れている。もう片方の男はサングラスをかけており、背が高い。スーツ姿で、手にはトランクケースと、拳銃とが握られていた。

主人は腰で窓からぶら下がったまま、彼らを見上げた。

「痛た、ちようどいい、ぜひ助けてほしい」

二人が眉をひそめる。彼等からすれば、黒い外套を着た美男子が、窓から抜け出そうとして失敗しているようにしか見えなかった。腰がつかえて出るに出不れない様は、誰が見ても間抜けな姿だ。

「なんだ貴様、遊んでいるのか？」

銃を構えた男が主人に尋ねる。

「失敬な、遊びで困る事などあるまい。楽しむというのは優位に立つてこそその感覚だぞ。その点で言えば、私は今真剣だ」

「何言つてんだこいつ？」

中年が声を荒げた。主人は自分の状況が彼らに理解されていない事にむくれる。

「私は困っているんだ、それが分からんのか!？」

「アホなものには違いないな。……聞いたか？」

スーツの方が手にした銃を主人に向ける。しかし、主人は銃を脅威と感じていなかった。

主人やその親が領主として対外的な生活をしていた頃、戦人は鎧を着こみ剣を取っていた。人の世に銃が出た頃には、主人はすでに城にこもる生活に慣れており、銃など一目も見たことがなかったのである。

主人は怪訝な顔をして男を見上げた。

「何をだ？お前達が何かを言い合っているのは聞こえたが、何の話か……」

主人の声は、銃声に遮られた。主人の体が窓を起点に大きく跳ねる。

ぶらんぶらんと彼の体が振られ、やがて動かなくなる。それきり、何も言わなくなった。

窓からぶら下がった男が動かないのを見て、スーツの男が銃を下

げる。

「静かになつたな」

「お、おい、いいのか、なあ？」

中年が動揺して聞くと、スーツは胡乱げな目を彼に向けた。

「お前は俺から買う気だ？」

「そ、それは……」

しどろもどろになる中年が、銃と撃たれた男とを見比べる。撃たれた男は動かず、銃口からは細く昇る煙が何度もくねってはよじれる。それが中年の不安な感情を強く煽った。中年の思考を見透かしたように、スーツが鼻で笑う。

「明日まで待つてやる。それまでにあと100ドルは集めておけ」

「え、あ、もちろんだ！だから頼む、薬を……」

そこまで中年が言った時、主人の体が大きく跳ねた。

「何だ、痛いぞ！何が起きた！？」

額を押さえてわめくのは、他ならぬ主人だった。スーツと中年が、驚いて彼を見る。撃たれたはずの男は、目を白黒させてあちこちに目を巡らせている。二人の男からすれば信じられない光景だった。スーツが動転して銃を再び主人に向ける。

「お、お前何で……」

「え、何？何が飛んだか見えたのか？蠅だか蜂だか知らないが、いきなり私にぶつかつた！おのれ、蜂にはろくなのがない！」

饒舌な主人に反して、スーツと中年が顔を見合わせる。拳銃が向けられているというのに、主人は怯えた様子を微塵も見せない。二人にはそれが何より不可解だった。まさか相手が銃を知らない事など、彼らが知る由もない。何より、今の主人の状態が二人には信じられない。

「ああそつだ、見たならば是非教えてほしい！何を話したかは知らないが……」

銃声。再び主人の体が大きく揺れ、沈黙が降りた。慣性で窓枠からぶら下がったまま降られる主人を、スーツと中年が固唾を呑んで

見る。

再び、頭が上がった。

「まただ！どこだ！蜂はどこだ！」

わめく主人を見て、二人の顔は青ざめた。

上がる絶叫。響くこだま。彼等に釣られて主人も驚く。

「何だ何だ！一体どうした、どんな蜂だ！」

未だ腰を窓から引き抜けずにいる主人が、慌ててもがく。その様子がさらに二人の恐怖を駆り立て、悲鳴をさらに大きくした。

ついに二人とも持っていたものを投げ出し、そこから逃げ出した。落とされた鞆が開き、紙切れが舞う。

「あ、待て！抜いて行け！お願い、待って！」

主人が引き留めようと声を張り上げるが、それは聞かれなかった。悲鳴は遠ざかり、やがて聞こえなくなる。完全において行かれてしまい、主人は恨めし気に彼等の消えた方を睨む。

「何だ勝手に騒いで消えるとは。礼節を知らない奴等だ」

額に穴を二つ開けた男は、そう言ってふん、と鼻を鳴らした。

あきらが校舎を出ると、そこで待ち構えていたリズと目が合った。

「あ……」

「ハアイ。少しいかしら？」

気さくに話しかけられる事に戸惑いながら、あきは黙って頷いた。

「そう、良かった。じゃあ、ここから離れましょ」

リズはそう言って踵を返し、大きなクーラーボックスを後ろ手に引いていった。あきはその後を追って歩く。彼女は箱に目を落とすし、それに疑問を持った。が、以前の主人とのやり取りを思い出すと中身にも見当がついた。クーラーボックスのふたの境目からは、か細く水がこぼれ落ちていた。

「あの、これ……」

「ああ、ロジオンよ。気にしないで頂戴」

リズが当たり前のように言うと、箱の内側からコツコツと叩かれる音が聞こえてきた。あきらはこちらの声が聞かれていると分かり、なぜかほっとする。

と、あきらの背後で一人の男が足を止めた。

「あれアキラ、その人誰だい？」

あきらが振り返ると、そこにはジェームズがいた。あきらからすれば、ノートの貸し借りで終わった相手だ。その彼がまた自分に声をかけてきたというのが意外で戸惑った。

「あ、ええと……」

「初めまして、あきらの友達よ」

あきらが返答に困っていると、リズがジェームズにつこりと笑った。

ジェームズは目を丸くしてリズを見る。銀髪で黒い肌の女など、彼にとつても見慣れない存在だ。彼は驚いた顔のまま、あきらに目を向けた。

「……変わった友達だね」

「そ、そう？」

あきらが戸惑った声で尋ねると、リズが首を傾げてみせる。

「何か？」

「いえ、別に。それより、何かご用？」

ジェームズの問いに、リズは思い出したように頷いた。

「ええ。近くに教会がないか、知らない？」

「教会、ですか？」

あきらとジェームズが首をひねる。

「そうよ。ちよっとね、知り合いがいるかもしれないの」

事情を知らないジェームズの手前、リズは詳細をぼかす。しかし、あきらは誰のことなのかすぐに分かった。なまじ自分の目で消えたのを見ただけに気になっていたのもある。

「あの人今どこに？」

「さあ……？あたしにも、心当たりがあるってだけで確証はないの

よ

「え、じゃあ今から迎えに行くんですか？」

「もちろんよ。あなた、あいつが何か分かっているでしょ？」

あきらは答えなかった。理由はわざわざ口に出すまでもない。

主人は吸血鬼で、今は教会にいるかもしれない。それはつまり、主人にとって良くない事が起こるのをあきらみに危惧させた。吸血鬼についてよく知らない彼女でも、吸血鬼の弱点は指折り数える事ができる。そのどれもが、命に関わるものだ。加えて、教会にはそれに関わるものがある。いくつもある。

「早く行きましょう。教会は確か……」

あきらが場所を尋ねるようにジェームズに目を向ける。ジェームズは事情が分からないなりに、素直に応じた。

「町はずれに使われてないのがあるよ。でもそこ、麻薬の取引があるって噂があるんだ。だから、気を付けて」

「ありがと。あきら、行きましょう」

リズが早足で先を歩きながら、あきらに言う。

「え、あの」

「ほら案内、お願いね」

有無を言わずどんどん進むリズの様子に、あきは同行せざるを得なかった。

「やれやれ、ひどい目にあった」

窓から体を抜いた主人は、一人でそう愚痴をこぼした。

前後に横にと細い腰をくねらせ、具合を見る。

「よっ、はっ。ようし、痛くない」

痛みの残っていない事に満足し、主人は両手で背中を押さえて背筋を伸ばした。

「ん、ん。しかし何だな。結局出ようとした窓から引っ込むしかなかったとは、何だか負けた気分だ」

教会の中を見回し、彼はそう一人ごちた。依然教会に人の気配は

ない。このままいてもする事がないので、彼は逃げ出した二人のいた教会の裏手へと回る事にした。壁沿いのすぐ近くに裏口があったので、外に出るのは簡単だった。

かぶった帽子の唾の下に、不意打ちのように陽光が差し込む。

「おつとと」

すぐさま主人は帽子を傾け、目を遮った。もちろん、日に焼けるのを危惧してだ。

「冬が近いらしいが、気をつけないとな。蜂もまだ飛んでいるし」
彼は早足で教会の裏手に回ると、すぐに懺悔室の入口の前に着いた。そこは教会のすぐ裏で、人目につかない位置になっている。狭いその一帯にはごみが散在しており、主人は散らかされたものに目を落とした。積み重なったチョコレートのパッケージや空き缶等に混じって、しわくちやのドル札がいくつかと、口を開いたトランクケースとが地面に転がっていた。先ほど主人が目撃した二人が置いて行ったものだ。主人は身を折り、トランクの中から零れ落ちているものを一つつまみ上げた。

「何だ、こりゃあ？」

小さなビニール袋に詰まっているのは、白い粉末だった。見る限り小麦粉のようで、主人からすれば何の面白みもない。

「……取引、か？小麦粉を？……分かん」

主人は眉根をひそめ首を傾げた。つまんだものから手を離し、顔を上げる。

「つまらんなあ。分からんからつまらん」

文句を言っただけを出ようとすると、彼の後ろから足音が上がった。主人が足を止めて後ろを見る。

そこには、警官が二人いた。揃って洗面を主人に向けていたが、主人本人にとってはささいな事だった。

「ちようど良かった、これは何だ？ぜひ聞きたい」

二人の警官はその言葉に目を丸くした。主人の呑気な態度を前にして、警官の一人がもう一人にこう尋ねる。

「今時は、売人もヤクを吸うのか？」
もう一人は、これに答えかねるといふ風に首をひねった。

信号が赤に変わり、リズが横断歩道の前でバイクを止める。きゅ、というブレーキの音の後、エンジンが不満を訴えるようにドルドルと静かに唸る。

「どう、いた？」

リズは後ろで自分にしがみついているあきらに尋ねるが、そのあきらは「いいえ」と返事を返した。未だ見つからぬ主人に苛立ちながら、リズは何度目かのその答えに相槌を打つ。

「そう。全く、どこにいるんだか」

こん、こん。

サイドカーの座席に無理やり突っ込まれたクーラーボックスの内側からノックが上がる。物言いたげなその音に、リズは渋面を浮かべて音の出所を睨んだ。

「分かってるつてば。せつつかないでよ」

こんこん、こんこん

「何よ、言いたい事があるなら言いなさいよ」

こんこん、こんこん

「……アンタ、そんなに嫌味だったっけ？」

リズが不機嫌になって尋ねるが、ロジオンは答えなかった。彼女の知る限り、ロジオンはこうしたあてつけがましい真似をする性格ではない。何より彼は彼女を恐れているから、自分から率先して喧嘩を売る事などない。

ロジオンの行動の意図が見えないでいるリズに、あきらがふと思い至る。

「もしかして、喋れないんじゃない？」

こん

あきらがの推測を肯定するように、ノックが一度返ってきた。

前方の信号が青に変わり、リズがバイクを発車させる。サイドカ

ーに突っ込まれたクーラーボックスが傾き、ふたの隙間が広がる。そこから先は一瞬だった。内側からふたが強い力で押し出され、その口が開く。溜まっていた水が一気に吐き出され、ずぶぬれになったロジオンが姿を現した。

「ぶはあっ！」

辺りに水をまき散らし、ロジオンが濡れた顔や髪を両手で一気に拭った。体のあちこちに付いた濡れ新聞紙を一枚一枚はがしていく。「あー、ようやく自由になれた。氷が溶けて、喋るのも不自由で……」

した、と言いかけてロジオンは隣の二人の様子に気付き手を止めた。彼女等のかぶるヘルメットの表面には水が飛び散っており、着ている服は共にずぶぬれで肌に張り付いていた。

「……あのね」

リズがハンドルを握ったまま、胡乱げな目を彼に向けた。走行中のバイクの上で、ロジオンがバランスを崩し、自分の入っていたクーラーボックスをかぶるようにして座席に座る。

箱を持ち上げ、ロジオンは恐る恐る顔をのぞかせて申し訳なさそうに言った。

「……すいませんでした」

リズは答えなかった。ハンドルを離さず、自分の後ろにちらりと目を向ける。

「ごめんね、こんなんで」

「い、いえ……」

あきらはこう言ったが、向かい風で体が冷えてきた。ポケットの中のハンカチまでもがずぶぬれになり、両手もふさがっているのでも拭くに拭けない。

「へくしっ」

「あらら」

「す、すいません……」

箱をかぶったままロジオンが縮み上がって謝った。そんな彼に、

リズが嫌味っぽく聞く。

「ていうか、何で開けたのよ？あなた息してないのに」

「いや勝手に壊れたんです。安物じゃないですかこれ」

「そりゃそうよ、そんなのしかないんだし。どこの世界に、人間入れる高い箱があるのよ」

「一応ありますよ。絶対入りませんけども」

「？……ああ、あなた野ざらしだったんだっけ」

「ええ。ですから、貴重な体験でした」

二人の会話を、あきらは理解できないまま黙って聞く。バイクは進み、やがて駐車したパトカーの前に差し掛かった。そこでリズがバイクを止める。

「っとと。どうされました？」

「ちよつと聞いてみる。あいつの格好は目立つし、保護されてるかも」

「あなたがそれを言いますか」

本心からロジオンが呆れるが、リズは全く意に介さずパトカーを覗き込んだ。警官が座っているのに気付くと、彼女はパトカーの窓ガラスを軽くノックした。その窓がすぐに開く。

「ちよつといいかしら？人を探してるんだけど」

リズが訪ねると、話しかけられたその警官は目を丸くして彼女を見た。

「こりゃ驚いた、ストームじゃないか」

「はい？」

警官の言葉に、リズは首をひねる。有名なアメリカンコミックのキャラクターなど、彼女は知る由もなかった。

「ああ失礼、ファンです。それで、御用は？」

「知り合いを探しているの。真つ黒な格好でとんがり帽子をかぶってるんだけど」

「んー？……ああ、そういうえば」

警官は無線機を取ってこう言った。

「こちらウエスト、ヤクの売人を知る連中が出ました、どうぞ」
「……は？」

11. どういう事ですか（後書き）

ロジオンがないと筆が進みません。

12. 分かってください

「で、何でこうなってるのよ」

リズが鉄格子に顔を近づけ、その向こうにいる主人に洗面を近づけた。コンクリートに囲まれた狭く薄暗い空間の中で、彼女のその声小さく反響する。響いた自分の言葉の意味に、彼女は情けない気分になった。主人もそれは同様らしく、顔一面に不満を浮かべて彼女に文句を言う。

「私が聞きたいくらいだ」

互いに顔を見合わせた後、主人とリズは同時にため息をついた。

「何でああなたが薬の売人なんかになってるの？」

心底呆れ果てたりズの声に、主人はすかさず反論する。

「なつた事はない。世話になった覚えもだ」

「まあ、そうですね」

ロジオンが投げやりに納得するのを見て、主人はうむ、と深く頷いた。

ロジオンには主人の考える薬というのが真つ当な方の事で、彼が薬を飲まないのもそもそも病気にかからないからだという事なのも分かっていった。主人の勘違いを解かないのも、どうせ聞き流されると踏んでいたからだ。さらに言うと、今それを指摘しても何の意味もないのも分かっていた。

「どうしたロジオン、浮かない顔だな」

彼の心境を知ってか知らずか、檻の中から主人が呑気に声をかける。

「そりゃあ気分も沈みますよ。ご主人様が檻に入っているのなど、従者としては目に入れたくもありません」

「何を言う。私から見れば、そっちが檻に入っているようだ」

「そりゃそうでしょうよ。何せ……」

ロジオンは首を巡らせ、薄暗い個室を見回した。

「私等全員、檻の中ですから」
鉄格子越しに主人を見、彼はため息をついた。

12. 分かってください

留置所の壁沿いには、お誂えのように四つ並んだ鉄格子がある。そのため四人はそれぞれ別の檻に入れられていた。ロジオンとリズは、主人の檻を挟む位置にいる。

「やっぱ無免許はダメか」

チツ、とリズが舌打ちをした。彼女が掴まる羽目になったのは、売人の関係者扱いされた後、運転免許の掲示を要求されたからだ。その後それを口実に警察へと連れていかれ、薬の売人とされた主人の関係者として、当たり前のように牢に入れられたのだった。それに相乗りしていたロジオンも同様だ。

「そりやそうですよ……」

ロジオンが主人の向こう側にいる彼女にも呆れて声をかける。その声に、リズが噛みついた。

「そつちこそ、『何ですぶ濡れなんだ』って聞かれたじゃない」

そう言われて、ロジオンは自分等を捕まえた警官の目を思い出した。ふやけた新聞紙にまみれたずぶ濡れのロジオンを見る目は、薄汚いホームレスに向けるものと同じだった。それがロジオンには腹立たしく、思い出したせいで気分がささくれ立った。

「必要な事をしてああなっただんです。馬鹿にする方がどうかしてます」

「良い事言うのね。でもあなた、説明できるの？」

こう言われてはロジオンも反論できなかった。

事情が事情だけに、どう話しても自分がゾンビだと他人に明かすことになる。普通なら与太話と一蹴されるだろうが、銃社会のこの国では身体検査も嚴重だ。自分の体が生きた人間のものでない事が知られば、その後どんな目に合わされるかロジオンには想像もつ

かなかつた。恐ろしい真似をされる事だけははっきりしてただけに、彼は何も言えなくなる。

「何だ、できないのかロジオン？ 恥ずかしい奴だなー」

「ええまあ誰かのおかげでね」

呑気な製作者への応対にも、ロジオンの素が現れる。余裕がなくなつてきた今の彼の眉間には深い皺が刻まれていた。

わずかに開いた口から吸いこまれた空気は肺に貯め込まれた後、苛立ちを含んで吐き出された。冷静になろうとしてやったその反射的な行動が、主人やリズの反感を買う。

「何だ、文句があるのか？」

「いえ、別に？」

普段なら流せるはずの主人の言葉に、ロジオンは棘のある返事をした。こうなると、リズも苛立ちからそれを無視できなくなる。

「拗ねてんの？ 案外子供ね」

「ええ、まあ御二方よりは、ね」

たっぷりと嫌味が込められたその一言は、リズのまなじりを吊り上げさせた。

「……ねえ、ロジオン。あたしがこのまま、大人しく檻にいて思つてるの？」

「え、出られるのか？」

主人が驚いてリズを見る。リズはそれに、つまらないジョークでも聞いたような顔を向けた。

「出来たらとつくにやつてるつての。あなた、あたしがどういう魔法女かも忘れたの？」

「ええ？ …… ああーそうだった、スマン」

主人は素直に謝った。

リズは対象を直接損傷させる魔法は一切使えないのだ。

主人がすぐに謝った事で場の空気が白け、全員の頭から熱が引く。リズがふう、と息を吐いて愚痴をこぼした。ロジオンにはなく、現状についてだ。

「檻は壊せないし、穴も掘れない。鍵開けも無理だし、魔女ついても不自由なのよね」

そう言って、彼女は肩をすくめた。

「それは皆一緒ですよ。私だって人間じゃないですけど、特別何かできる訳じゃないですし」

「私など何もできんぞ。強いて言えば……、あれ？」

そこまで言って、主人は眉をひそめた。

「どうかされたんですか？」

「いやな？ なーんか私、忘れてる事がある気がするんだ」

そう言いながら、主人は頭をこつこつと指で叩く。その反応に、

ロジオンはある期待を抱いた。

ロジオンは主人に吸血鬼である事を思い出してもらいたかった。

吸血鬼ならば、体を赤い霧状にして檻から出る事が出来る。

しかし、主人がそれを思い出す事はなかった。吸血鬼の空っぽの

頭蓋骨の中でノックに答えたのは、二つの鉛玉だけだ。

「なあロジオン、頭の中から音がするんだ」

ロジオンの主人を見る目に、失望がにじんだ。

今の主人の顔には、ロジオンから見て変わった所は一つもない。

銃痕など高い治癒力でとうにふさがっていたので、ロジオンは主人が撃たれた事など一切知らなかった。

「……何か入れたんですか？」

「入るのか？」

「いえ」

ロジオンが首を横に振る。

「だよなあ。何だろう、なぜかすつきりしないんだ。教会に落ちてからずっとな」

主人の一言に、リズとロジオンが顔を上げて彼を見た。少なからず負い目を感じていたリズが檻に顔を近づける。

「そ、そうなの？ 何か変わった事でもあった？」

「何て言うかなあ、ざわざわすると言うか、空気が肌に合わんと言

うか。あー駄目だ、うまく言えん」

そう言って主人は頭を掻いた。指が髪をかき分ける感触が、苛立つ彼の気をほんの少しだけ紛れさせる。リズとロジオンとが主人を挟んで顔を見合わせるが、互いに答えを求めての視線は相手に浮かぶ疑問の表情で解のないものになった。

二人が質問を重ねようとしたその時、主人が口を開く。

「……それより、さつきから気になっていたんだが」

主人は身を乗り出してリズの檻に顔を近づけ、彼女の向こう側を覗いた。

「あきらはどうした？全く元気がないようだが」

主人の言葉で、リズとロジオンはようやく彼女の存在を思い出した。主人の見ている方向を目で追い、彼女の様子に気付く。

あきらも彼等と同様、檻に入れられていた。座り込んだまま、壁をじつと見つめていた。時々かすれた小さな声で、うわごとのように何事か呟いている。一番近くにいたリズが耳を澄ませその声を拾う。

「ハハ、逮捕か……。日本でニュースになるんだらうな……。退学、かなあ……。ハハ」

乾いた声で笑うあきら。リズはこれに顔をひきつらせた。

「リズ、アキラはどうしたんだ？」

「……ええーっと、悪い、病気？みたいになってる」

「ふふ、何かもういいや、どうでも」

今の自分が置かれている立場に、あきは他の誰よりも深く落ち込んでいた。

両親に頼み込んでの留学先で、冤罪で犯罪者扱いされているのだ。彼女の無罪を証明する者は、彼女の知る限り誰もいない。ホームステイ先のアンナは干渉したがないし、引き取りに来てくれたとしても、すぐに追い出す算段を立てるのがあきらには容易に想像できた。学校にも知られれば居辛くなるし、日本の大学にも知られれば退学も十分考えられた。

もはや周りの見えていない彼女に、リズはどうにかしようとして声をかける。

「だ、大丈夫！すぐ出られるから！少し待ってて！」

リズは主人とロジオンとに目を移し、「どうしよう」と目で訴えた。これを受けて、主人がロジオンを見る。

「ロジオン、何かないか？」

「道具なんてありませんよ。全部没収されましたから」

ロジオンが困った顔をしてポケットの辺りを叩いてみせる。ぼんぼんと軽い音が上がるだけで、それが手元の寂しさを引き立てた。

「残念、私もだ。タオルもないし、帽子もない。ついでに言えば、金もない」

「いばれませんねえ」

ロジオンが目を細めて外に目を向ける。檻の外には広目に作られた通路と、反対側の壁沿いに並ぶ空の檻しかない。檻の中からだど格子と格子が重なって見えるせいで見通しが悪く思えた。一番出入り口に近い彼から見ても、檻の外から鍵を見つける事はできなかった。

「どうも鍵は、看守が持ち歩いているみたいです。ありません」

「じゃあ、待つしかないな」

「……そうね。万事塞翁が馬、なるようになるでしょ」

主人とリズとが床に腰を下ろし、落ち着いた様子を見せた。ロジオンがそんな二人の神経が信じられない。

「そんな、呑気な」

「大丈夫さロジオン。一生ここにいる訳でもないだろ？」

主人がそう言った時、足音を鳴らして看守が彼等の前に現れた。

「出る、釈放だ」

「な？」

主人の得意げな台詞に、ロジオンが口元をゆがめた。絵に描いたようなタイミングの良さに、あきらが我に返って外を見る。

「……意外と早かったのね」

リズが率直な感想を述べると、看守は面白くなさそうな顔をして言った。

「無免許の件じゃない。入れ」

看守はぶつきらぼうに言った後、他の看守と共に連行してきた男を檻の前に引つ張り出した。連れてこられた男は、青かった顔をさらに青くして主人を見る。

「そ、そうだ、こいつだ！」

男が震える手で檻の中の主人を指差す。主人が眉をひそめて首を傾けると、その中年はひつ、と上ずった悲鳴を上げた。主人はその男に見覚えがあった。

「あれ、お前確か……」

「銃で撃たれて平気な奴だ！悪夢だ！」

中年が錯乱してわめくように言う。怯えた様子を見せる男に主人は首を捻り、看守は馬鹿にしきつたような目を向けた。

「らしいな。目を覚まして来い」

看守は中年を押し出し、仲間の外に出すよう命じた。「本当なんだ」とがる声が遠ざかり、聞こえなくなった頃彼は言う。

「そういう訳だ。奴が全部自白している。薬物反応も出たしな。だから出な」

次々と檻の錠が外され、格子の扉が開いていく。腰を上げる主人とリズ、すつきりしない顔のロジオンに、疑いが晴れたと分かりほつとした表情を浮かべるあきら。

「出れるんですか？」

「そうだ。にしても、嬢ちゃんみたいな日本人が、なんであんなのと一緒に？」

看守は他の三人に対する態度とは違い、幾分柔らかくして彼女に接した。他の三人が奇抜とも言える風体をしていたのが理由としては大きい。問いを向けられ、彼女は返答に困った。

「えと、ですね……」

「何て事を聞くんた、失礼な」

牢から出た主人が看守のすぐ後ろに立って不服そうな表情を浮かべた。看守とあきららが口を挟まれる理由が分からずに彼を見る。黒い外套を着たその男は、看守を睨みつけて当たり前のように言った。

「フィアンセ同士が一緒にいて何がおかしい」

「……え!？」

あきらが裏返った声を上げた。血相を変えたロジオンが走って主人に駆け寄る。

「ちょ、ちよつとご主人様!何言ってるんです!」

「意思表示って大事だろ!」

「今する事じゃありません!ほら、来なさい!」

「何だ、離せ!」

ロジオンは有無を言わず主人をずるずると引きずっていく。慣れたその様子をあきらが見送っていると、看守が呆れた目で彼女を見下ろした。

「趣味が悪いな」

あきらは何も言えなかった。

檻の並ぶ部屋から出ると、リスはすぐに他の警官に呼び止められた。

「アンタはこつちだ」

「何ですよ?」

「無免許運転はやってたろ。その件だ」

うえ、と声を上げて彼女は顔をしかめた。

元より彼女に身元を保証するものなどない。長い時間拘束されれば、何かの拍子で魔女だとバレル可能性が出てくる。

「身元の確認もさせてもらうからな。大人しく……」

そこまで警官が言った時、リスが指を彼の目の前に突き出した。目をつぶされるかというほど近づいたその指先が、一瞬で円を描く。指先に現れたその光の円を、彼女はすぐにその指で弾いた。地面に

落ちた指輪のようになると回りながら、その円は警官の瞳の中に飛び込んだ。そのまま眼球の中にするりと入り、警官の視界を乱す。あつという間の出来事が間近で起こったため、警官は何をされたのかまるで分からなかった。

「な、何だ？あれ、う……っ」

警官が眩暈を起こし、膝をつく。白む視界から逃れようと強く目を瞑る。

リズが行ったのは魔法とも呼べないものだ。形になっていない組み立てかけの魔法を直接相手の目を通して頭に投げかけ、脳神経を混乱させたのだった。

「ごめんね」

もののついでのように謝ると、彼女は指先を上に向けた。

看守に案内されながら、主人達は出口へと向かっていた。掃除の行き届いた白い廊下を歩いていくと、職員や来客が次々と彼等のそばを通り過ぎていく。主人が返してもらった帽子をかぶり直す一方で、ロジオンは列の最後尾で疲れた様子のあきらにどう声をかけるか悩んでいた。

彼女からすれば、主人のせいで檻に入れられたようなものだ。しかも、主人はその点に気付いておらず、謝罪の一つもする様子がない。仮にも「結婚してくれ」と言った相手にこれでは、ロジオンとしても気がかりだった。これではあきらが気の毒だし、これから先主人にいい人ができるとも思えない。

ロジオンが気を揉みながら主人とあきらとを見比べていると、そこで彼はリズの不在に気付いた。

「あれ、リズ様はどちらに？」

先頭を歩く看守が振り向きもせずには答える。

「あの姉ちゃんなら無免許運転で交通課だ。お前さんも行くか？」

「結構です」

捕まる前、リズは二人が無免許である事を知らない旨を警官に伝

えていた。そのおかげで麻薬容疑が晴れた今、ロジオンとあきは主人ともども解放されたのである。

いくつもの受付が並ぶエントランスに着くと、看守は立ち止まって主人達に道を譲った。

「そんじゃ、もう捕まるなよ」

「もう捕まえるなよ」

そう言った主人の前を、ロジオンが早足で通り過ぎた。すれ違いざま、その手で主人の耳を掴む。痛い痛いといわめく主人が従者に引っ張られ、あきらが慌てて後を追った。

そのまま三人は看守の前を通り過ぎ、警察署を出て行った。

すでに太陽は西に傾き、辺りを朱に染めようとしていた。伸びた街路樹の影が道路やビルの壁面に横たわり、土の粉や排気ガスでできた細かい粒子が低い位置に雲を作る。すでに空に昇っていた欠けた月が、靄のかかった空の中で紅く光っていた。解放された耳を押さえて、主人がそれを見上げる。

「おお、赤いぞロジオン！あと痛かった」

「ええ、赤いですね。謝りません」

「いや赤いですけど……それが？」

あきらが物珍しげにする二人の様子に疑問を持った。汚れた空に浮かぶ赤い月など、ここではほぼ毎日見られる。

「何、初めて見てね。この辺ではああ見えるのかい？」

主人が帽子の唾を持ち上げてあきらを見下ろした。尋ねられたあきらが、彼の言葉の意味を掴みかねたまま答える。

「ええ、まあ。……主人さんはどんな所に住んでたんですか？」

「何、小さな城さ。林と山しか見えないような辺鄙な場所だね、朝も夜も寒くてかなわんよ」

「私としてはありがたいですがね」

主人とロジオンの言葉に、あきは首をひねった。具体的な地名が思い浮かばず、思いついた場所を言ってみる。

「ええと……、ルーマニア？」

「ん？いや、地名は知らないんだ。どうも覚えられなくてね」

「というか、言ったらダメですよ。迷惑な客だって、何人も来てたじゃないですか」

「そうだったか？何でまた？」

「だから、あなたが吸血鬼だからです」

「ハツハツハ、ロジオンしつこい」

主人がうんざりした顔でロジオンを見上げると、彼等の前でサイドカー付きのバイクが滑り込んできた。ハンドルを握っていた女がメットを取ると、長い銀髪が零れ落ちる。

「お、リズ」

「早く乗りなさい」

リズの言葉に、三人は素直に従った。

ここからあきらのホームステイ先までは、歩いて行くには遠すぎる。彼女が気を回して迎えに来てくれたのだと、三人ともがそう考えた。

「助かるよ。しかし、それじゃ乗れても三人だ」

「ロジオン箱に入れば三人よ」

「そういう問題でもないかと」

ロジオンがリズの提案に渋面を浮かべると、二、三人の警官が走って彼らに近づいてきた。何かと四人がそこに目を向けると、警官達は皆まなじりを吊り上げていた。

「おい待て！まだ手続きは済んでないぞ！」

「逃げる気か！」

口々に怒鳴りながら走ってくる警官達。四人はしばし近づいてくる彼等を見ていたが、やがて一斉に動き出した。主人がサイドカーに、あきらがリズの後ろに回り、ロジオンまでもがサイドカーに縛り付けられているクーラーボックスに入り込む。三人が所定の位置についた瞬間、リズはバイクを走らせた。警官達とバイクとの距離がみるみる開く。

「あ、こら！貴様等あ！」

続く声は四人の耳には届かなかった。バイクの排気音と風を切る音が彼らの耳で渦巻き、わずらわしい声をかき消していた。

四人の乗るバイクは道路に入り、行き交う自動車の流れに混ざる。

「……はは」

警察署から遠ざかるそのバイクの上で、あきらの口から笑いが漏れた。サイドカーに乗っていた主人がそれに気付く。

「どうした、あきら？」

「いや、その……、こんなの初めてで」

リズの腰にしがみついたまま、あきらは彼に言った。

「何がだい？」

まるで分っていない様子の主人に代わり、クーラーボックスに入っただまのロジオンが主人の後ろから口を挟む。

「警察から走って逃げてる事ですよ。普通の人はまずしません」

「はい。貴重な経験でした」

檻に入っていた事を振り返り、彼女はクーラーボックスに頷いた。彼女の言葉は本心からのもので、きちんと冤罪だと分かって出られたからこそ笑い話にできた。

「何だか、いたずらして逃げたみたいで。童心に返った感じですよ」

「え、君は悪い子だったのか！？」

「そついう訳じゃないですけど……」

今と変わらぬ子供時代を思い出し、彼女は笑う。今のような思いをしたのは初めてで、逃げ切った今ささやかな達成感もあった。その感覚は彼女が今まで無縁だったもので、同じ思いをした者がそばにいるのも不思議な感覚だった。共犯意識、とでも呼ぶには大げさかもしれないが、彼女はそれがなぜか心地よく思えた。

「でも、大体そいつのせいよ？」

リズが煽るように言うと、流石にあきらも黙り、難しい顔をした。

「何でだ？私は何もしてないぞ？」

「……当人は分かってないみたいです」

追い付けないと観念し、足を止める警官達。小さくなっていくバイクを荒れた息で見送り、悪態をつく事しか彼等にはできなかった。「くそつ、逃げられた!」

「はあ、はあ、惜しかったなあ」

追う事を諦めた警官達はすぐにしぶしぶ警察署へ戻っていった。無免許運転を取り逃した事など、彼等にすれば他の多くの犯罪に比べて些細なものだった。

署内のエントランスに戻った彼等を、別の警官が呼び止める。

「あの、さっきの連中は?」

「ああ、逃げられた。調書まだだったのに」

「いや、それより変なんだ」

抱えていた書類が開かれ、書面が警官達に晒される。

「何だこりゃ?」

「先に牢にいた男の、血液検査の結果だ。医者が話を聞きたがってたんだが……」

警官達は眉をひそめた。診断結果にはペンで乱雑にこう書かれていた。

『これは人間の血じゃない』

12. 分かってください(後書き)

お待たせしました、続きです。

毎度拙作を読んでくださり、本当にありがとうございます。

諸事情により二か月ほど書けなくなってしまいました。

ですが、必ず続きを上げますのでどうかそれまでの間お待ちください。

余談ですが、赤い月を初めて見た時はしゃいでしまい、

その時友人に「お前ホントに 歳か」と言われた事があります。

数年前の話です。

13・もう帰りましょう

13・もう帰りましょう

「伝える努力が必要だ」

テントの中で、主人は言った。二人寝そべるのがやっとという狭い空間を覆うドーム状のテントの生地を、型遅れのキャンプ用のランプが内側から照らす。とうに日は落ち、テントの外はすでに真っ暗だ。暖色系の光と濃い影とに彩られたその空間で、ロジオンはランプを挟んだ位置に座る主人に眉をひそめた。

「はあ」

主人が突飛な事を言い始めるのはいつもの事なので、ロジオンは半ば投げやりに頷いた。一方、主人にとって彼のこの反応はいつも通りのものだったので気を害する事もなく続きを語り始める。

「言わなきゃ分からないのか、などと言う輩がいるが、私からすれば奴らは間抜けだ。言わなきゃ分からない。当然だ。そういうのは資料を用意するなり身振りで示すなり、伝える努力を精一杯して初めて言っただけの良い台詞だ。そうは思わんか？」

「まあ、そうですね。あなたの口から言われると不思議な感じが」

主人の言う事は、まるで使われる側の人間が、使う側に対して抱える文句をそのまま口にしたかのような内容だった。彼に仕えるロジオンが奇妙に思うのも、当然と言えた。

「私として苦勞を知らぬ訳ではないぞ。相応の経験はある。……ところで」

そこまで言っただけで、主人はあぐらをかき直し、ロジオンに神秘的な表情を向けた。

「……私の何が悪いと思う？」

「言わなきゃ分からないんですか？」

率直な感想に、主人は「うむ」と深く頷いた。

「だってこっちに来てから私、ろくな目にあつてないぞ。さっきだって、帰るなりリズに「ロジオンから離れるな」などと言われたし！何が楽しくてお前と一緒にいないといけないのだ」

「こっちの台詞です。私だって、羽を伸ばしたいんです」

「その割りには仕事熱心に見えるぞ」

そう言う主人に言われ、ロジオンは不愉快そうに眉をひそめた。

今彼は城にいる時用の燕尾服を着ていた。外で着ていた外出用の服はずぶぬれで、彼にとつては体をむしばむ雑菌の温床になりかねなかった。急いで着替えたのだ。空の眼窩を隠すアイパッチを除けば、城にいる時と何ら変わりはない姿だった。

「これしか替えがないんです。その上あなたと一緒にとは、まるで気が抜けません」

「抜けばいいだろ」

「抜かせてくださいよ」

何をおかしな事を、と言わんばかりに主人が首を傾げ、ロジオンは自分の言い分が理解されない事に渋面を作った。

「……もういいです、寝ましょう」

「そうだな、夜も遅いし。しかし全く眠くないぞ」

「それでも寝てください。この国は夜、物騒だそうですよ」

「何を言う？夜は皆が寝るんだぞ。静かで、平和な時間じゃないか」
「何を言ってるんだアンタは」

ずれた事を言う主人にロジオンが呆れた。ロジオンの生前でも、夜こそ獣や夜盗が活発になる最も恐ろしい時間だった。現代でも、それが変わっているとは彼は思わなかった。

対して、主人は夜に気を付けるよう言い聞かされる習慣も機会もなかった。それどころか、今の彼には夜の出来事に関する記憶がすっかり抜けていた。その上、彼はそれに一切疑問を抱いていなかった。自分が眠っているはずだから、他の誰もが寝ているであろうという主観的な考えが、夜は平和だなどという結論を彼に与えていた

のだった。

「どうせ眠れぬなら、いつそ散歩に繰り出すのも面白い。出るか」
言うや否や、主人は腰を上げてテントを出ようとした。それを慌
ててロジオンが止めに入る。

「ちょ、ちよつと！やめてください！」

「なぜだロジオン、今は夜だぞ」

「だから駄目なんですってば！」

「ああもう、朝も駄目夜も駄目、では私は外に出られんぞ」

帽子も外套も身に着けようとせず、主人は立膝で身を乗り出す
ようにしてテントから頭を出す。テントの外ではすでに夜の帳が下
り、家屋から漏れる申し訳程度の明かりと街灯とが、ようやく足元
の芝生を照らす程度に明かりを投げかけていた。もっとも、夜目の
効く主人にとつては、これらは要らぬ助けも同然だった。

「問題ない、すぐ帰る。月もないから肌も焼けんぞ、止める理由が
ないだろう」

「あなたを一人にするなど、リズ様から仰せつかっています」

「お前、私が主人って忘れてない？」

「だからこそ、です」

「それどっち？従者だから？それとも忘れてたから？」

「いいから大人しく寝てください」

面倒くさくなつて、ロジオンはやや声を張つて言った。しかし、
これが主人の反感を大きく買った。

「もういい。お前が私を止めるなど、本末転倒極まりない。私は勝
手にするぞ！」

「あ、ちよつと！」

ロジオンは主人を止めようと手を伸ばすが、主人はその手を逃れ
テントから飛び出した。ロジオンが慌ててテントから頭を出すと、
すでに主人は庭の芝生を横切り、道路に入つてその場を去ろうとし
ていた。

「……ええい、面倒くさい！」

やむなく、ロジオンもテントを出た。

「本当、ごめんなさいね」

ベッドで横になるあきらの耳に、リズの声が飛んだ。聞き間違いかと思い、あきらはリズの寝袋がある方向に寝返りを打つ。床に転がる寝袋の中で、リズが目を開いているのに気付いて、尋ねる。

「何がですか？」

「今日の事よ。楽しかったって言ってたけど、それでも原因はあたし等でしょ？あなたの生活を乱したんだから、それもお詫びしないと。……あ」

何かを思いついた声を上げ、リズが寝袋に入ったまま身を起こした。彼女は寝袋の中でもぞもぞしていたが、やがて寝袋の内側からジッパーを少しだけ開いて片手を出した。その手の指をくるりと回す。

「魔法が一つ、欲しくない？」

「え？」

あきらは耳を疑った。起き上がって見ると、リズは彼女の驚きを見透かしたように薄く微笑んでいた。

「一個だけ、あなたに魔法をあげる。魔法の使う本物の魔法よ、どう？」

あきらにとつては寝耳に水だった。同時に、魅力的な提案でもあった。出会いからしてリズが本物の魔女である事は分かっていただけに、嫌が応でも期待は高まる。声が弾みそうになるのを押さえ、あきらは尋ねた。

「ど、どんなものですか？」

「それも選ばせてあげる。といつてもあたし、派手なの覚えてないんだけどね。やってた事も、医者 of 真似事だったし」

「い、医者？」

思いもよらなかつた発言に、あきらがおつむ返しに尋ねる。

「そうよ。あたしがまだ若い頃は、医学もあんまり発達してなかつ

たの。処方箋よりおまじないが効いてた時代よ？引く手あまたってあの事ね」

楽しそうに昔を語るリス。あきはふと、そんな彼女に疑問を持った。

「……リスさんって、一体いくつなんですか？」

あきがそう聞いた途端、リスは真面目な顔になって黙り込んだ。その様子に、あきはまずい事を聞いてしまったのかと顔をこわばらせる。

「……魔女狩りはマジやばかった。あたしは運が良かった」

「……すみません」

あきは何も言えなくなった。リスの経験したであろう出来事について彼女は知らないし、どれだけ知ろうとしてもリス本人の経験に勝る内容を実感する事はできないだろうと容易に想像できたからだ。迂闊な事を聞いたと、いまさらながら反省する。

気まずい空気を打ち破ったのは、リスの方だった。

「とまあ、魔法の効果は保障するから、どう？代価はなしよ」

「え、ええ？うーん……」

改めて、あきは悩んだ。

魔法をもらえるとというのも未だに半信半疑である上、もらったとしても、何をすればいいのかまるで思い浮かばない。

「何でもいいのよ？ああしたいとかこうしたいとか、何かない？言ってくれば、あたしが選んであげるけど、どう？」

渡そうという当人にそう言われてると、あきらも幾分気が楽になつてきた。分からない事なら、いっそ任せるのも手だ。

「じゃ、じゃあ、ですね……」

あきはおそおすと、自分の望みを明かした。

「結局、付いてくるんだな」

「ええ、仕方なく」

主人とロジオンは並んで歩きながらそんな事を言い合った。彼等

が今いる場所からもつと離れたダウンタウンならば、昼間とは違う意味でにぎわう時間だ。あきらのホームステイ先の周辺は比較的治安が良く、そのためこの時間、二人のいる通りには人がいなかった。時折遅れの高級車が逃げるように走り去るくらいで、それが通り過ぎた後の静けさは、夜闇の中で一層引き立ったものになっていた。「なんとというか、意外につまらない」

「何を期待してたんですか？」

「ここは異国の地だぞ？もつとこつ、出会いがないかと思ってな」

「出会いって……。女漁りに来たみたいに言わないでください」

「お前こそその言い方はやめる。私が欲しいのは、お嫁さんだ」

ややメルヘンチックなその物言いに、ロジオンは思わず苦笑した。

「お嫁さん、ですか。そういうえば、あきら様に言った事は……」

「もちろん本心さ」

主人の明け透けな言葉に、ロジオンは首を捻った。

ロジオンから見て、あきららは凡庸な人間だった。醜いという訳ではないが、目を引くような魅力もないし心に訴えるようなものもない。その辺りから無関係な人間と彼女とを入れ替えても、何ら影響はないとすら思っていた。

「彼女を見ているとな、何だか、こつ……。な。心の中の、純粋な部分が刺激されるんだ。やましい意味じゃないぞ？」

主人の言葉に、ロジオンははつとした。

主人は、吸血鬼だ。本人はその事を忘れているが、それでも吸血鬼としての本質がすべて失われた訳ではない。今は眠っている吸血鬼としての本能が、彼女を獲物と見定め目覚め始めているのかもしれない。ロジオンに吸血鬼の感性はないが、若い女の血となれば、肉汁のしたたるステーキのように見えているのかもしれないという推測は立てられた。

「……残酷ですが、ご主人様の言うその感覚はあなたの思うようなものではないかと」

「分かったような事を。お前が私の何を知ってる」

「ずっと世話をしたのは誰だと思ってるんですか」

二人はお互いに対し、付き合いきれないと言わんばかりの表情を浮かべた。

ふと、主人の目がいきなり前に向けられる。

「どうかしました？」

ロジオンが訪ねるが、主人は答えない。何かに気付き、それをじっと見つめているようだ。

やがて、ロジオンの目にもその姿が見えるようになってきた。視認し辛かったのは、決してロジオンの目が悪いのではない。近づいてくるものは、黒い上下のスーツで身を固めた数人の男達だった。人数は四人で、その視線はどれも主人に向けられていた。

男達が主人達の前で足を止める。二人も、そこで歩みを止めた。

いぶかるロジオンの前で、男の一人が主人に言った。

「探したぞ。本当に生きてるとはな、化け物」

主人は首を捻り、ロジオンを見上げた。

「知り合いか？」

「あなたの事ですよ」

「とぼけるな、昼間会ってるだろ」

男が拳銃を取り出し、主人に向けた。素早く慣れたその動作に、咄嗟にロジオンが主人の前に出る。

「……何の用ですか？そんなものを取り出して」

「そつちこそ何だ。こつちはその男に用がある」

ちき、と立て続けに固い音が三つ。他の男達が銃を取り出し、ロジオンに向けた音だ。ロジオンは自分に向けられる四つの銃口を見回し、眉根をひそめた。

「そんな玩具が、脅しになると？」

男達はその言葉を怪訝に思ったが、銃を持つ手は下ろさない。しかしそのうちの一人、主人を知る男が血相を変えた。

「お、お前もまさか……」

「まさか、何です？非常に不名誉な扱いを受けた気がしますが」

「お前、「も」で判断したろ」
「そりゃあ」

そうですよ、とロジオンが言いかけて主人に目を向ける。

そこで銃声が上がった。ロジオンの頭が大きく後ろに傾ぎ、彼の足が片方面に浮く。目を丸くした主人は、あつけにとられたまま右から左へロジオンの体が倒れていくのを眺める。主人が彼から目を離れたのは、どう、と音が立ってからしばらく経った頃だった。

音という音がぼっかりと抜け落ちたような間。主人は男の手から細く上がる煙をまじまじと見る。その煙が上に上がるのを目で追い、主人はようやく男の正体を思い出した。大きな声で相手を指差し、今さらのように驚く。

「……あ、お前、蜂の時の！」

「やっとか分かったか」

倒れ伏したロジオンを見、男が鼻で笑う。それに、主人は面白くないと言わんばかりに顔をしかめた。

「何の用だ、一体」

「おやおや、ずいぶん冷静だな」

男は余裕を顔ににじませそう言った。

「こつちはお前を探していたんだ。お前のせいで、この辺のジャンキーが騒ぎ出した。妙な噂が広がればヤクがはけなくなりかねねえ」
男の意見に賛同するように、三つの銃口が主人に向けられた。

男からすれば、もはや主人を恐れる理由はなかった。銃が効かないのは分かっているが、人数を揃えていれば後はどうにでもなる。そう考えていたからだ。

銃を構えたまま、男達が慣れた足取りで主人を囲もうと動き始める。主人は彼等を見回し、不思議そうに首を捻る。

「何だ、踊る気か？そんなステップは知らんぞ？」

「どんな勘違いだ」

男が呆れると、後ろに回っていた別の男が主人に銃を構えたまま、静かに尋ねた。

「山か海、どちらで寝たい？」

主人はその問いかけに、真面目に悩んだ。

「え？うーん……そうだな。山は見飽きた。寒いし、時たま寂しくなる。何より、客が来ない。だから、貴族として振る舞おうにも張り合いがない。聞けば、海には人がたくさん来るらしいからな。海がいい」

「そうかそうか、良かったな。明日からそこがお前のベッドだ」

それが合図だった。言うと同時に、その男は主人の後ろに回っていたもう一人と同時に主人の腕を掴み、肩を押さえた。

「お、な、何だ？」

強引に組み伏せられ、主人も流石に驚いた。その時シャドウから車が滑り込み、彼らの前で止まった。申し合わせたようにドアが内側から開き、主人を押さえた二人がそこへ彼を押し込めようと動き始めた。

「やめる痛い、どういつつもりだ？」

何が何だか分からないでいる主人だが、答える者はいない。車内のシートは彼を待ち受けているかのように空いており、今の主人に不吉なものを感じさせた。夜の暗さが、その予感を一層確かなもののように思わせる。

表情を曇らせる彼に、彼と以前会った事のある男が言う。

「コンクリの中で寝てきな」

「こんくり？何だそれは！」

主人はもがくが、彼を押さえる腕はびくともしない。元からさほど力の強くない主人は、この状況に文字通り手も足も出なかった。

主人の頭が車内に突っ込まれる。そのまま一気に押し込まれそうになったその瞬間、主人を押さえる男の一人が、肩に違和感を感じて振り向いた。

男の肩に乗っていたのは、手だった。男はその手から肘、肩へと視線を移し、誰の手かを確認する。分かった瞬間、男は上ずった声を上げて主人から手を離れた。いきなり片手が自由になった主人と、

負担の増えたもう一人の男とがバランスを崩し何事かとそこに目を向ける。押さえている方の男が、仲間に声をかける。

「おい、どうし……」

た、という言葉は途中で男の喉から消えた。主人から手を離れた方の男は、腰を抜かしたまま慄きながら傍にいるものを見上げていた。顔を俯かせ、二本の足で立っていたのは

「おお、ロジオン」

主人が、忘れ物を思い出したような声を上げてその名前を呼んだ。対して、男達の驚きは並ではなかった。銃で撃たれたはずの男が、自力で起き上がったのだから無理もない。特に、主人を撃つた事のある男にとっては覚えのある光景で、なおさら信じられなかった。

「な、何で生きてる!？」

主人を撃つた事のある男が、震える手で銃を構えた。問いかけに對し、ロジオンはゆっくりと顔を上げる。

ロジオンの頭を開いた穴からは血がこぼれ、濡れそぼった髪の毛からは赤黒い滴が垂れている。そのせいで、青白い顔の上には、いくつも赤い線が走っていた。

闇に慣れた男達の目には、ロジオンの目玉が眼窩からこぼれているのまで見て取れた。目玉についた糸のような視神経は眼窩の奥につながっており、目玉を左右に揺らしている。

銃弾を至近距離で受けた衝撃を顔に残したまま、ロジオンはこんな言葉を口にした。

「……死んでますよ」

「ゾンビをあんなに恐れるとは、意外に信心深い連中でしたね」

眼窩から飛び出していた眼球を直しながら、ロジオンは呑気な感想を漏らした。顔に流れていた血もすでに拭き取られ、頭の穴も髪型を整えた事で隠されている。血の流れなどとうに止まっているので、これ以上出血する心配もない。彼にとっては数少ない、ゾンビである事が便利に思える一時だった。

「あいつ等なんで逃げたんだろっな？ゾンビなど珍しいものでもあるまい」

「ここらじゃ見られないんですよ」

主人の疑問を、ロジオンは軽く流した。

「それより、もう帰りましょう。ずいぶん遠出してしまったようですし、あきら様を心配させてしまうかと」

「ん、そうか。確かに、これ以上歩いてても良い事はなさそうだ」

素直に納得し、主人は元来た道を引き返した。ロジオンは黙ってそれを追う。

少し歩いた頃、主人はロジオンにこう言った。

「ロジオン、私は一つ賢くなったぞ」

「何です？」

ロジオンは主人が言わんとする事を予想した。

夜出歩くのが危ない事が、関わってはいけない人間がいる事が。

反省につながる答えを待つ彼に、主人は自慢げに答えた。

「黒い筒を鳴らすと、蜂が来るんだ」

ロジオンは何も言えなかった。

余談だが、この後数年間この地域での麻薬絡みの犯罪は激減した。

”ヤクを扱うと、どこからともなく怪物が現れる”という噂が立ったからと言われるが、真偽は不明である。

すでに寝付いたリズを起こさないように、あきららは上半身をベッドから起こした。

指を立て、その手でくるりと円を描く。指先の軌跡が、空中で光の線となって浮かんで残った。

「これが、魔法……」

13・もう帰りましょう(後書き)

お待たせしました、続きです。

私事が無事解決した後、執筆を再開したのですが、ブランクにも関わらず思っていたよりもすらすら書けました。どうも私は、私が思っていたよりも彼等が好きみたいです。

ではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9533m/>

外に出さない

2011年12月17日03時20分発行